

県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

田 村 遺 跡

2004年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香 川 県 土 木 部

県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

田 村 遺 跡

2004年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香 川 県 土 木 部



調査区全景（南から）



SK03 定盤検出状況（南から）



SD06 出土遺物



SK03 出土遺物



SK03 出土遺物

序 文

香川県教育委員会では、四国横断自動車道やサンポート高松の整備、また県道の建設や改良工事など大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行業務を、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施しております。

このたび『県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡』として刊行いたしますのは、県道高松丸亀線の拡幅に伴い、平成10、11年度に発掘調査を行った丸亀市田村町に所在する田村遺跡についてであります。この遺跡の発掘調査では、県内で初めて、平安時代後期の、梵鐘を鋳造していた遺構が確認されました。従来より、田村遺跡周辺は、古瓦の散布状況や塔心礎が残存していることから古代寺院跡と推測されていました。寺院の中心的な施設は確認されなかったものの、全国的にも珍しい梵鐘の鋳造遺構が見つかったことは、古代の丸亀平野のようすを復元する上で大変貴重なものと考えられます。

本報告書が香川県の歴史を考える資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、香川県土木部道路建設課及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

香川県教育委員会

教 育 長 兼 脇 宏

例 言

1. 本報告書は、県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で、丸亀市田村町に所在する田村遺跡（たむらいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課からの委託を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施した。
ただし、官民境界となる水路予定部分の箇所については、香川県教育委員会が調査担当として調査を実施した。
3. 発掘調査は、平成10年度（香川県教育委員会担当）と平成11年度（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター担当）の2カ年で実施した。
発掘調査の詳細および担当は、本文中に記したとおりである。
4. 調査および整理作業にあたっては、次の機関や方々の協力を得た。記して謝辞を表したい。
（順不同・敬称略）
香川県土木部道路建設課・香川県善通寺土木事務所・丸亀市教育委員会・地元各自治会・地元各水利組合・百十四銀行・五十川伸矢・堀家守彦・東信男
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は宮崎の協力を得て、北山が担当した。
6. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載の図面内にスケールで示した。
 - (2) 方位は、国土座標第Ⅳ座標系の北を示す。
 - (3) 水平基準線の数値は、海拔高を示している。
7. 本書に用いている遺構記号は次のとおりである。

SA	構列	SH	竪穴住居跡	SB	掘立柱建物跡	SD	溝状遺構
SK	土坑	SP	柱穴	SX	性格不明遺構		
8. 挿図の一部に、国土交通省国土地理院地形図 丸亀（1/50,000）を使用した。

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 立地と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	
第1節 基本土層序	13
第2節 古墳時代以前の遺構と遺物	16
第3節 古代の遺構と遺物	19
第4節 中・近世の遺構と遺物	54
第4章 自然科学的分析	
田村遺跡の残留磁化測定による年代推定	
梵鐘遺構の年代推定	63
放射性炭素年代測定	69
第5章 まとめ	
第1節 田村遺跡と田村庵寺について	71
第2節 梵鐘鑄造遺構および鑄型について	75

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図(1)
第2図 遺跡位置図(2)
第3図 調査区割図
第4図 田村遺跡周辺の条里地刺遺存状況
第5図 周辺の遺跡図
第6図 遺構配置図
第7図 西壁土層断面図(北)
第8図 西壁土層断面図(南)
第9図 S H01平・断面図
第10図 S H02平・断面図
第11図 S D01土層断面図
第12図 S D01出土遺物実測図
第13図 S P045平・断面図、出土遺物実測図
第14図 S P161平・断面図、出土遺物実測図
第15図 S P163平・断面図、出土遺物実測図
第16図 S X04土層断面図
第17図 S X04出土遺物実測図
第18図 古墳時代以前包含層出土遺物実測図
第19図 S A01平・断面図
第20図 S B04平・断面図、出土遺物実測図
第21図 S B05平・断面図
第22図 S B05出土遺物実測図
第23図 S D05遺物出土状況平・断面図
第24図 S D05出土遺物実測図(1)
第25図 S D05出土遺物実測図(2)
第26図 S D05出土遺物実測図(3)
第27図 S D05出土遺物実測図(4)
第28図 S B01平・断面図
第29図 S B01出土遺物実測図
第30図 S D07土層断面図
第31図 S D07出土遺物実測図
第32図 S P152平・断面図
第33図 S B03平・断面図、出土遺物実測図
第34図 S D02土層断面図
第35図 S D02出土遺物実測図
第36図 S D03土層断面図
第37図 S D03出土遺物実測図
第38図 S D13土層断面図
第39図 S K01平・断面図
第40図 S K01出土遺物実測図
第41図 S K03平・断面図
第42図 S K03出土遺物実測図(1)
第43図 S K03出土遺物実測図(2)
第44図 S K03出土遺物実測図(3)
第45図 S K03出土遺物実測図(4)
第46図 S K03出土遺物実測図(5)
第47図 S K03出土遺物実測図(6)
第48図 S K03出土遺物実測図(7)
第49図 S K03出土遺物実測図(8)
第50図 S K03出土遺物実測図(9)
第51図 S K03出土遺物実測図(10)
第52図 S K03出土遺物実測図(11)
第53図 S K03出土遺物実測図(12)
第54図 S K04平・断面図
第55図 S K04出土遺物実測図
第56図 S K08平・断面図
第57図 S K11平・断面図
第58図 S P003平・断面図、出土遺物実測図
第59図 S P011平・断面図、出土遺物実測図
第60図 S P071平・断面図、出土遺物実測図
第61図 S P078平・断面図、出土遺物実測図
第62図 S P085平・断面図、出土遺物実測図
第63図 S P140平・断面図、出土遺物実測図
第64図 S P172平・断面図、出土遺物実測図
第65図 S P197平・断面図
第66図 S P200平・断面図、出土遺物実測図
第67図 S X01・02平・断面図
第68図 S X01出土遺物実測図
第69図 S X02出土遺物実測図(1)
第70図 S X02出土遺物実測図(2)

第71図	S X02出土遺物実測図 (3)	第85図	S P095出土遺物実測図
第72図	S B02平・断面図	第86図	S P193平・断面図
第73図	S B02出土遺物実測図	第87図	古代以降包含層出土遺物実測図
第74図	S D04土層断面図	第88図	段階交流消磁測定結果 (試料No 5)
第75図	S D04出土遺物実測図	第89図	過去2,000年間の地磁気永年変化曲線 (Shibuya,1980)
第76図	S D06土層断面図	第90図	地磁気永年変化曲線 (Shibuya,1980) の 一部と梵鐘錘型底部焼土の磁化方向
第77図	S D06出土遺物実測図 (1)	第91図	遺構配置図
第78図	S D06出土遺物実測図 (2)	第92図	和鐘各部分の名称
第79図	S D06出土遺物実測図 (3)	第93図	梵鐘の鑄造模式図
第80図	S D11土層断面図		
第81図	S D12土層断面図		
第82図	S D12出土遺物実測図		
第83図	S K09平・断面図		
第84図	S K09出土遺物実測図	付 図	田村遺跡全体遺構配置図

表 目 次

第1表	調査体制	第7表	梵鐘鑄造遺構出土遺跡一覧
第2表	整理作業工程表		
第3表	周辺の遺跡一覧	観 察 表	
第4表	梵鐘遺構焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)	1. 土器類観察表	
第5表	梵鐘遺構の残留磁化測定による年代推定	2. 瓦類観察表	
第6表	放射性炭素年代測定結果	3. 鋤型類観察表	
		4. 石器・鉄製品観察表	

図 版 目 次

巻頭図版1	調査区全景 (南から) S K03定盤検出状況 (南から)	図版3	作業風景 (北から)
巻頭図版2	S D06出土遺物 S K03出土遺物 S K03出土遺物	第1次調査	遺構検出状況 (南から)
図版1	北調査区全景 南調査区全景	第1次調査	完掘状況 (北から)
図版2	調査着手前の田村遺跡 (北から) 田村廃寺 塔心礎	図版4	第1次調査 完掘状況 (北から) 北調査区全景 (南から)
		図版5	南調査区全景 (南から) 南調査区全景 (北から)
		図版6	南壁土層断面 (北から) 西壁土層断面 (1) (東から)

- 図版7 西壁土層断面(2)(東から)
西壁土層断面(3)(東から)
- 図版8 西壁土層断面(4)(東から)
SH02検出状況(南から)
- 図版9 SH02全景(北から)
SH02近景(南から)
- 図版10 SD01土層断面(東から)
SP045土層断面(南から)
- 図版11 SP161土層断面(南から)
SA01(P1)土層断面(南から)
- 図版12 SA01(P2)土層断面(南から)
SA01(P3)土層断面(北から)
- 図版13 SA01(P4)土層断面(西から)
SB04(P1)土層断面(南から)
- 図版14 SB04(P2)土層断面(南から)
SB04(P3)土層断面(南から)
- 図版15 SB04(P6)土層断面(南から)
SB04(P6)土層断面(南から)
- 図版16 SB04(P8)土層断面(南から)
SB05(P9)土層断面(南から)
- 図版17 SB05(P7)土層断面(南から)
SB05(P3)土層断面(南から)
- 図版18 SB05(P2)土層断面(南から)
SB05(P1)土層断面(南から)
- 図版19 SD05遺物出土状況(東から)
SD05全景(西から)
- 図版20 SB01(P4)土層断面(南から)
SB01(P5)土層断面(北から)
- 図版21 SB01(P6)土層断面(南から)
SB01(P3)土層断面(北から)
- 図版22 SB03(P7)土層断面(南から)
SB03(P8)土層断面(南から)
- 図版23 SD02土層断面(東から)
SD03土層断面(東から)
- 図版24 SK01土層断面(南から)
SK03梵鐘鋳造遺構検出状況
- 図版25 第1次調査SK03遺物出土状況(南から)
第1次調査SK03土層断面(西から)
- 図版26 SK03上層完掘状況(東から)
SK03上層完掘状況(北東から)
- 図版27 SK03上層土層断面(西から)
SK03上層土層断面(東から)
- 図版28 SK03定盤上面検出状況(東から)
SK03定盤上面検出状況(南から)
- 図版29 SK03定盤検出状況近景(南から)
SK03定盤断面状況(東から)
- 図版30 SK03定盤断面状況(北から)
SK04土層断面(南から)
- 図版31 SX01・02土層断面、遺物出土状況
SX01・02遺物出土状況(南から)
- 図版32 SX01・02遺物出土状況
SX01遺物出土状況(南から)
- 図版33 SX02遺物出土状況(東から)
SD04土層断面(南から)
- 図版34 SD06・07拡張部土層断面(東から)
SD06遺物出土状況(南から)
- 図版35 SK09土層断面(北から)
SK03熱残留磁気測定資料サンプリング
- 図版36 SK03発泡ウレタンによる切取状況
現地説明会の様子
- 図版37 古墳時代包含層出土遺物
SB01出土遺物
SB03出土遺物
SD03出土遺物
- 図版38 SD05出土遺物(1)
- 図版39 SD05出土遺物(2)
- 図版40 SD05出土遺物(3)
- 図版41 SD05出土遺物(4)
- 図版42 SK03出土遺物(1)
SP071出土遺物
SP011出土遺物
SP172出土遺物
- 図版43 SK03出土遺物(2)
- 図版44 SK03出土遺物(3)
- 図版45 SK03出土遺物(4)
- 図版46 SK03出土遺物(5)

- 圖版47 S K03出土遺物 (6)
- 圖版48 S K03出土遺物 (7)
- 圖版49 S K03出土遺物 (8)
- 圖版50 S K03出土遺物 (9)
- 圖版51 S K03出土遺物 (10)
- 圖版52 S K03出土遺物 (11)
- 圖版53 S K03出土遺物 (12)
- 圖版54 S K03出土遺物 (13)
- 圖版55 S X01出土遺物
S X02出土遺物 (1)
S X02出土遺物 (2)
S X02出土遺物 (3)
S B02出土遺物
- 圖版56 S X02出土遺物 (4)
- 圖版57 S X02出土遺物 (5)
- 圖版58 S X02出土遺物 (6)
- 圖版59 S X02出土遺物 (7)
- 圖版60 S D04出土遺物
S D06出土遺物 (1)
S D06出土遺物 (2)
- 圖版61 S D06出土遺物 (3)
- 圖版62 S D06出土遺物 (4)
- 圖版63 S K09出土遺物
古代以降包含層出土遺物

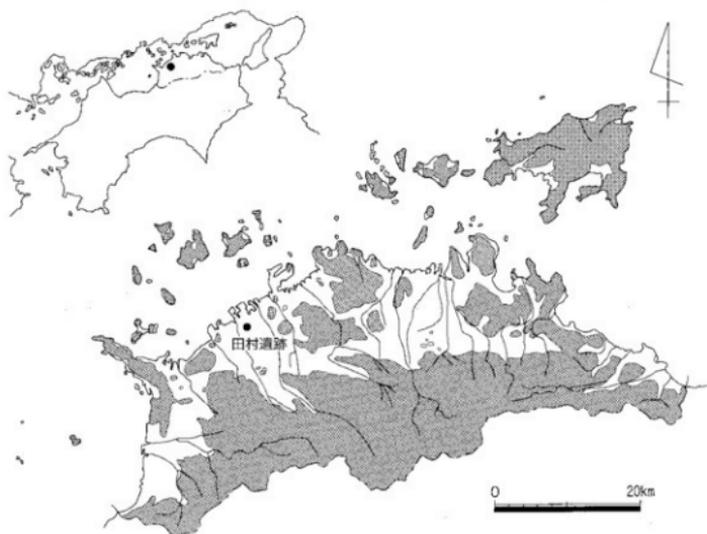
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

県道33号線（主要地方道高松丸亀線）は江戸時代以降、高松街道として、戦後は国道11号線として、長い間丸亀市と高松市を結ぶ幹線道路であった。国道11号バイパスが昭和50年代後半に完成してからは、県道33号線としてその機能を果たしてきた。さらに、近年の自動車等の交通量の増加や郊外型のショッピングセンターの相次ぐ建設に伴い、丸亀市中心部での混雑が顕在化してきた。この混雑の緩和を目的として丸亀市内での県道33号線の拡幅を中心とする道路改良事業が計画された。

これを受けて、平成10年度に県教育委員会では、工事予定箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地である田村廃寺に隣接すること、および丸亀市教育委員会によって実施された隣接地での試掘調査の結果から、当該地の地下に埋蔵文化財が所在するものと判断し、土木部道路建設課と協議を行い、以下の点について合意に達した。

- ・事業対象地のうち、埋蔵文化財が包蔵されている部分（約800m²）の記録保存を前提とした発掘調査を実施する。
- ・早急に工事の着工が必要な隣接地との官民境界部分（約150m²）については県教育委員会文化行政課が調査を担当する。



第1図 遺跡位置図(1)

・残地の約650m²については平成11年度の県内大規模発掘調査事業に組み込み、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターへ調査を委託する。

・発掘調査および整理作業にかかる費用については、文化財保護法による原因者負担の原則に基づいて、事業者が負担する。

なお、便宜上、本書では、県教育委員会文化行政課による発掘調査を第1次調査、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査を第2次調査と呼ぶこととする。次節において、調査の経過と概要について述べる。

第2節 調査の経過

1. 第1次調査

文化行政課による第1次調査は、平成10年6月29日に着手し、7月15日をもって終了した。調査面積は150m²、実働5日間というきわめて短期間の調査であったが、梵鐘の鑄造遺構と考えられる大型の土坑の一部や梵鐘の鑄型片、多数のピット群が出土し、大きな成果をあげた。

2. 第2次調査

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによる第2次調査は、第1次調査の西側に隣接する650m²を対象に、平成11年9月1日から、同年10月31日まで行い、第1次調査で検出していた「梵鐘鑄造遺構」の全体像の把握や田村庵寺と密接な関係があると考えられる溝状遺構などを検出した。また、破壊した溶解炉の炉壁を一括して投棄したと考えられる大型の遺構なども検出した。

3. 調査体制と調査方法

第1次調査は、県教育委員会の直営によって実施し、第2次調査は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、調査員2名および調査技術員1名の3人1班体制で行った。調査体制の詳細は第1表のとおりである。

調査区は幅約8m、長さ約100mと非常に狭小であったため、隣接する民地への進入路を境に南北2つの調査区分けて調査を実施した。調査区は現県道の拡幅部分にあたるため、基準となるポイントは現県道のセンターラインから東へ5mのところへ設置し、このラインを基準に調査を行い、最終的に国土座標系に組み込んだ。

第1表 調査体制

香川県教育委員会 文化行政課			
	平成10年度	平成11年度	平成15年度
総 務	課 長 小原 克己	課 長 小原 克己	課 長 北原 和利
	課 長 補 佐 北原 和利	課 長 補 佐 北原 和利	課 長 補 佐 森岡 修
総 務	副主幹兼係長 西村 隆史	副主幹兼係長 西村 隆史	主 任 香川 浩二
	係 長 中村 慎伸	係 長 中村 慎伸	主 査 須崎 陽子
	主 査 三宅 陽子	主 査 三宅 陽子	主 任 主 事 八木 秀憲
	松村 崇史	松村 崇史	
埋蔵文化財	副 主 幹 渡部 明夫	副 主 幹 渡部 明夫	副 主 幹 大山 真充
	係 長 西村 尋文	係 長 西村 尋文	主 任 片桐 孝浩
	主 任 技 師 塩崎 誠司	主 任 技 師 塩崎 誠司	文化財専門員 佐藤 竜馬
			主 任 技 師 松本 和彦
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総 務		所 長 菅原 良弘	所 長 中村 仁
		次 長 小野 善範	次 長 渡部 明夫
総 務		副主幹兼係長 田中 秀文	副 主 幹 野保 昌弘
		係 長 新 一 郎	係 長 多田 敏弘
		(6.1~)	
		主 任 主 事 西川 大	
		(~5.31)	
調 査		主任文化財専門員 大山 真充	主任文化財専門員 真鍋 昌宏
		文化財専門員 増井 泰弘	主任文化財専門員 西岡 達哉
		宮崎 哲治	文化財専門員 北山健一郎
		調 査 技 術 員 糸山 晋	

4. 整理作業

整理作業は平成15年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。出土遺物は溶解炉の破片も含めて約70箱で、整理期間は平成15年4月から7月までの4ヶ月間である。整理作業の工程は第2表のとおりである。

第2表 整理作業工程表

項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
接合・復元	■											
実測	■	■	■									
遺構図トレース			■									
遺物図トレース			■	■								
写真撮影			■									
編集			■	■								
入稿									○			
校正										■	■	
印刷												○

なお、発掘・整理作業に携わった方々は、以下のとおりである。(五十音順)

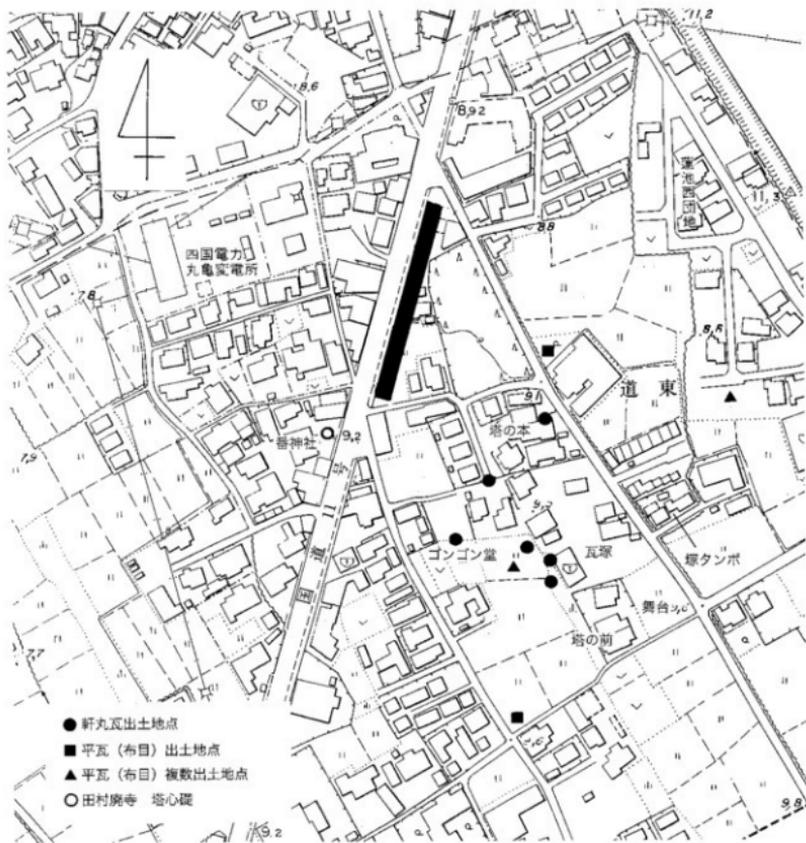
発掘調査

・第2次調査

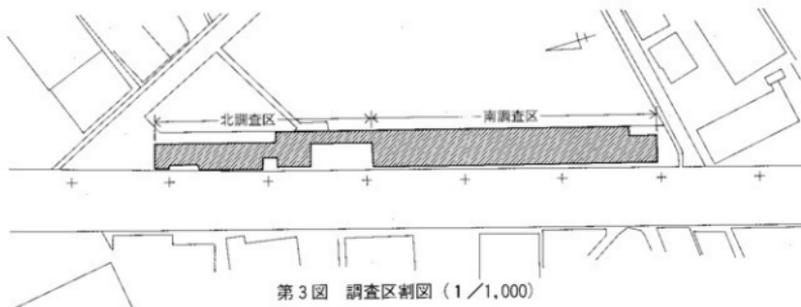
饗庭 澄夫、秋山 颯生、泉谷 弘、一葉 直義、大川 幸弘、桑島 和茂、森岡 富明、
池田 敬子、浦野 房子、岡崎 愛子、小野 理恵、香川 紀美子、香川 貞美、香川 芳子、
金生 法子、正 嘉代子、高木 一江、平井 加寿美、松山 枝美子、山口 ハルミ、横田 八重子、
好井 桂子、山田 美佐江、

整理作業

青屋 真理、上原 慶子、葛西 薫、合田 和子、小林 里美、東川 真希子



第2図 遺跡位置図(2) (1/2,500)



第3図 調査区割図 (1/1,000)

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

丸亀平野は、東部の大東川、中央部の土器川、西部の金倉川・弘田川といった中小河川の氾濫・堆積作用によって形成された緩衝状地・氾濫原と沖積地からなる県下最大級の平野である。そこには、条里側にその源を持つとされる条里型地割がよく遺存している。

近年、高松横断自動車道の建設に先立つ丸亀平野各地の発掘調査において、丸亀市三条黒鳥遺跡で、従来基盤層と目されていた黄褐色の粘質土中から旧石器の接合資料が出土したり、普通寺市龍川五条遺跡などで、A T純粋層が確認されるなど、その認識を再考すべき課題が明らかとなっている。また、普通寺市弘田川西岸遺跡では、基盤層から縄文時代後期の土器が多量に出土し、やはり、基盤層を再考する必要に迫られている。

田村遺跡は、丸亀市田村町1745-1地先他に位置する。丸亀平野の中央やや北西にあたり、標高はおおむね9~10mをはかり、安定した地盤となっている。周辺には、本遺跡の北東に位置する蓮池の中央部から南へ下るラインなど、真北から約30度西偏する方向に約108mごとに、用水路や畦道、小道などが基盤の目状に配される、いわゆる条里型地割がよく遺存している。この条里型地割は、古代の官道である南海道を基準ラインとして設置された条里プランによるものであり、この条里プランから復元すると、田村遺跡の調査区は那可郡二条二十三里七・八・十七坪にあたることになる。



第4図 田村遺跡周辺の条里地割遺存状況 (1/10,000)

また、田村遺跡から県道33号線をはさんで、向かい側にある番神社境内には田村廃寺の塔心礎が置かれているが、これは原位置を移動しているものと考えられる。田村遺跡南側では古代の瓦の散布が以前より知られており、また、「塔の前」「塔の本」「ゴンゴン堂」「塚タンボ」「舞台」など、寺院の存在を示す地名が残っていることから、田村遺跡周辺に古代寺院があったことがうかがえる。この瓦の散布状況と地名の分布状況から田村遺跡南側の方一町程度を田村廃寺の寺域に推定している。

第2節 歴史的環境

田村遺跡は、前述のとおり、周辺に古瓦の散布地が多く知られていることから古代寺院があったことが推定されており、田村廃寺と称されている。また、南東約2kmの宝幢寺池にはやはり古代寺院である宝幢寺跡があり、池の中には塔心礎が遺存している。

ここでは、丸亀平野西半部の遺跡について時代別に簡単に紹介する。(詳細な情報は第3表参照)

旧石器～縄文時代

後期旧石器時代にあたる約2万年前の遺跡として、丸亀市三条町に所在する三条黒鳥遺跡がある。ここでは、従来地山と考えられていた黄色粘土中よりサヌカイトの接合資料が出土している。また、普通寺市普通寺町の弘田川西岸遺跡においても地山中から縄文時代後期の土器がまとまって出土している。普通寺市永井遺跡では縄文時代後期の自然河川跡から杭状の木製品をはじめとして多量の縄文時代後期の土器やトチ・コナラ等の堅果類とともに水にさらしていたと考えられる編み籠が出土している。

坂出市内から丸亀・普通寺市内にかけての平野にはこのように縄文時代の土器を包含する遺跡が多く見られるが、明確に縄文時代の生活遺構などを検出した例は少ない。

弥生時代

弥生時代の遺跡としてまず、あげられるのは丸亀市金倉町に所在する中の池遺跡であろう。昭和五十年代の小規模な発掘調査によって、弥生時代前期の大規模な環濠を持つ集落跡ではないかと考えられてきたが、近年の陸上競技場建設や周辺の公園化事業に伴う発掘調査によって、弥生時代全般を通じて大規模な集落が展開してきたことが明らかとなっている。

坂出市下川津遺跡は縄文時代から中世にいたる一大集落跡であるが、弥生時代前期の堅穴住居跡をはじめとして弥生時代を通じて、拠点的な集落であったことがうかがえる。

普通寺市龍川五条遺跡では弥生時代前期の円形周溝墓が検出されており、主体部の木棺内より管玉が出土している。同市旧練兵場遺跡群は弘田川の東岸に広がる弥生時代の、環濠を持つ大規模な集落跡であるが、中でも仙遊地区の箱式石棺の蓋に描かれていた、入墨のある人面の線刻画は愛知県安城市の遺跡から出土した壺の体部にヘラ描きされていたものと酷似しており、「魏志倭人伝」の記事を裏付ける貴重な資料となっている。

古墳時代

丸亀市内の著名な前期古墳としては、青ノ山の南西麓に位置する吉岡神社古墳がある。全長40mほどの前方後円墳で、江戸時代以前に盗掘を受けているが、筒形銅器が出土したとされ、拓本が伝世してい

る。その他の前期古墳としては宇多津町と坂出市の境に位置する田尾茶白山古墳（前方後円墳・県指定史跡）や善通寺市野田院古墳（積石塚前方後円墳・国指定史跡）などがある。

古墳時代後期には前述の青ノ山の頂部から西麓にかけて分布する青ノ山古墳群が築造される。全体で数十基ほどあったとされ、丸亀平野北東部を支配していた豪族の集団墓と考えられている。また、讃岐富士として有名な飯野山の西麓にも群集墳が営まれていることが近年の丸亀市教委の調査で明らかにされている。

古代以降

丸亀市内では古代の集落跡などの調査例は少ない。代表的な遺跡としては、青ノ山南麓に構築された須恵器の窯跡である青ノ山1・2号窯跡などがあげられる。また、丸亀市郡家町の郡家原遺跡では大型の掘立柱建物跡を持つ集落が検出されている。坂出市下川津遺跡では7世紀初頭ごろの大型掘立柱建物跡が整然とならぶ区画があり、直前に埋没した溝状遺構から金銅装主頭太刀の柄頭の破片が出土している。善通寺市生野本町遺跡でも大型の掘立柱建物跡がいわゆる条里型地割にそって数棟規則的に並んでいる状況が確認されている。

丸亀市郡家町にある宝幢寺池は一辺100m前後の方形を呈する大きなため池であるが、これが古代寺院である宝幢寺跡を示すものとされ、池の内部には塔心礎が現在も残っている。池の内部の発掘調査も実施されているが、明確に寺域を示す遺構は見つかっていない。堤防下部の発掘調査では奈良時代ごろの溝状遺構や建物跡が検出されている。

中世以降には、条里型地割に沿って溝状遺構が検出される遺跡が全県下に分布しているが、同様の状況は丸亀平野でも見てとれる。特に丸亀平野南部の川西町や郡家町一帯では現在も三条、七条などの地名が残っており、四国横断道建設に伴う発掘調査でも中世の溝状遺構が検出される遺跡が多い。

近世になると、丸亀平野は丸亀藩の知行下に置かれ、現在の市内中心部は丸亀城の城下町として栄えた。丸亀城は1597年生駒親正によって築城されたが、一国一城令により廃城となり、その後山崎氏により再建され、京極氏に引き継がれ、今日までその姿をとどめている。特に急勾配の石垣の構築状況は「麗の勾配」と呼ばれ、当時の技術水準の高さを物語るものとして著名である。

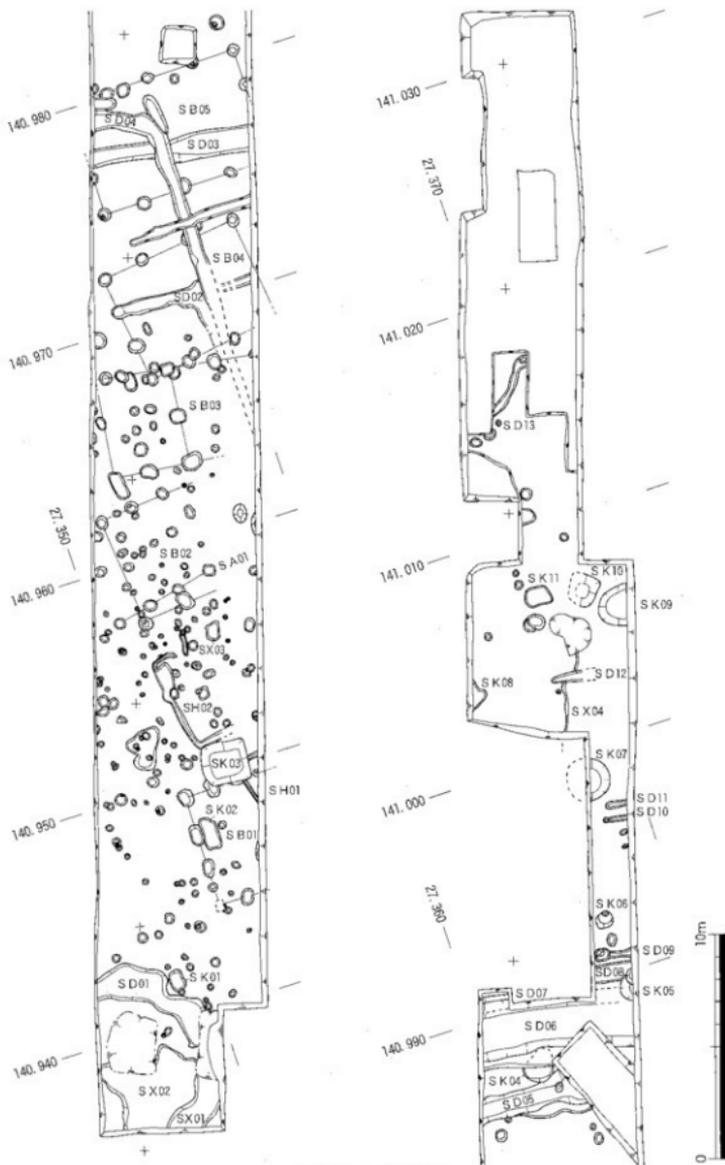


第5図 周辺の遺跡図(1/50,000)

第3表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構・遺物
1	田村遺跡	丸亀市田村町	古代	掘立柱建物跡、梵鐘跡造土坑、溝状遺構
2	田村廃寺	丸亀市田村町	古代	塔礎石
3	飯野東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町東分	中世	銚型片
4	飯野東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町東二	中世	溝状遺構
5	川西北鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	近世	溝状遺構
6	川西北七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町北	古代～近世	溝状遺構
7	川西北七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町北	古代～近世	溝状遺構
8	川西北原遺跡	丸亀市川西町北	古代～近世	溝状遺構
9	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	旧石器～近代	須恵器製燧石器
10	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	近世	瓦質土器
11	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	古墳～近世	緑釉陶器
12	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	弥生～近世	大型掘立柱建物跡
13	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	旧石器	サマカイト接合資料
14	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	縄文～近世	溝状遺構
15	龍川四条遺跡	普通寺市木徳町	縄文	自然河川
16	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	弥生	円形周溝墓、菅玉
17	金蔵寺下所遺跡	普通寺市金蔵寺町	縄文～古代	自然河川、甕串、人形、鉄製鏡
18	稲木遺跡	普通寺市稲木町	弥生	集石墓
19	水井遺跡	普通寺市下吉田町ほか	縄文	縄文土器、編み籠
20	中村遺跡	普通寺市中村町	古代～中世	銅印
21	乾遺跡	普通寺市中村町	弥生～中世	弥生土器
22	下川津遺跡	坂出市川津町	縄文～中世	木製犁、大型掘立柱建物跡、竪穴住居跡
23	川津元結木遺跡	坂出市川津町	弥生～中世	土師器、須恵器、瓦質土器
24	西又遺跡	坂出市川津町	弥生	弥生土器
25	飯野山山頂遺跡	飯山町西坂元ほか	弥生	
26	平池南遺跡	丸亀市原田町	弥生	青銅製鋤先
27	平池西遺跡	丸亀市原田町	弥生	弥生土器
28	中ノ池遺跡	丸亀市金倉町	弥生	銅剣、環濠
29	南鴨遺跡	多度津町南鴨	弥生	
30	三井遺跡	多度津町三井	弥生	弥生土器

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構・遺物
31	五条遺跡	普通寺市原田町	弥生	弥生土器
32	京免遺跡	普通寺市木徳町	古代～近世	
33	旧鎌兵場遺跡群	普通寺市下吉田町	弥生～中世	青銅器、瓊瑤、竪穴住居跡
34	弘田川西岸遺跡	普通寺市弘田町	縄文～古墳	縄文土器、小銅鐸、竪穴住居跡
35	彼ノ宗遺跡	普通寺市弘田町	弥生～古墳	弥生土器、竪穴住居跡
36	北原シンネバエ遺跡	普通寺市普通寺町	弥生	銅剣
37	瓦谷遺跡	普通寺市普通寺町	弥生	銅剣
38	田尾茶臼山古墳	板出市八幡町ほか	古墳	銅鏡
39	青ノ山古墳群	丸亀市土器町ほか	古墳	須恵器
40	吉岡神社古墳	丸亀市土器町	古墳	筒形銅器
41	飯野山西麓遺跡	丸亀市飯野町	古墳	古墳、竪穴住居跡
42	生野鎌子塚古墳	普通寺市生野町	古墳	
43	磨臼山古墳	普通寺市生野町	古墳	石棺
44	北向八幡神社古墳	普通寺市普通寺町	古墳	
45	土墓山古墳	普通寺市普通寺町	古墳	石屋形、金銅製冠帽
46	菊塚古墳	普通寺市普通寺町	古墳	石屋形
47	北原3号墳	普通寺市普通寺町	古墳	須恵器
48	青ノ山窯跡群	丸亀市土器町	古代	須恵器
49	宝輪寺跡	丸亀市郡家町	古代	瓦類、塔心礎
50	仲村薬寺跡	普通寺市仙遊町	古代	瓦類
51	普通寺跡	普通寺市普通寺町	古代	瓦類
52	香色山1号経塚	普通寺市普通寺町	中世	青銅製経筒、鉄刀、刀子など
53	御梨城跡	琴平町下御梨ほか	中世	郭、空堀、堀切
54	丸亀城跡	丸亀市大手町	近世	大手門、石垣、天守閣



第6図 遺構配置図

第3章 調査の成果

第1節 基本土層序

・北調査区（第7図）

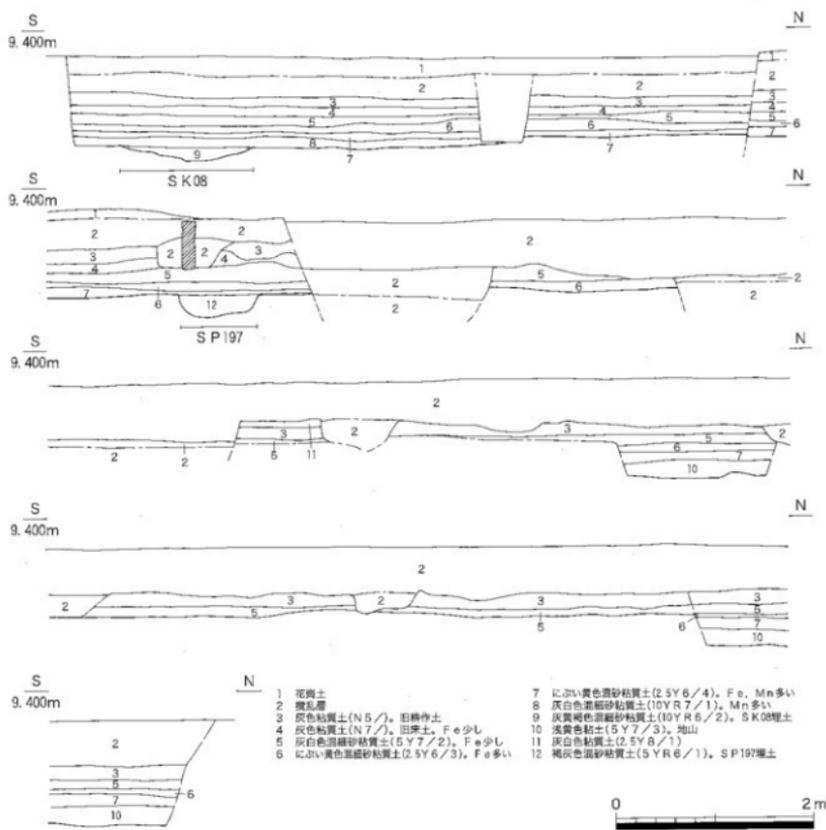
北調査区は県道の拡幅工事の対象地となる以前には、ガソリンスタンドが営業していた場所に当たり、貯油槽や構造物の基礎などで、調査対象地のかかなりの部分が破壊されていた。したがって、調査区の形状も単なる長方形ではなく、いくつかの凸凹のあるいびつな形状を呈している。特に北半分については攪乱が著しく、調査が不可能な状況であった。

基本的な土層の堆積状況は第7図のとおりであるが、遺構は10層（浅黄色粘土・マンセル値は5 Y 7 / 3）に刻まれており、その上層の5～8層がわずかながら遺物を含む包含層となっている。遺構面は、現地壁より90cm程度下がったところで検出されるが、この高さは南調査区と約40～50cmもの比高差がある。包含層については、色調が異なるのみで、土質的に異なるものではなく、したがって、包含層は各時代に応じたものではない。4層から上層については、基本的に旧耕作土およびその床土、もしくは近現代の攪乱層である。ところどころに2層の大きな落ち込みが認められるが、これはガソリンスタンドの貯油槽埋設に伴うものであると考えられる。

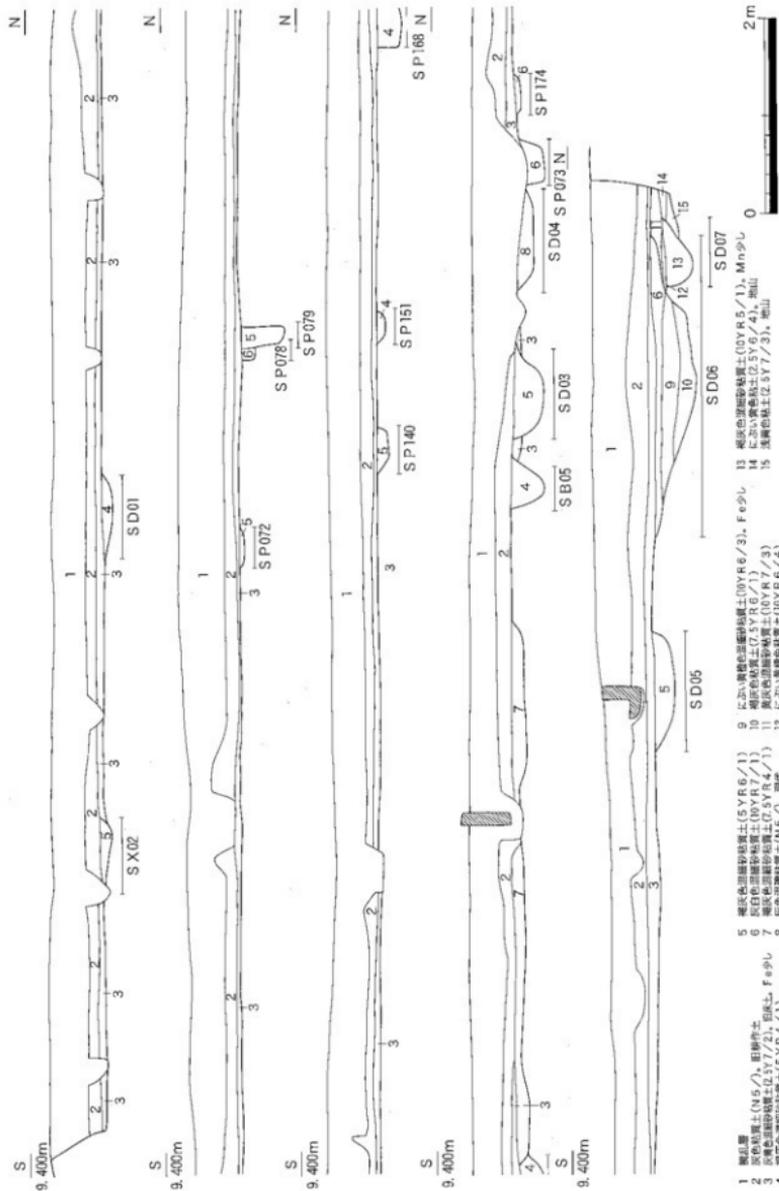
・南調査区（第8図）

南調査区は北調査区とは状況が異なり、後世の前平を受けてはいるものの、現地壁より40～50cmのところ遺構面を検出できる。遺構面が検出される標高はおおむね8.6mである。南端と北端での遺構面の比高差はほとんどなく、おおむね平坦な地形を呈するといえよう。

遺構は埋土で分類すると、おおむね4種類程度に分けられる。(1) 灰白色混細砂粘質土・(2) 褐灰色混細砂粘質土・(3) 褐灰色混細砂粘質土（地山を含む）・(4) 赤灰色粘質土の4種類であるが、(2) は色調の違いで3種類に分けられる。



第7図 西壁土層断面図(北)



1 暗灰色埋藏粘質土(N5/1)、粘粉砂土
 2 暗灰色埋藏粘質土(SYR4/1)
 3 赤褐色埋藏粘質土(SYR4/2)、灰土、F₀少
 4 暗灰色埋藏粘質土(SYR4/1)
 5 暗灰色埋藏粘質土(SYR6/1)
 6 暗灰色埋藏粘質土(OYR5/1)
 7 暗灰色埋藏粘質土(OYR4/1)
 8 暗灰色埋藏粘質土(N5/1)、砂代
 9 暗灰色埋藏粘質土(OYR6/3)、Fe₀少
 10 暗灰色埋藏粘質土(OYR5/1)
 11 暗灰色埋藏粘質土(OYR7/3)
 12 赤褐色埋藏粘質土(OYR6/4)
 13 暗灰色埋藏粘質土(OYR5/1)、Mn₀少
 14 赤褐色埋藏粘質土(SYR4/4)、砂山
 15 赤褐色埋藏粘質土(SYR7/3)、砂山

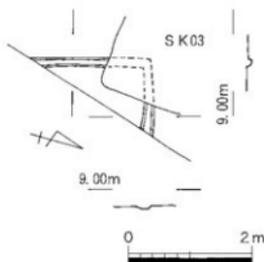
第8図 西壁土層断面図(南)

第2節 古墳時代以前の遺構と遺物

・SH01 (第9図)

南調査区南端部に近い部分で、第1次調査時に検出した竪穴住居跡である。第1節でも述べたとおり、後世の削平が著しいため、遺構の残存状況は悪く、本竪穴住居跡もわずかに壁溝の一部と思われる方形に巡る溝状遺構を検出したにとどまる。また、遺構の大部分が西側の調査区外にあたり、さらに北西隅の部分は後述のSK03によって切られているため、北西部の隅と思われる部分を検出したにすぎない。

検出した壁溝と考えられる溝状遺構は、幅20cm、深さ10cmであり、SK03に切られている部分でほぼ直角に屈曲する隅丸方形の竪穴住居跡を推定できる。検出した部分がかくわずかであるため竪穴住居そのものの規模を復元することは困難である。



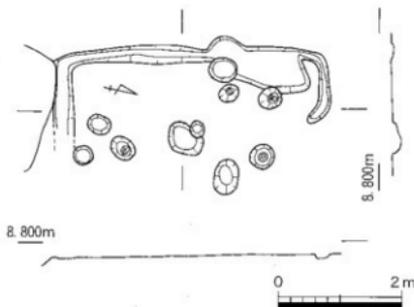
第9図 SH01平・断面図

・SH02 (第10図、図版8・9)

南調査区南端部に近い部分で、第2次調査で検出したSK03のすぐ北側の竪穴住居跡である。SH01同様、残存状況は非常に悪い。しかしながら、西側の一辺をほとんど検出していると考えられるため、少なくとも4.5m四方以上の面積は有していたものと思われる。SH01と同様、壁溝と考えられるものしか検出できなかった。規模は、幅30cm、深さ10cmをはかり、延長6.8mで北・東・南部分は検出できなかった。

出土遺物は、前述のように遺構の残存状況が悪いため、図化できない小片しか出土していないが、わずかに須恵器を含み、かつ杯身のかえり

の部分が認められる破片がある。この小片は7世紀初頭ごろの所産の須恵器と判断されることから、本竪穴住居跡は7世紀初頭前後に廃絶したものと考えられる。



第10図 SH02平・断面図

・SD01 (第11図、図版10)

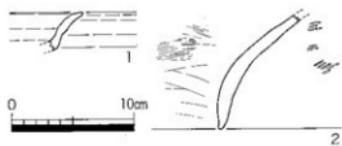
南調査区の南端に近い部分で検出した溝状遺構である。調査区が狭小なために正確な流路の方向は把握し難いが、南東からやや北よりに弧を描くように流れている。幅は約2.8mを測る。後世の削平のために正確な深さは測り得ないが、残存する深さはおよそ15cmであった。埋土は褐灰色混細砂粘質土の単一土層である。



第11図 SD01土層断面図

第12図はS D01から出土した遺物である。1は高杯の口縁部の破片であると思われる。2は壺形の土器の破片であると思われるが、底部に焼成前に穴を開けている。瓶様の土器が復元されるが、詳細は不明である。いずれもやや粗めの胎土で、形態などからみて弥生時代後期ごろの所産であると考えられる。

したがって、S D01は少なくとも弥生時代後期ごろに埋没したものと考えられる。



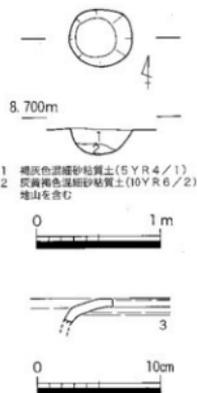
第12図 S D01出土遺物実測図

・ S P 045 (第13図、図版10)

南調査区の南側、S H02の西側で検出した柱穴である。直径50cm、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色混細砂粘質土と灰黄色混細砂粘質土の上下二層に分けられる。

第13図はS P 045から出土した遺物である。3は壺の口縁部の破片である。大きく広がるタイプのもので、端部は丁寧にナデ調整を施している。弥生時代後期ごろのものと考えられる。

出土遺物から見れば、S P 045は弥生時代後期以降に廃絶したと考えられるが、周囲のピットの配置状況から見ると、S P 040やS P 051と直線上に並んでおり、楕円もしくは掘立柱建物跡を構成するものである可能性も否定できない。



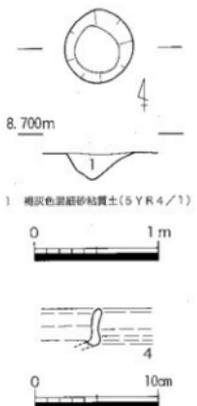
第13図 S P 045平・断面図、出土遺物実測図

・ S P 161 (第14図、図版11)

南調査区の中央西よりの部分で検出した柱穴である。S B03の北辺上に位置するが、柱穴間の距離からみて、S B03とは異なる。直径55cm、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色混細砂粘質土の単一層である。

第14図はS P 161から出土した遺物である。高杯、もしくは壺の口縁部の破片であると思われる。

出土遺物から見て、S P 161は弥生時代後期以降に廃絶したものと考えられる。



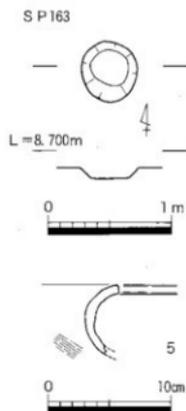
第14図 S P 161平・断面図、出土遺物実測図

・ S P 163 (第15図)

南調査区の中央西よりの部分、S P 161のやや東で検出した柱穴である。S P 161と同一の遺構を構成していた可能性も考えられる。直径45cm、深さ10cmを測り、他の柱穴に比べて非常に浅い。

第15図はS P 163から出土した遺物である。壺の口縁部であると思われる。端部は大きく外側へ広がり、内面にはわずかにハケ目調整が認められる。全体的に丁寧にナデ調整を施している。弥生時代後期ごろのものであると考えられる。

出土遺物から見て、S P 163は弥生時代後期以降に廃絶したものと考えられる。



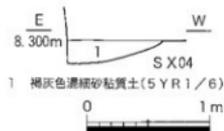
第15図 S P 163平・断面図、出土遺物実測図

・ S X 04 (第16図)

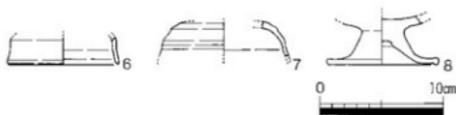
北調査区の南端部分で検出した浅い遺構である。第1次調査では、検出し得なかったが、第2次調査で検出したものである。幅75m以上、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色混細砂粘質土の単一層である。

第17図はS X 04から出土した遺物である。6は須恵器の杯蓋である。口径に比べ、器高が高く、屈曲部分の稜線が明瞭であることから古墳時代中期から後期初頭にかけてのものであると考えられる。7も須恵器の杯蓋である。6よりもやや扁平な感じを受けるが、やはり屈曲部分の稜線が明瞭であることから6と同時期のものであると考えられる。8は須恵器の高杯の脚部である。杯部は欠損している。脚部は短脚で大きく外側へ広がり、先端はやや内側へ折り返し気味におさめる。6・7と同一時期のものであると捉えても矛盾はない。

埋土、出土遺物から見て、S X 04は古墳時代中期以降に廃絶した遺構であると考えられるが、全体的な規模や形状が不明なため、その性格を把握することは困難である。



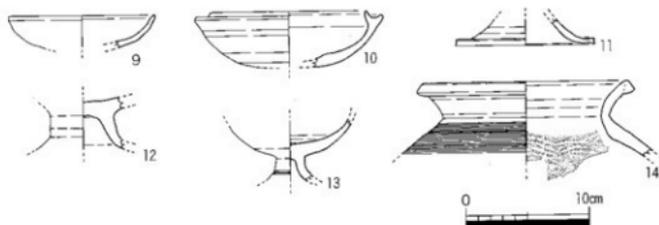
第16図 S X 04土層断面図



第17図 S X 04出土遺物実測図

・古墳時代以前の包含層出土遺物について

第18図は包含層から出土した遺物のうち、古墳時代およびそれ以前のもと考えられるものである。9は土師器、10～14は須恵器である。9は土師器の高杯の杯部である。きめの細かい胎土を持ち、ゆるやかに湾曲しながら、端部はやや尖り気味におさめる。磨耗しているため、調整は不明である。10は須恵器の杯身である。口径に対して器高がやや高く、かえりもしっかりしている。体部外面の稜線ははっきりしないが、全体的な特徴から見て古墳時代後期ごろのもと考えられる。11～13はいずれも須恵器の高杯である。11は胸部の破片で大きく外側に広がり、わずかに上下方向に広がる端部を持つ。12・13は杯部と脚部との境界の部分である。14は甕の口縁部の破片である。大きく湾曲する体部から「く」の字状に外側へ広がり、端部は断面三角形の粘土紐を貼り付けて仕上げている。体部外面にはカキ目状の細い沈線があり、内面には青海波文が顕著に認められる。古墳時代後期ごろのもと考えられる。

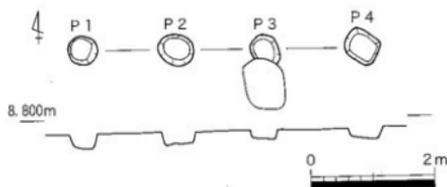


第18図 古墳時代以前包含層出土遺物実測図

第3節 古代の遺構と遺物

・SA01（第19図、図版11・12・13）

南調査区中央やや南よりの部分で検出した、4つの柱穴からなる柱穴列である。同一規模の柱間を考えた場合、ほかに対応する柱穴が見当たらないことから、ここでは楯列として報告しておく。柱穴の大きさはおおむね直径25cm前後、深さ10cm前後を測る。柱間の間隔は約1.8m（1間）であり、主軸の方位はほぼ東西であるが、約2度北偏する。



第19図 SA01平・断面図

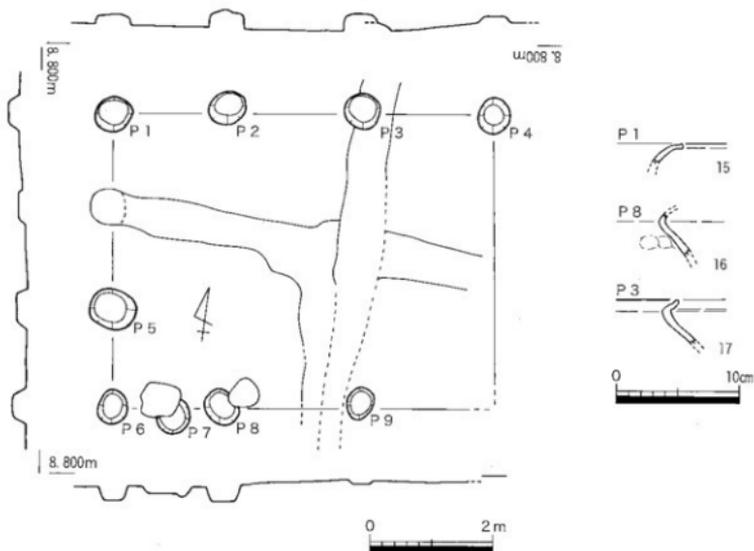
遺物は細片しか出土しておらず、時期は不明であるが、後述のSB04・05と方位が同一であることからこれらの掘立柱建物跡と同時期に機能し、廃絶したのもと考えられる。

・SB04 (第20図、図版13・14・15・16)

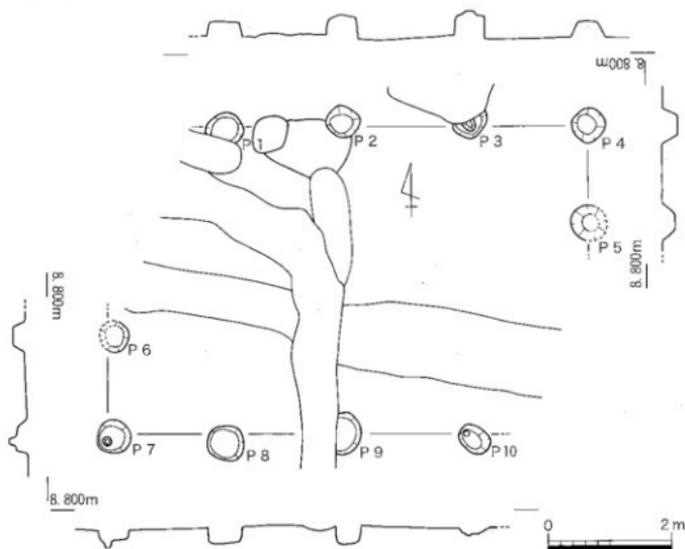
南調査区中央やや北よりの部分で検出した掘立柱建物跡である。規模は、桁行3間×梁行3間以上で柱間の寸法はおおむね1.8m(1間)である。主軸の方位はSA01と同じく、ほぼ東西ながら約2度北偏する。南西隅の部分でSB03と重複する部分が認められるが、埋土などからみて、SB04が前出するものと考えられる。また、西辺の北から二番目の柱穴はSD02と重複しており、SB04廃絶後にSD02が開削されたものである。

第20図はSB04の柱穴から出土した遺物である。いずれも細片であるが、弥生土器ばかりである。15は弥生土器の壺の口縁部である。16・17はいずれも弥生土器の甕の口縁部である。16の内面には指頭圧痕が顕著に認められ、17は口縁端部をやや上方へつまみ上げて丸くおさめる。いずれも弥生時代後期ごろのものと思われる。

出土遺物から、SB04は弥生時代後期以降に廃絶したものと考えられるが、主軸方位や周辺の掘立柱建物跡などの配置からみて、弥生時代後期の所産とは考えがたく、7世紀以降のものであると考えられ、田村廃寺に関する施設の一部、もしくはその前身と考えておきたい。



第20図 SB04平・断面図、出土遺物実測図

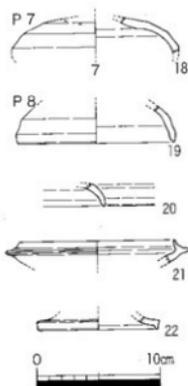


第21図 S B 05平・断面図

南調査区中央やや北より、S B 04のすぐ北側で検出した掘立柱建物跡である。規模は、桁行3間×梁行4間で、柱間の寸法はおおむね1.8m（1間）である。主軸の方位はほぼ東西である。調査区が狭小なため、建物跡全体は検出し得なかったが、かろうじて、全体の規模が復元できた。南辺中央に位置する柱穴はS D 04によって破壊されており、この建物跡が古代もしくはそれ以前に廃絶していたことを示すものである。

第22図はS B 05の柱穴から出土した遺物ですべて須恵器である。18～20は杯蓋である。21は杯身の口縁部である。かえりの部分が、退化しつつある。22は高杯の脚部の破片と思われる。端部はわずかに下方に折り曲げて、外面は丁寧にナデ調整を施している。いずれも7世紀代の須恵器であると思われる。

以上のことから、S B 05は少なくとも7世紀以降に廃絶した可能性が高い掘立柱建物跡で、主軸方位や周辺の掘立柱建物跡の分布からみて、田村廃寺に関連する施設もしくはその前身である可能性が高いと考えられる。



第22図 S B 05出土遺物実測図

・SD05 (第23図、図版19・38・39・40・41)

南調査区の北端部で検出した溝状遺構である。主軸方向はSB05などと同じくほぼ東西である。幅102cm、深さ20cmを測り、断面形はゆるやかなU字形を呈する。埋土はやや色調の異なる2種類の褐灰色混細砂粘質土である。上層・下層のどちらからも遺物が出土するが、その量は圧倒的に上層のほうが多い。

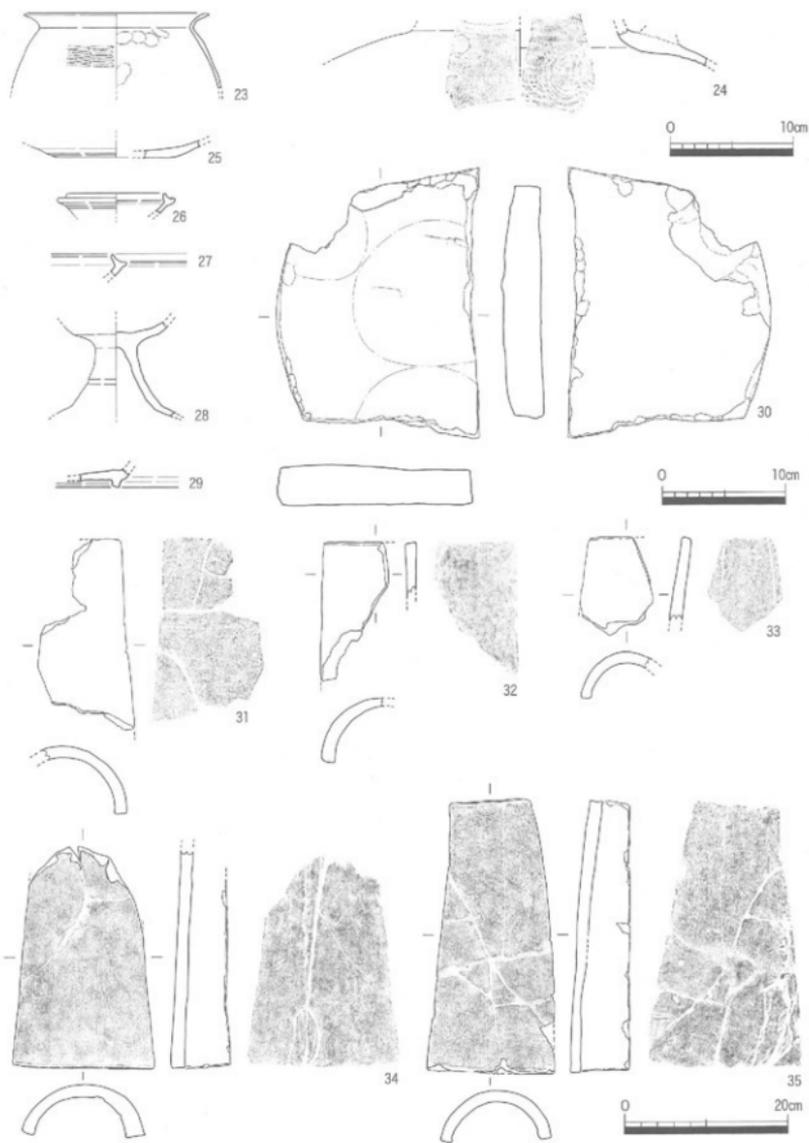


第23図 SD05遺物出土状況平・断面図

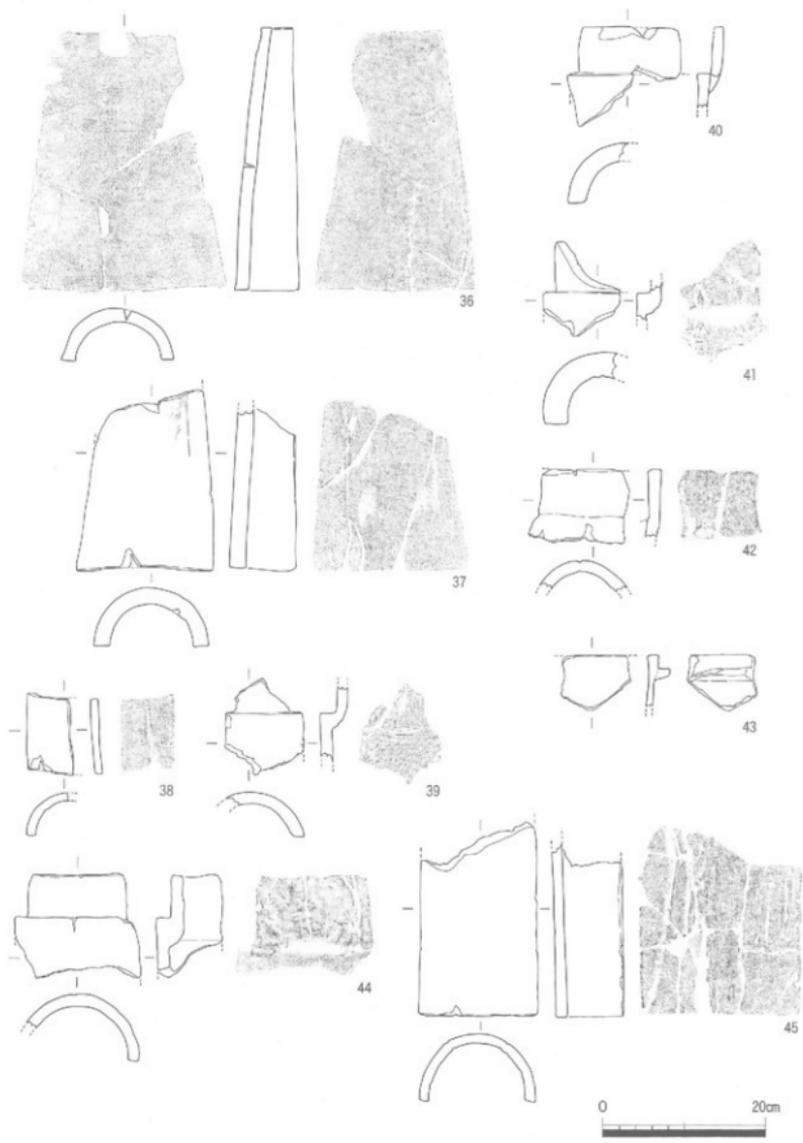
第24図～第27図はSD05から出土した遺物である。23は弥生土器の臺である。「く」の字状に外反する口縁部を持ち、外面にはタタキ調整が、内面には指頭圧痕が顕著に認められる。弥生時代後期ごろのものであると考えられる。24は須恵器の臺である。頸部のみしか残存していないが、体部上部に把手状のものが貼り付けられていた痕跡が認められる。内面には青海波文が認められる。25は須恵器の底部である。26・27は須恵器の杯身である。28は須恵器の高杯の脚部である。透かし孔は認められない。29は須恵器の高台付杯の底部である。30は砥石であると思われる。材質は花崗岩で平坦面に擦痕が認められる。

31～49は丸瓦である。31～38は連結部に段を持たない無段式(従来、「行基式」と呼んでいたもの)で、39～49は連結部に段を持つ有段式(玉縁式)である。無段式のものには、凸面の一部に細い縄目のタタキ調整の痕跡が認められ、成形後の調整に細い縄目のタタキを施し、その後丁寧にナデ消していることがうかがえる。凹面には布目圧痕が顕著に認められる。また、無段・有段いずれの丸瓦にも凹に紐状の痕跡が認められるものがあることから、麻布を袋状に縫い合わせたものを桶状の模骨にかぶせてその外周に粘土を巻きつける、いわゆる桶巻き技法によって製作されたことがうかがえる。

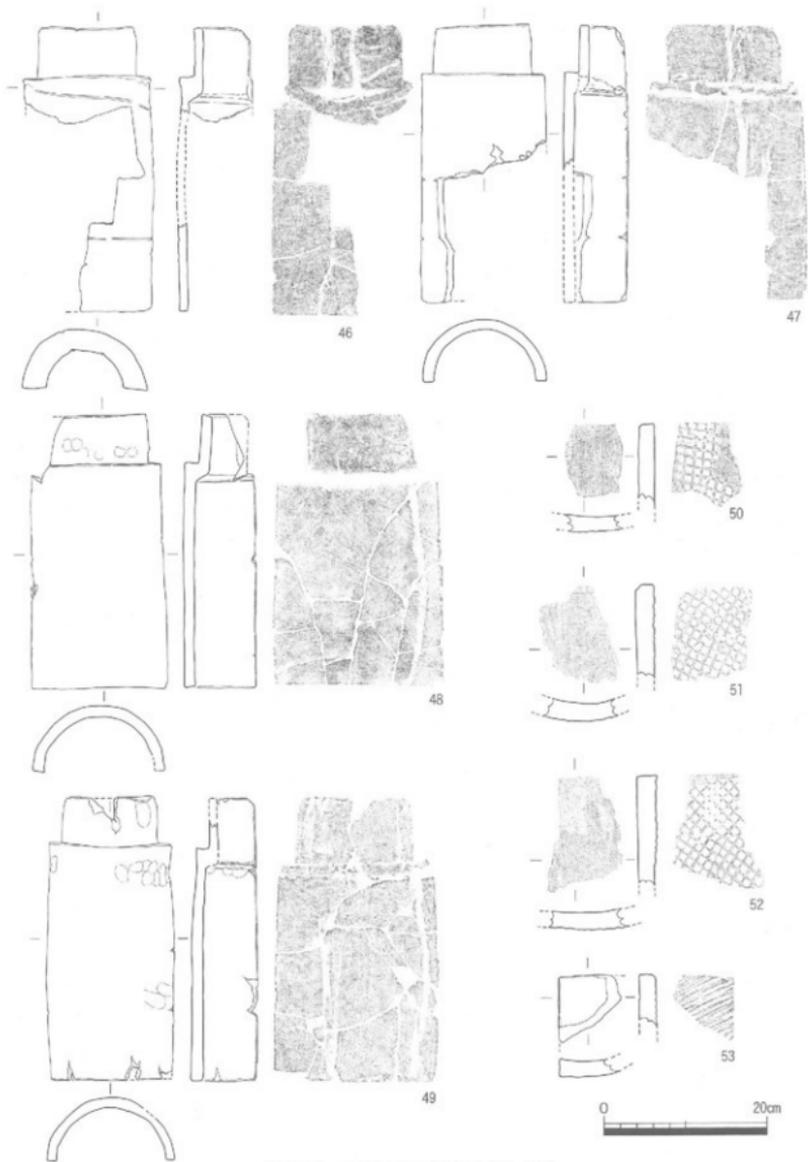
50～59は平瓦である。いずれも小片であるが、すべて凹面に布目圧痕が認められる。凸面にはタタキ調整が施されるが、50～52・58のように格子状のタタキを持つもの、53・55のように細い縄目のタタキを斜め方向に施すもの、54・56・57のように細い縄目のタタキを縦方向に施すもの、などに分類される。また、59のように縄目のタタキを施したのち、市松模様のように部分的にタタキをナデ消すものも認められる。



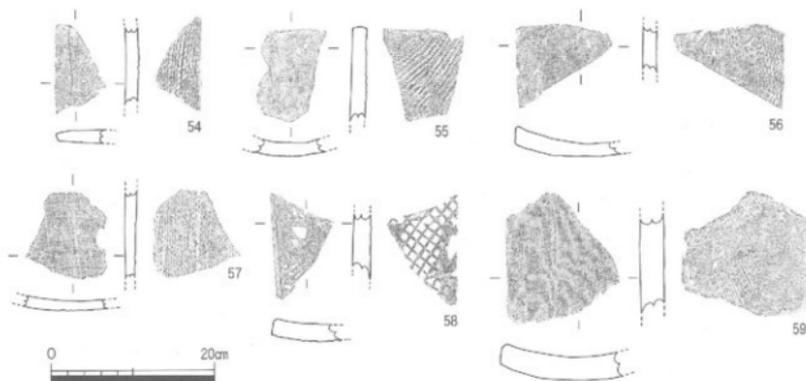
第24図 SD05出土遺物実測図(1)



第25図 S D 05出土遺物実測図 (2)



第26図 S D05出土遺物実測図(3)



第27図 S D 05出土遺物実測図(4)

軒瓦が出土していないため、時期を比定することは困難であるが、丸瓦の幅や長さがほぼ同一の規格で作られていることなどから類推すると、これらの瓦類はほぼ同一時期のもと考えてよいものと思われる。成形や調整の方法や後述するS D 06などの状況を考え合わせると、奈良時代のものであると考えられる。

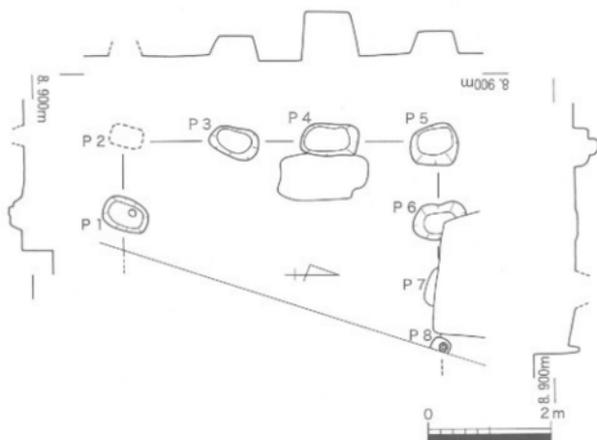
したがって、S D 05は田村廃寺に密接な関係を持つ溝状遺構であると考えられるが、北側にこのような大量の瓦を有する遺構が存在しないことから寺域の北限を区切る施設の可能性も考えられる。

・S B 01 (第28図、図版20・21・37)

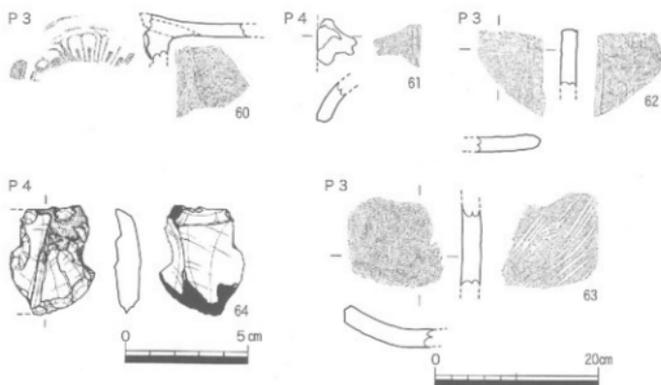
南調査区の南端部で検出した掘立柱建物跡である。調査区の東側で西辺を確認したため、全体の規模は不明であるが、梁行3間、桁行3間以上である。主軸方向はS B 05などと同じくほぼ東西方向を示す。南西隅の柱穴は確認できなかった。また、北辺の西から2番目と3番目の柱穴は、その一部が後出するS K 03によって破壊されている。柱穴はおおむね隅丸方形を呈し、深さは40cm前後を測る。

第29図はS B 01の柱穴から出土した遺物である。60は軒丸瓦である。瓦当部の下半部は欠損しているが、わずかに残る部分から八葉複弁蓮華文軒丸瓦であることがうかがえる。従来より、田村廃寺周辺で採集されている軒丸瓦の瓦当文様と同一のものである。61は丸瓦片である。小片ではあるが、凹面には布目圧痕が顕著に認められ、側端部は内外面ともに面取りをしている。62・63は平瓦片である。62は凸面に縦方向の細い縄目のタタキを施している。側端部は内外面ともに面取りをしているため、断面形は三角形を呈する。63はやや間隔の広い縄目のタタキを斜め方向に施している。側端部は内外面ともに面取りをしているため、断面形はシャープな三角形を呈する。64はサヌカイト製の石器である。下半部は欠損しているが、形態から見て小型の打製石斧であると思われる。

出土遺物やS K 03との切り合い関係などからみて、S B 01は奈良時代ごろに機能し、少なくとも平安時代の終わりごろまでには廃絶したものと考えられる。



第28図 SB01平・断面図



第29図 SB01出土遺物実測図

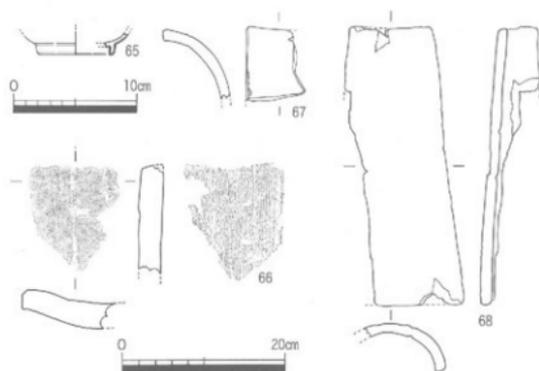
・SD07 (第30図、図版34)

南調査区の北端部に検出した溝状遺構である。当初はすぐ南側のSD06のみ検出していたが、北側へ拡張して検出した。幅70cm、深さ28cmを測り、埋土は褐灰色泥細砂粘質土の単一層である。埋土中には拳大の礫が多く含まれる。



第30図 SD07土層断面図

第31図はS D07から出土した遺物である。65は青磁碗の底部である。高台を含む一部の破片であるが、外面全体に釉薬がかかり、内面には認められない。66は平瓦である。凹面には布目圧痕が認められ、凸面には細い網目のタタキが縦方向に施されている。側端部は凹面にわずかに面取りが見られる。67・68は丸瓦である。いずれも無段式のものであると考えられる。68は、広端幅10cm以上、狭端幅10.0cm



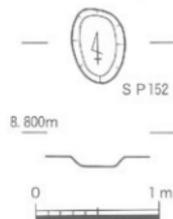
第31図 S D07出土遺物実測図

を測り、長さ34.0cmを測る。焼成が不良であり、凹面・凸面ともに表面の摩滅が激しい。

出土遺物などから判断して、S D07は奈良時代以降に埋没したものと考えられ、田村廃寺に関連する施設もしくは、周辺の条里型地割の分布から見て、坪界の溝である可能性も否定できない。

・ S P 152 (第32図)

南調査区のはほぼ中央、S B03の西辺上に位置する柱穴跡である。南北に長い楕円形を呈し、長径60cm、短径42cm、深さ8cmを測る。S B03を構成する柱穴跡の可能性も考えられるが、ここでは、別のものとして報告しておく。



第32図 S P 152平・断面図

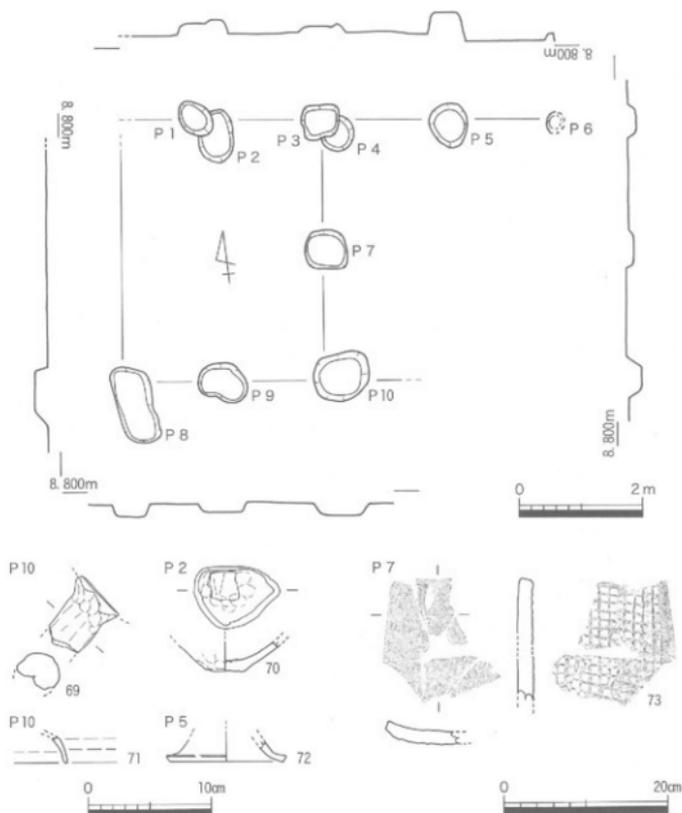
・ S B03 (第33図、図版22・37)

南調査区の中央わずかに北よりの部分で検出した掘立柱建物跡である。埋土および柱穴跡の配置関係から復元したもので、梁行2間、桁行4間以上の建物跡を復元した。主軸方向はおおむね東西であるが、2度ほど東偏する。柱間の間隔は約1.8m(1間)で、柱穴跡の大きさは直径60cm程度、深さは約10cmと非常に浅い。北辺の柱穴列では、建物の建て替えではないかと考えられる柱穴跡の重複関係が看取される。

第33図はS B03から出土した遺物である。

69は土師質土鍋の脚部、70は土師器の底部である。71は須恵器杯蓋、72は須恵器高杯の脚部である。73は平瓦片である。凹面には布目圧痕が顕著に認められ、凸面には格子状のタタキが明瞭に残る。側端部は分割した痕跡がそのまま残り、面取りはしていない。

S B03は柱穴跡の配置や主軸方向などから見て、今回検出した掘立柱建物跡群の中ではもっとも後出するものであると考えられる。



第33図 S B03平・断面図、出土遺物実測図

・ S D02 (第34図、図版23)

南調査区のほぼ中央部に検出した溝状遺構である。S B04の西辺の柱穴跡を破壊していることからS B04より後出するものと思われる。流れの方向は基本的にはほぼ東西方向であるが、途中で南へクランク状に屈曲する溝状遺構が派生する。また、屈曲する部分では後出する溝状遺構S D04に東半分を破壊されている。幅は54cm、深さ8cmで、埋土は褐灰色泥細砂粘質土の単一層である。

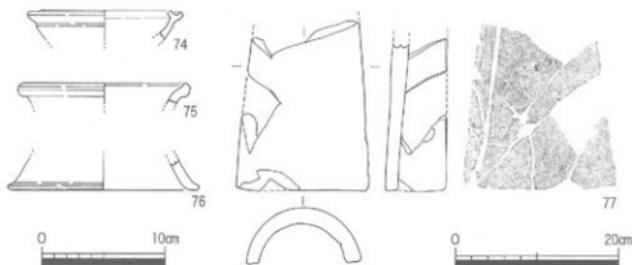
第35図はS D02から出土した遺物である。74~76は須恵器である。74は杯身、75は壺の口縁部、76は高杯の脚部である。77は無段式の九瓦片である。焼成が悪く、表面は凹面・凸面ともに摩滅が著しいが、



第34図 S D02土層断面図

凹面には布目圧痕
および袋状に縫い
合わせた紐の痕跡
が認められる。

出土遺物や周辺
の遺構のあり方か
らみて、SD02は
SB04の廃絶後、
あまり遠くない時
期に機能していた
ものであると考え
られる。



第35図 SD02出土遺物実測図

・SD03 (第36図、図版23・37)

南調査区の北側、SD02の約6m北側で検出した溝状遺構である。流れの方向はSD03とはほぼ同一で調査区を横切る形で検出した。SB05と重複する関係にある。幅100cm、深さ22cmを測り、埋土は色調の異なる2種類の褐灰色混細砂粘質土からなる。

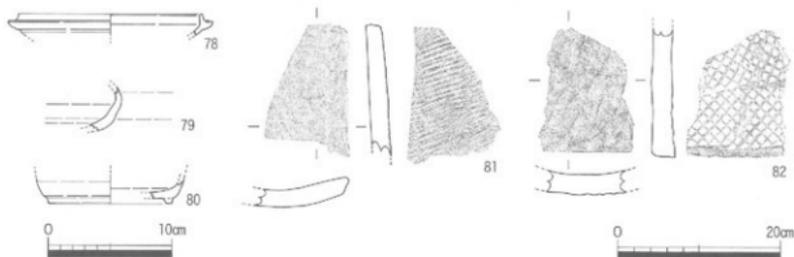
第37図はSD03から出土した遺物である。

78は須恵器の杯身である。79は小片であるが、須恵器の壺の体部であると思われる。80は須恵器の高台付杯の底部である。81は平瓦片である。凹面には布目圧痕が認められ、凸面には細い縄目のタタキが斜め方向に施されている。焼成は非常に堅緻である。側端部は面取りのため、断面形が三角形を呈する。82も平瓦である。凹面には布目圧痕が認められ、凸面には格子状のタタキが施されている。欠損しているため、側端部の状況は不明である。

SD03も出土遺物や周辺の遺構のあり方から見て、SB05の廃絶後、あまり遠くない時期に機能していたものであると考えられる。



第36図 SD03土層断面図



第37図 SD03出土遺物実測図

・SD13 (第38図)

北調査区のほぼ中央部に検出した溝状遺構である。南西から北東に向かって蛇行しながら流れるが、周辺の攪乱によって破壊されているため、約3m程度の延長を検出するにとどまった。幅20cm、深さ10cmを測り、埋土は褐灰色混細砂粘質土の単一層である。遺物はほとんど出土しなかった。埋土からみて、SD02やSD03と同一時期に機能していた可能性が考えられる。



第38図 SD13土層断面図

・SK01 (第39図、図版24)

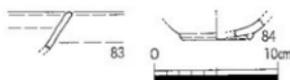
南調査区の南端部、SD01のそばで検出した隅丸方形の土坑である。長径93cm、短径66cm、深さ28cmを測る。埋土は褐灰色混細砂粘質土と灰黄褐色混細砂粘質土の2層に分けられる。

第40図はSK01から出土した遺物である。83は須恵器杯の口縁部である。84は須恵器の高台付杯の底部である。断面形がやや丸い高台を貼り付けている。

出土遺物から見て、平安時代後期ごろのものであると考えられる。



第39図 SK01平・断面図

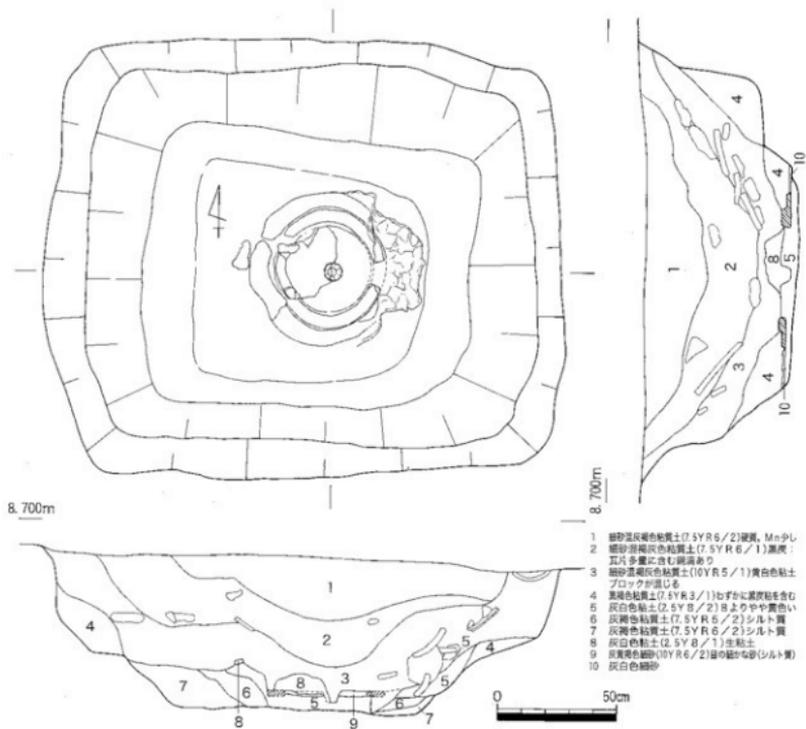


第40図 SK01出土遺物実測図

・SK03 (第41図、図版24～30・35・36・42～54)

南調査区の南半部に検出した、一辺が約2mの大型の方形の土坑である。SH01・02およびSB01の一部を破壊して構築されている。東半部は第1次調査時に検出し、西半部は第2次調査時に検出した。深さ約60cmを測り、断面は底の部分はほぼ水平で、斜めに上がる台形状を呈する。最下層は平坦で幅5cmほどの真っ黒に焼けた粘土が真円状に巡っており、その内側には白色粘土があり、中央部に直径2cmほどの穴が穿たれていた。この穴は鳥目穴であると考えられ、中型を成形する際の挽型を固定するためのものである。また、溶けた青銅を流し込んだときのガス抜きとしての役割を果たすものと考えられる。このことから、本遺構は、県内で初出の梵鐘の鑄造遺構であると考えられる。また、最下層の真円状に巡る粘土(定盤)の東側の一部が破壊されていること、この粘土の西側の部分の上層に中型と思われる生粘土が残存していること、土層の堆積状況が西側のほうが緩やかであること、などから、できあがった梵鐘を引き上げる際に一旦、東側に倒れて東側から引き上げた可能性が考えられる。

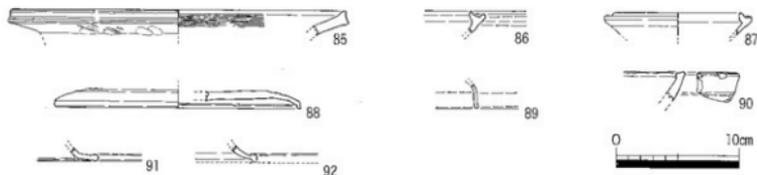
梵鐘などの大型鋳物を鑄造する際には、鋳型(特に外型)は基本的に一回限りの使用で破砕され、一部には真土(まね)を削り取って再利用するため、全体像がつかみにくい。本遺構も同様の状況を呈す



第41図 S K 03平・断面図

るが、廃絶時に不要な瓦などの廃棄物と一緒に外型を廃棄したらしく、かなりの数の外型の破片が埋土中から出土している。

第42図～第53図はS K 03から出土した遺物である。85は土師器の甕の口縁部である。器壁が厚く、端部外面には強いナデ調整が施される。内側には刷毛目調整が認められる。長胴の甕であると思われる。86-87は須恵器の杯身である。88-89は須恵器の杯蓋である。88には扁平なつまみが付くと思われる。90



第42図 S K 03出土遺物実測図(1)

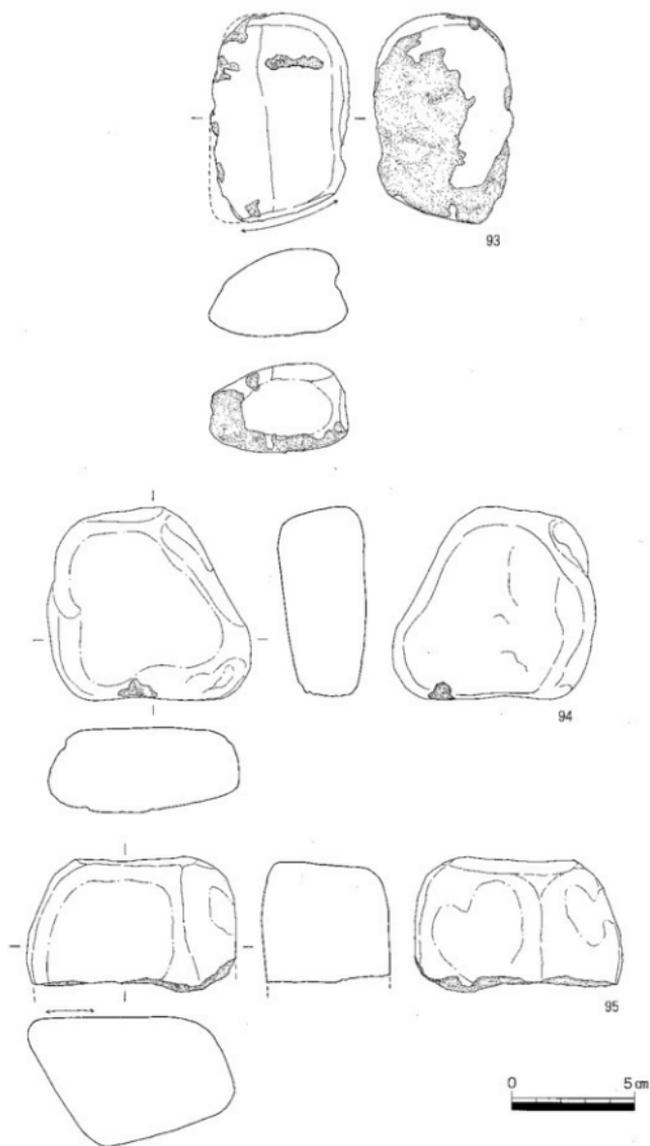
は須恵器の鉢の口縁部であると思われる。91・92は高杯の脚部である。

第43図93～95は石器である。いずれも砂岩製で、93と95の一部には捺痕が認められる。

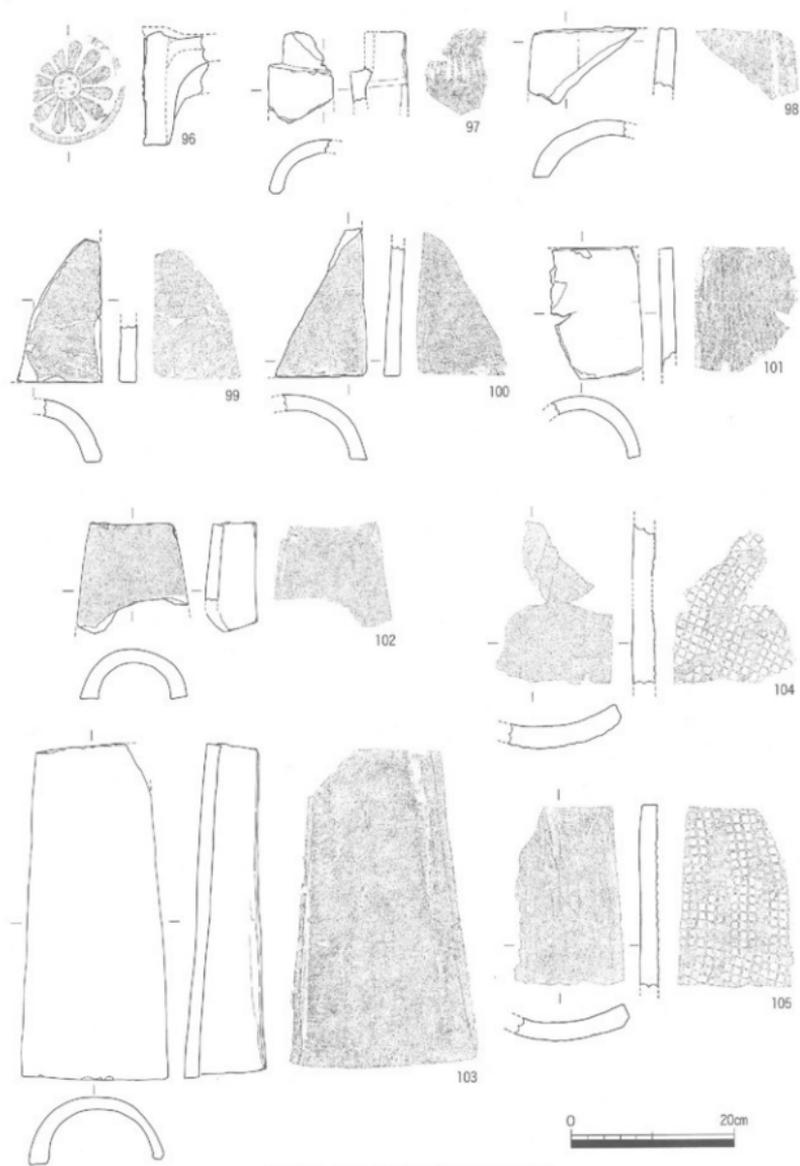
第44図～第47図は瓦類である。96は素弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。外区がなく、周縁部からすぐに内区に至る。中房の蓮子は1+7の8個である。蓮弁は細長い房状を呈し、円周を十二等分にする。上部の2枚の蓮弁間の付け根部分がつながっている箇所があり、沓傷であると考えられる。また、右下方の蓮弁の先端が周縁部とつながっている箇所があり、やはり、沓傷であると思われる。田村庵寺周辺で採集されたとされている瓦に同一の文様が認められる。詳細に観察すると、前述の沓傷が一致し、同一の沓（鋳型）で製作されたものであることがわかる。

97～103は丸瓦である。97は有段式、98～103は無段式の丸瓦である。いずれも凹面には布目圧痕が認められる。側端部はたたらから切り離しただけのものと、斜めに面取りしたものがある。104～128は平瓦である。いずれも凹面には布目圧痕が顕著に認められる。104・105・106には成形際のヘラけずりの痕跡も認められる。凸面にはいずれもタタキが認められるが、格子状のタタキを施しているもの（104～108）と縄目のタタキを施しているもの（109～128）がある。縄目のタタキには斜め方向の同心円状に施すもの（109・112・117）や斜め方向のタタキを横方向に連続して施すもの（111・113・114・115・118・119）などがある。126のように縦方向のタタキを横方向に連続して施すものもある。

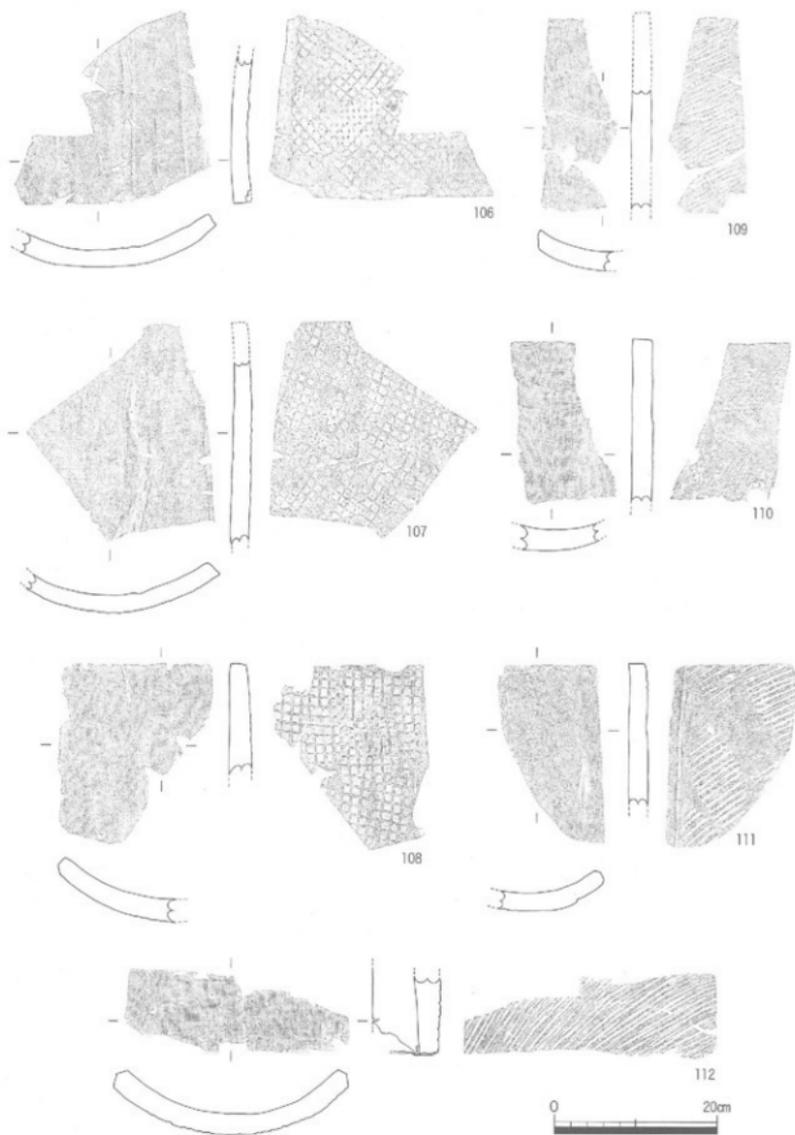
第48図～第53図は梵鐘の鋳型（外型）や鋳造関連の遺物である。129はその傾きからみて笠型と上帯との境界の突帯部分であると考えられる。130～133は上帯の突帯部であろう。134は2条の沈線と垂直に下がる1条の沈線があることから上帯と縦帯の交点部分であると考えられる。135～138は上帯下部の部分と考えられる。139・140は沈線が上下方向に刻まれていることから縦帯の部分であると考えられる。141・142も縦帯の部分と考えられる。141は下部に横方向の2条の沈線が刻まれていることから、縦帯と中帯上部の交点部分であると考えられる。上帯および中帯は通常、鋳型の成形時に、挽型の回転運動によって最初に刻まれ、縦帯はその後に鋳型を静止した状態で縦方向に刻まれるものである。したがって、縦帯の沈線の横方向の沈線は真土を掘って消す。141はこの真土を埋めた痕跡が認められる。143～146も縦方向の沈線が認められることから縦帯の一部であると考えられる。147は縦方向の沈線と斜め方向の沈線が認められる。斜め方向の沈線は、梵鐘において、中帯と下帯から、撞木の触れる部分である撞座にいたる部分に刻まれることが多い。したがって、147はこの撞座付近の部分である可能性が高い。148・149・150は横方向の沈線が刻まれているが、傾きからみて中帯に相当する部分であると考えられる。151・152は横方向の沈線とそこから斜めに向かう沈線とが刻まれている。したがって、147と同じく、撞座付近の部分であると考えられる。153は縦帯の部分、154～158は中帯もしくは下帯の部分であると考えられる。159・160は縦帯部分、162・163は撞座付近か、縦帯と中帯か下帯との交点部分であると考えられる。164は縦帯、165は傾きからみて中帯と下帯との境界部分であると思われる。161と166は蓮弁のような形状を呈しており、撞座の部分であると考えられる。167～169は縦帯の一部であると考えられる。170・171は1条の沈線しかないので、断定はできないが、傾きからみて中帯もしくは下帯の一部であると思われる。172～178は幅の広い2条の横方向の沈線が認められることから、下帯の部分であると考えられる。179～188は下部が平坦になっているため、下帯から駒の爪にかけての部分であると考えられる。189～191は溶解炉から鋳型にいたるまでの極状の部分の一部の可能性が考えられる。



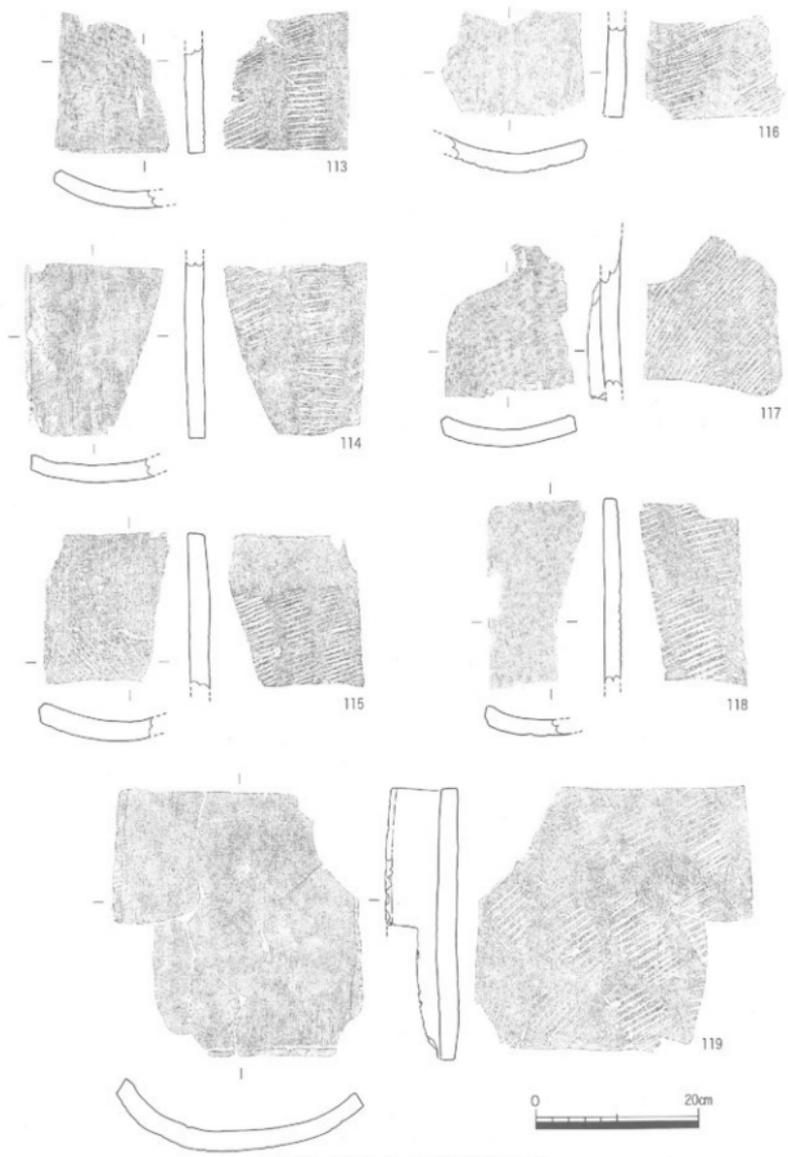
第43図 S K 03出土遺物実測図 (2)



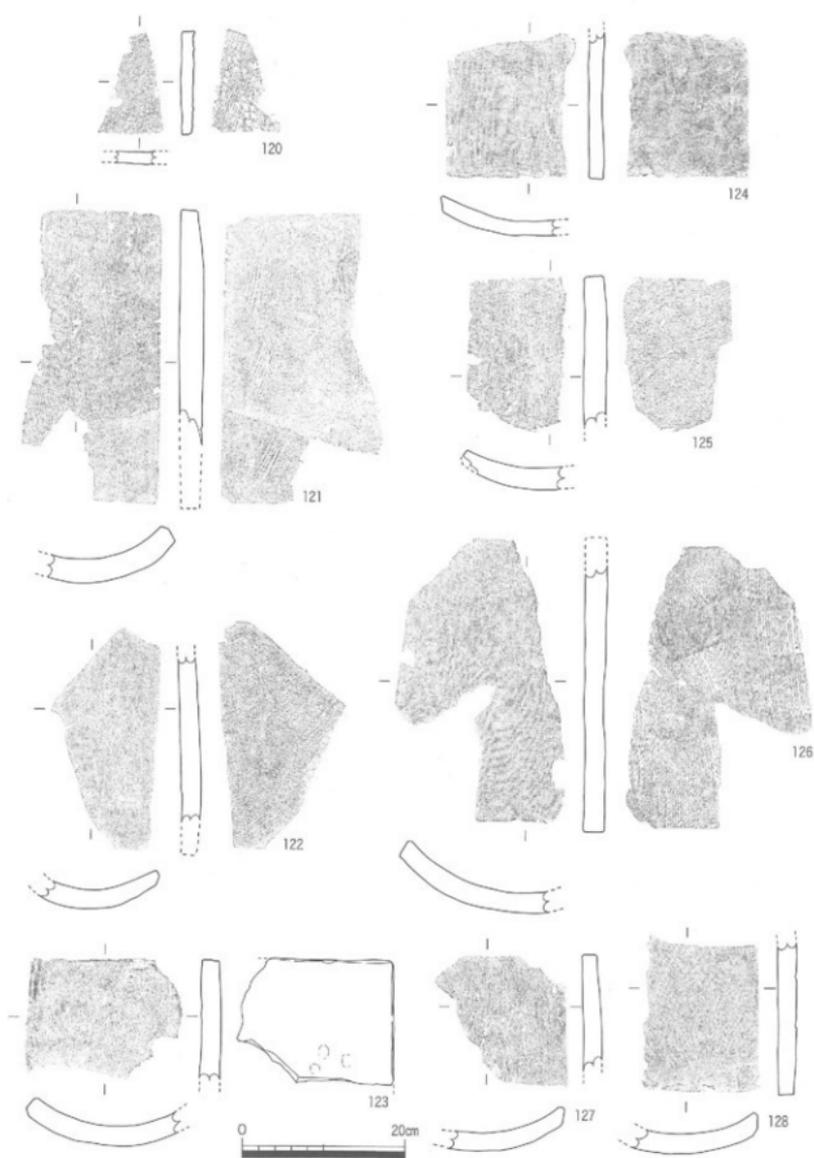
第44図 S K 03出土遺物実測図 (3)



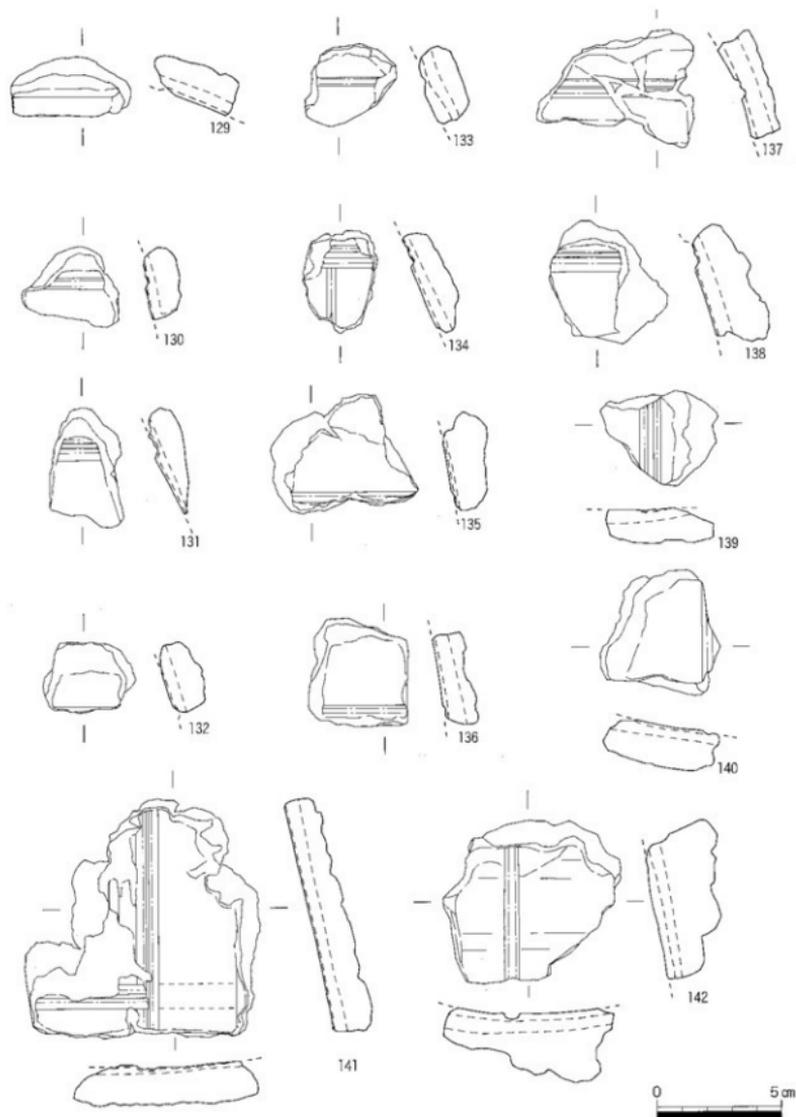
第45図 S K 03出土遺物実測図 (4)



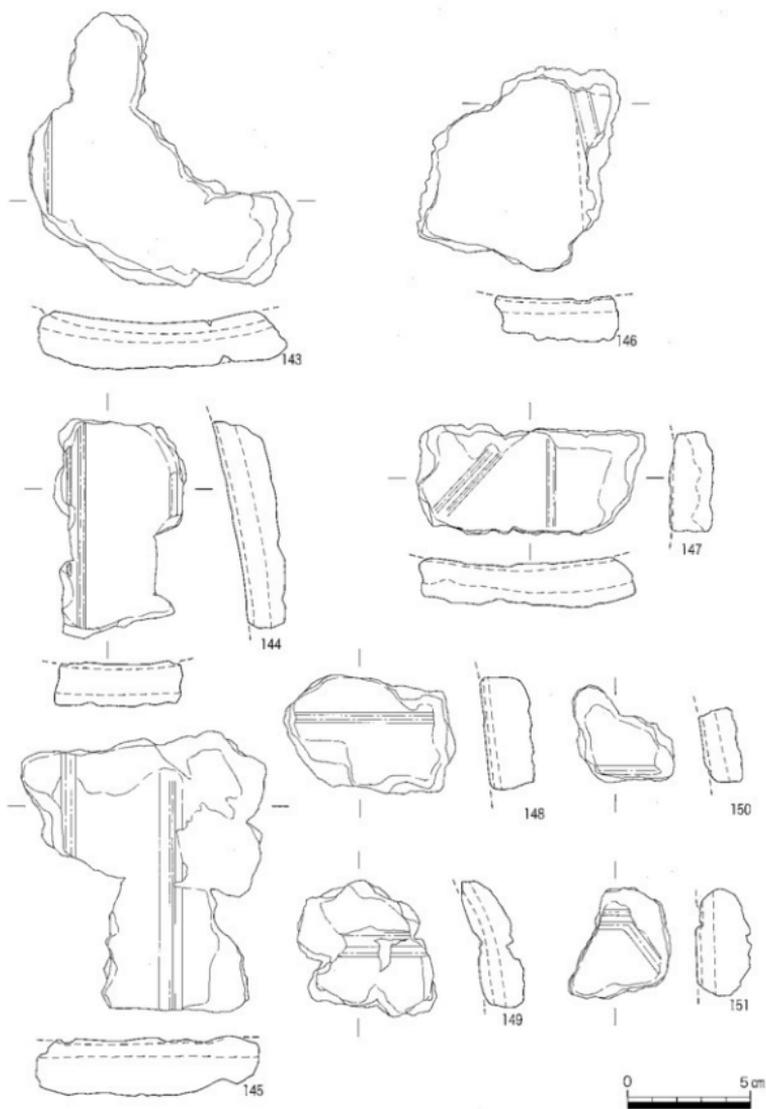
第46図 S K 03出土遺物実測図 (5)



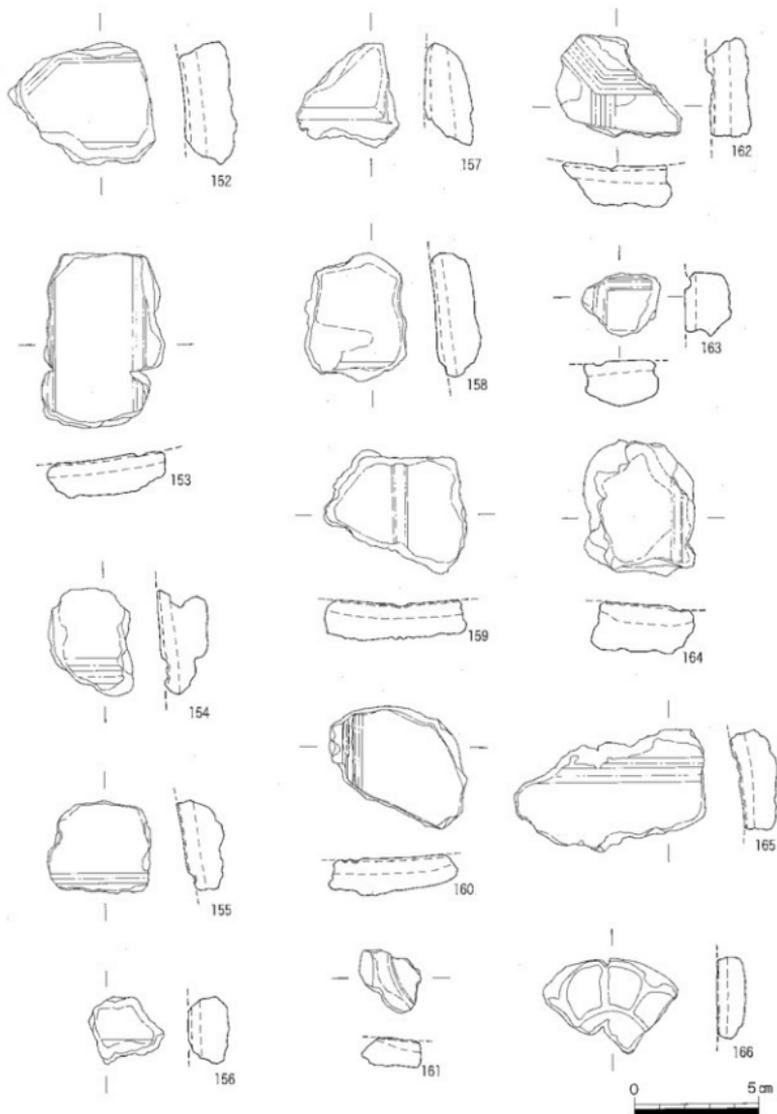
第47図 S K 03出土遺物実測図(6)



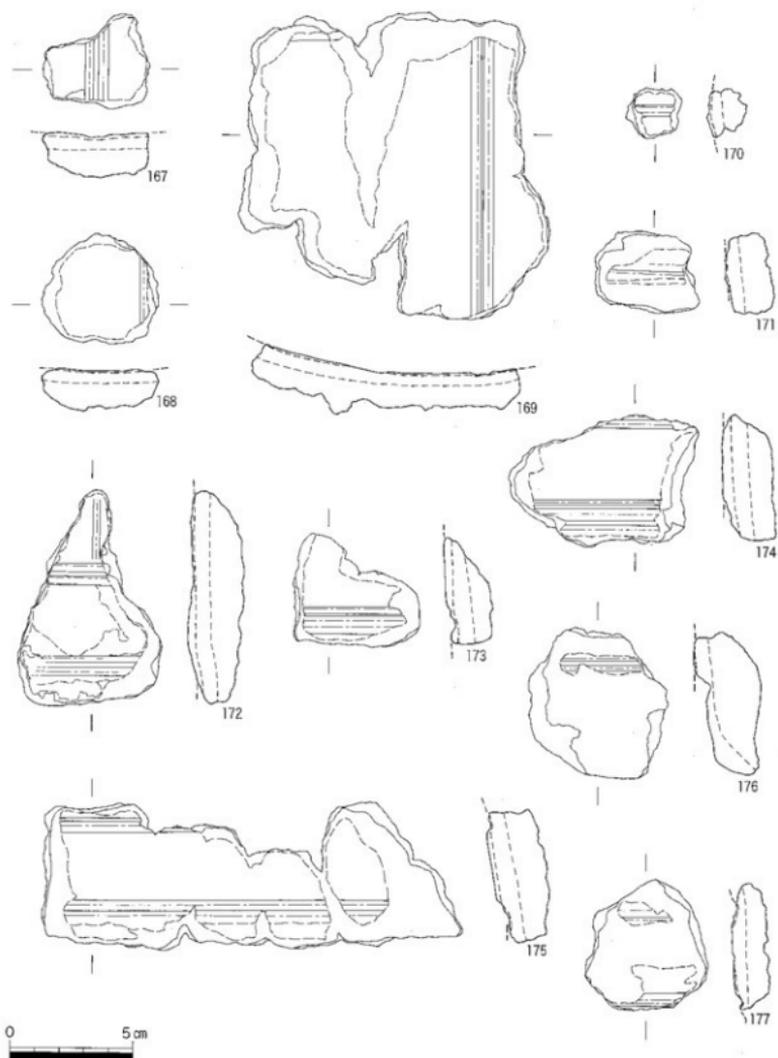
第48图 SK03出土遺物実測図(7)



第49图 S K 03出土遺物実測図(8)



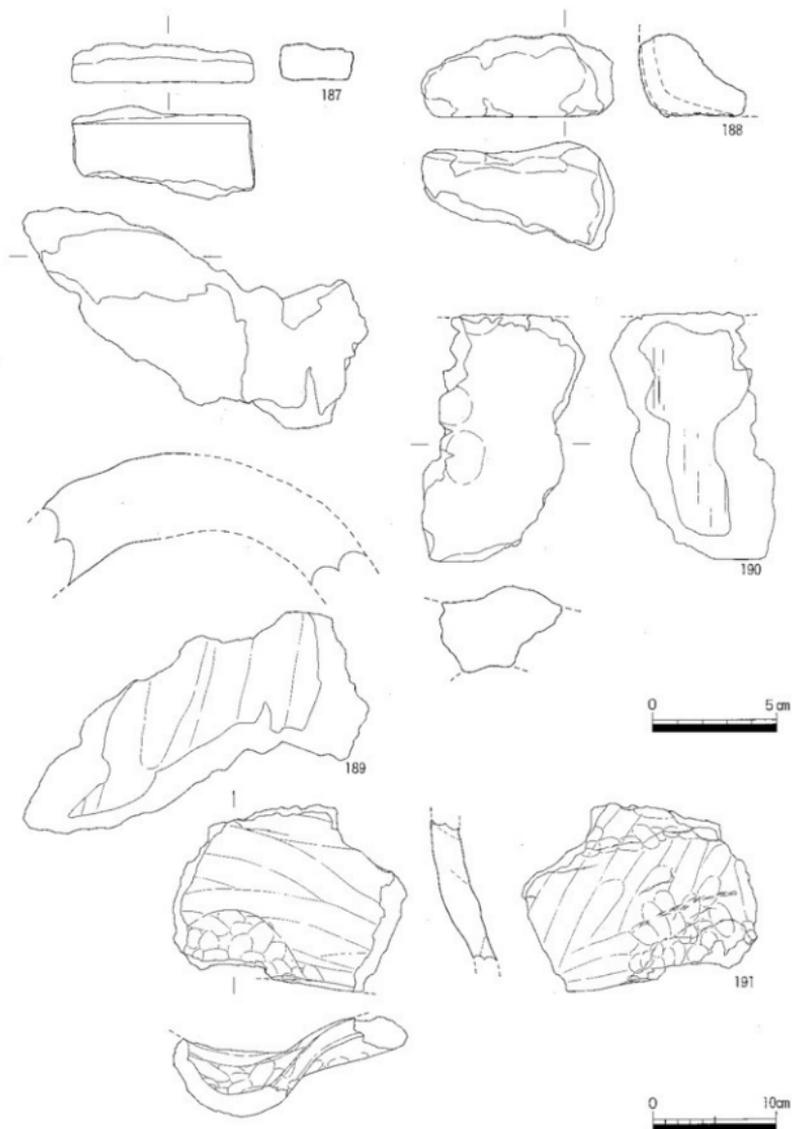
第50图 SK 03出土遺物実測図(9)



第51图 S K 03出土遺物実測図 (10)



第52図 S K 03出土遺物実測図 (11)

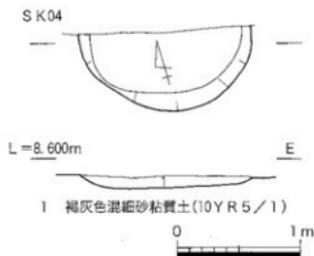


第53図 S K 03出土遺物実測図 (12)

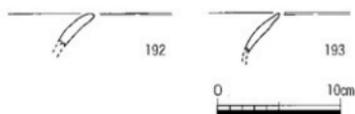
・SK04 (第54図、図版30)

南調査区の北端部で検出した土坑である。SD05とSD06の間にあり、北半分がSD06によって破壊されていることから、SD06よりも古いことがうかがえる。元来は直径1.2mほどの円形を呈していたと考えられる。深さは約20cmと浅い。埋土は褐灰色混細砂粘質土の単一層である。

第55図はSK04から出土した遺物である。いずれも弥生土器の壺の口縁部である。ややふくらみながら外方へ丸くおさめるもので、弥生時代後期ごろのものと思われる。図化し得なかったが、そのほかにも須恵器の破片や瓦片などが出土している。



第54図 SK04平・断面図



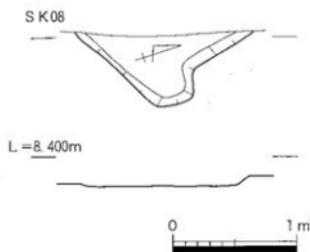
第55図 SK04出土遺物実測図

・SK08 (第56図)

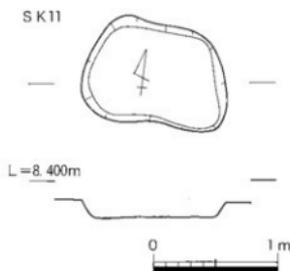
北調査区の南端の部分で検出した不定形の土坑である。西半分は調査区外へ延びるため、未調査である。深さ10cmと非常に浅い。

・SK11 (第57図)

北調査区の南よりの部分で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。長径約1m、短径約60cmで深さは20cmを測る。



第56図 SK08平・断面図



第57図 SK11平・断面図

・ S P 003 (第58図)

南調査区の南端部分、S D 01の北側で検出した柱穴跡である。直径30cmであるが、深さは70cmと非常に深い。周辺の柱穴跡と掘立柱建物を構成する可能性も否定できないが、ここでは単なる柱穴跡としておく。

194はS P 003から出土した遺物である。須恵器杯の口縁部である。そのほかにも須恵器の破片などが出土している。

・ S P 011 (第59図、図版42)

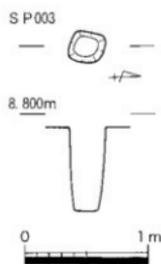
南調査区の南よりの部分で検出した柱穴跡である。S P 002やS P 013・015、またS P 003などと掘立柱建物を構成する可能性も考えられる。直径30cm、深さ50cmを測る。

195はS P 011から出土した遺物である。土師質土器の杯である。平安時代後期ごろのものと思われる。

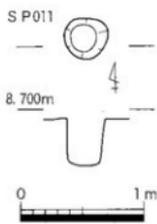
・ S P 071 (第60図、図版42)

南調査区の南よりの部分、S K 03の約3 m北側で検出した柱穴跡である。長径50cm、短径30cmを測る大型のもので、深さも約60cmと深い。

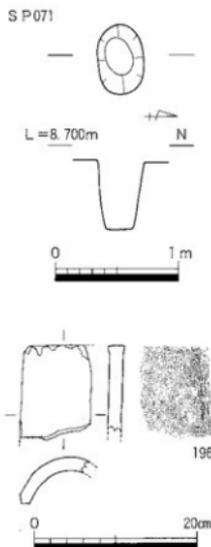
196はS P 071から出土した遺物である。無段式の丸瓦の連結部の破片である。凹面には布目圧痕が顕著に認められる。側端部は斜め方向に面取りしており、断面形は三角形を呈する。平安時代後期ごろのものと考えられる。



第58図 S P 003平・断面図、
出土遺物実測図



第59図 S P 011平・断面図、
出土遺物実測図



第60図 S P 071平・断面図、
出土遺物実測図

・ S P 078 (第61図)

南調査区の南よりの部分の調査区西端で検出した柱穴跡である。S P 079と重複しており、北半分を S P 079によって破壊されている。深さ20cmを測る。

197は S P 078から出土した遺物である。弥生時代後期の甕の口縁部の破片である。そのほかにも須恵器の破片などが出土している。

・ S P 085 (第62図)

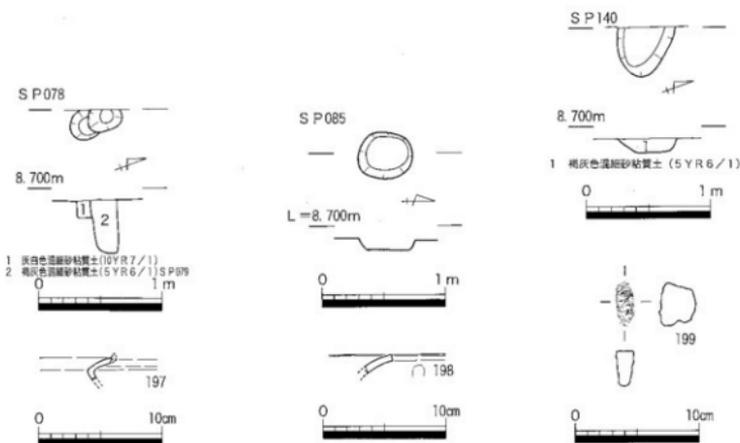
南調査区の南よりの部分、S H 01に重複して検出した柱穴跡である。S H 01の壁溝を破壊して構築されていることから、明らかに S H 01よりも後出する。直径40cm、深さ10cmを測る。

198は S P 085から出土した遺物である。弥生時代後期の甕の口縁部の破片である。ほかにも須恵器の破片などがいくつか出土している。

・ S P 140 (第63図)

南調査区の中央部の西端部分で検出した柱穴跡である。西半分は調査区外へ延びる。深さ20cmを測る。

199は S P 140から出土した遺物である。土製品であるが、詳細は不明である。



第61図 S P 078平・断面図、
出土遺物実測図

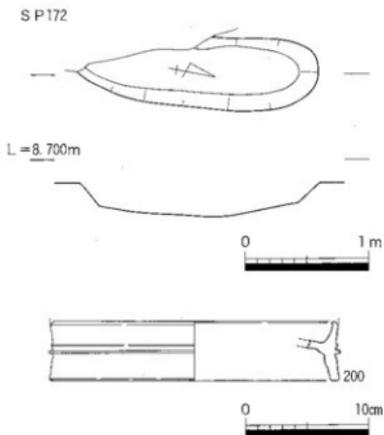
第62図 S P 085平・断面図、
出土遺物実測図

第63図 S P 140平・断面図、
出土遺物実測図

・ S P 172 (第64図、図版42)

南調査区の北よりの部分で検出した長楕円形を呈する遺構である。西側を後出する S D 04 によって破壊されているため、正確な規模は不明であるが、長径 2m 以上、短径 60cm、深さ 30cm を測る。

200 は S P 172 から出土した遺物である。須恵器の円面硯の破片であると思われる。復元すると直径約 30cm のものであったと推測される。ほぼ垂直に立ち上がり、外面には 2 条の突帯をめぐらしている。陸部と海部との境界はあまり明瞭でなく、わずかに陸部が盛り上がる。脚部はわずかに外方へ張り出して安定を図っており、端部は四角形を呈する。墨などの付着は認められなかった。平安時代後期ごろのものであると考えられる。田村庵寺に関連する施設で使用されていた可能性をうかがわせる。



第64図 S P 172 平・断面図、出土遺物実測図

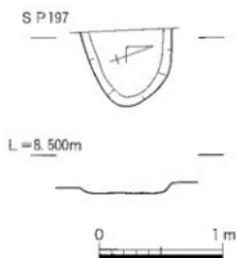
・ S P 197 (第65図)

北調査区の南よりの部分で検出した柱穴跡である。西半分は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、深さは 10cm と浅い。

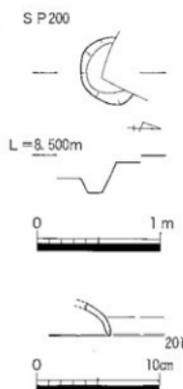
・ S P 200 (第66図)

北調査区中央部 S D 13 の南側で検出した柱穴跡である。大部分が現代の攪乱によって破壊されているため、正確な規模は不明である。

201 は S P 200 から出土した遺物である。須恵器の杯蓋の口縁部であると考える。



第65図 S P 197 平・断面図



第66図 S P 200 平・断面図、出土遺物実測図

・ S X 01 (第67図、図版31・32・55)

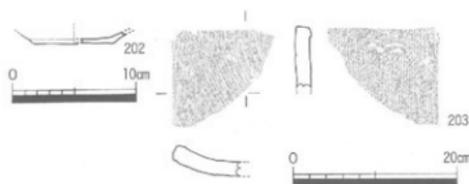
南調査区の南端で検出した不定形の浅い落ち込み状の遺構である。S X 02と同一の遺構と考えられる。現代の攪乱によって、一部が破壊されている。埋土中には焼土塊や炭、溶着した瓦片などがあり、梵鐘鑄造に使用した溶解炉や鋳型を廃棄した遺構であると考えられる。

第68図はS X 01から出土した遺物である。202は須恵器の杯の底部である。203は平瓦片である。凹面には布目瓦痕が認められ、凸面には細い縄目のタキが縦方向に施されている。

梵鐘鑄造遺構であるS K 03によって梵鐘を鑄造した後に、不要になった溶解炉や鋳型を投棄したものであると考えられる。



第67図 S X 01・02平・断面図



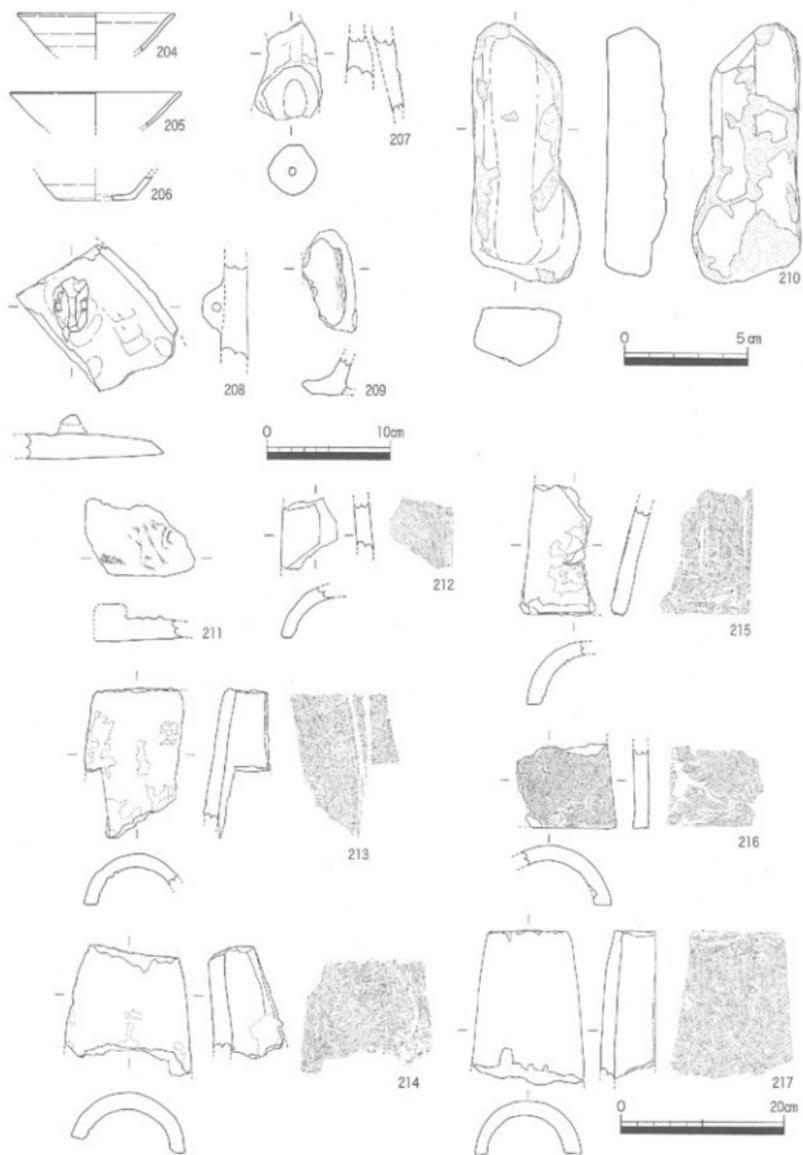
第68図 S X 01出土遺物実測図

・ S X 02 (第67図、図版31・32・33・55・56・57・58・59)

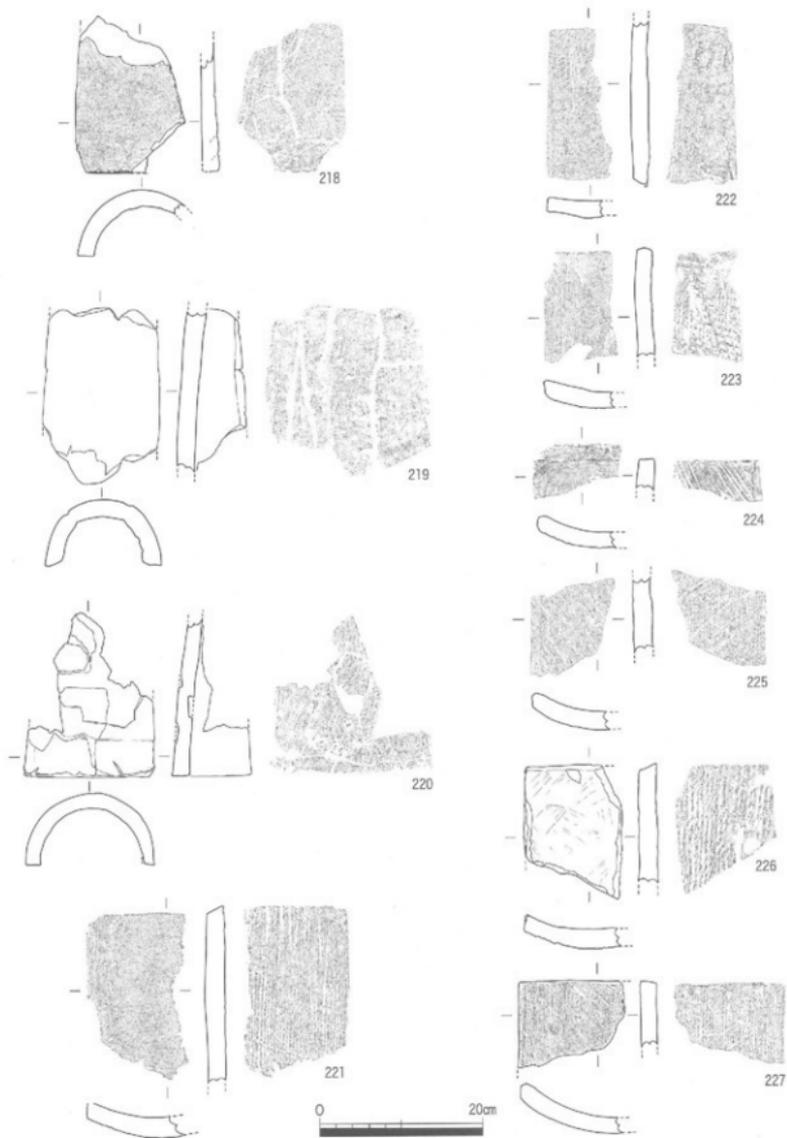
S X 01と同一の遺構であると考えられる、不定形の落ち込み状の遺構である。最大幅約5m、深さは約10cmと非常に浅いが、多量の遺物が包含されていた。埋土中からは溶着した瓦片が大量に出土し、梵鐘を鑄造する際に構築された溶解炉の破片であると考えられる。S X 01が焼土塊が多かったのに比べ、S X 02では、溶解炉の破片が多いのが注目される。これらの破片には溶着した瓦片が多く見られ、土を使って作った溶解炉の補強に不要になった瓦類が使用されたことを物語っている。

第69図～第71図はS X 02から出土した遺物である。204～206は須恵器の杯である。207は須恵器の蓋であると思われる。扁平な体部に把手上のつまみが貼り付けられている。外周と方向が一致しないため、何箇所かに付けられていたものと思われる。端部は斜めに面取りをして仕上げている。210は砥石である。砂岩製である。

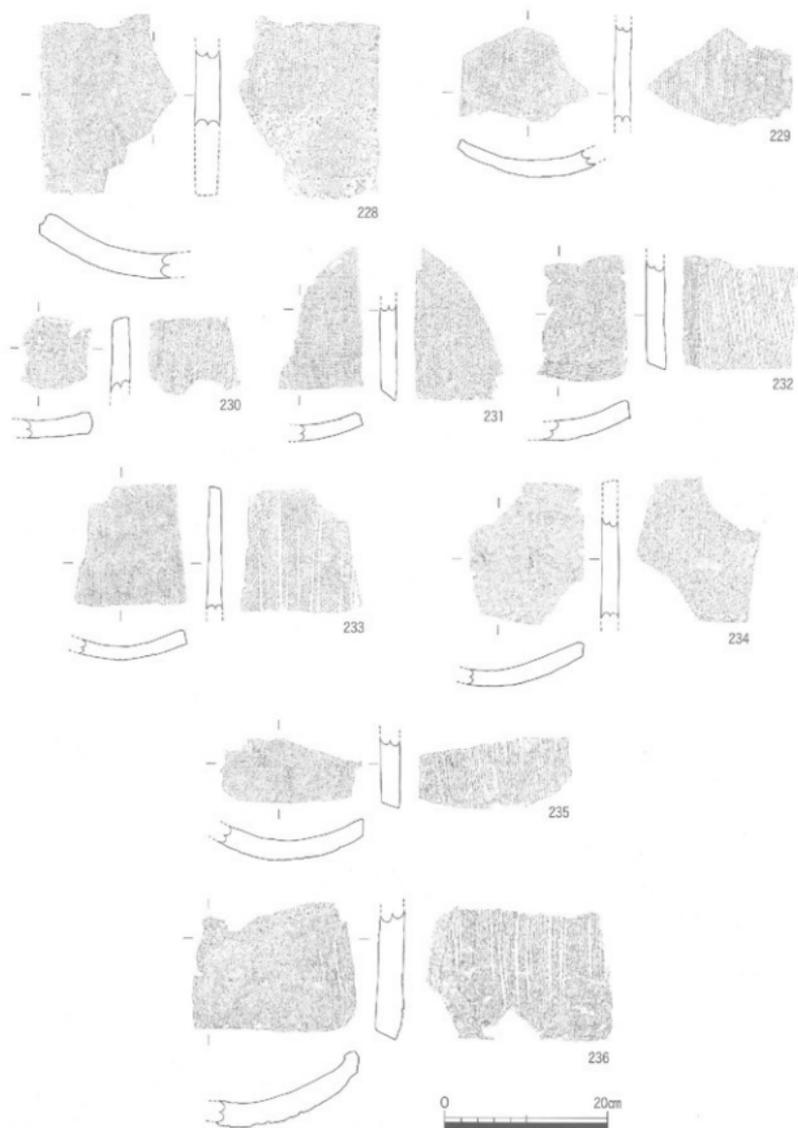
211は軒丸瓦の破片である。瓦当部分のごく一部しか残存していないが、外区に鋸歯文と珠文、内区は単弁の蓮華文がわずかに認められる。212～220は丸瓦片である。いずれも無段式のものばかりで有段式



第69図 S X02出土遺物実測図(1)



第70図 SX02出土遺物実測図(2)

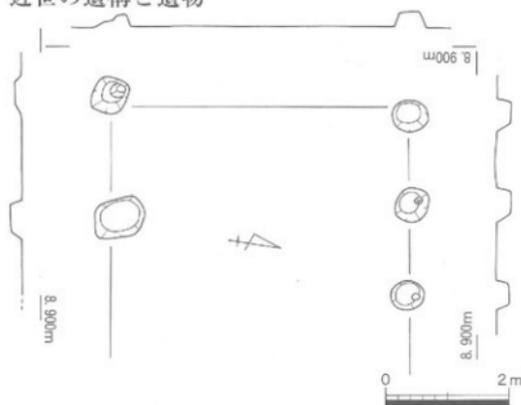


第71圖 S X02出土遺物実測圖(3)

(玉縁)のものは認められない。ほとんどの破片に粘土や灰が溶着しており、溶解炉として使用されていたことがうかがえる。221～236は平瓦片である。凸面のタタキには(1) 細い縄目のタタキが縦方向に施されているもの、(2) 細い縄目のタタキが斜め方向に施されているもの、(3) やや荒い縄目のタタキが施されているもの、(4) 格子状のタタキののち、縄目のタタキを施しているもの、などがあるが、(1)のものが圧倒的に多い。

SX01・SX02は梵鐘鋳造遺構SK03によって、梵鐘が鋳造された後に不要になった溶解炉や焼土などを廃棄したものと考えられる。

第4節 中・近世の遺構と遺物



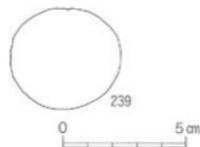
第72図 SB02平・断面図

・SB02 (第72図、図版55)

南調査区の中央やや南よりの部分で検出した掘立柱建物跡である。主軸方向はほぼ東西であるが、3度ほど北偏する。梁行2間以上、桁行1間で構成される。東側は調査区外へ延びる。

第73図はSB02を構成する柱穴跡から出土した遺物である。238は土師質土器の鉢である。内面には2条の御目が3箇所以上に付けられている。口縁端部は断面形が三角形を呈する。外面には指頭圧痕が顕著に認められる。

出土遺物からみて、SB02は鎌倉時代ごろに廃絶したものと考えられる。



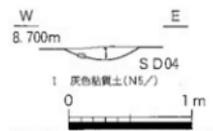
・SD04 (第74図、図版33・60)

南調査区の中央部から北よりにかけて、南北に走る溝状遺構である。SD02・03を横切る形で破壊して、西へ方向を変えている。幅60cm、深さ20cmを測る。

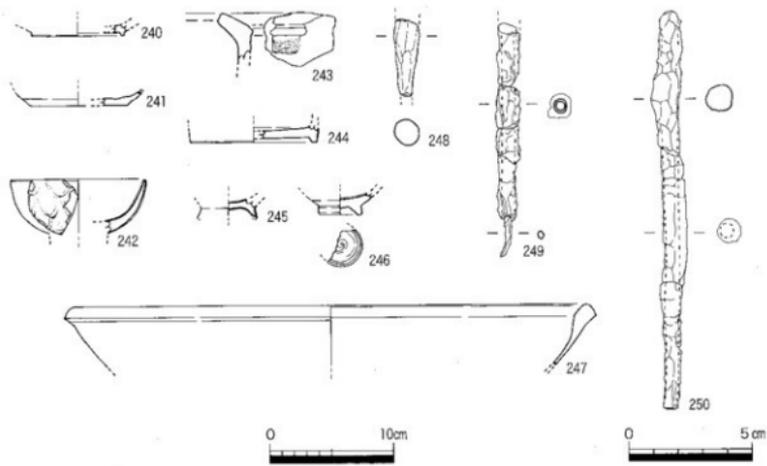
第75図はSD04から出土した遺物である。240・241は土師器杯である。240には高台が付いている。242は染付碗である。二重網目文が認められ、江戸時代後期ごろのものであると考えられる。243は瓦質の土製品である。蓋のようなものを推定できるが詳細は不明である。あるいは香炉の蓋かも知れない。244

第73図 SB02出土遺物実測図

～246は陶磁器の底部である。247は土師質土器の土鍋の口縁部であると思われる。248は土師質土器の土鍋の脚部であると思われる。249・250は鉄製品である。いずれも釘状の細いものである。



第74図 S D04土層断面図

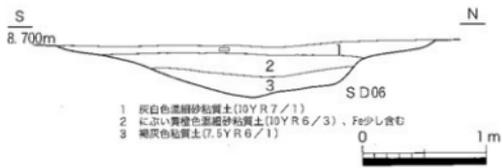


第75図 S D04出土遺物実測図

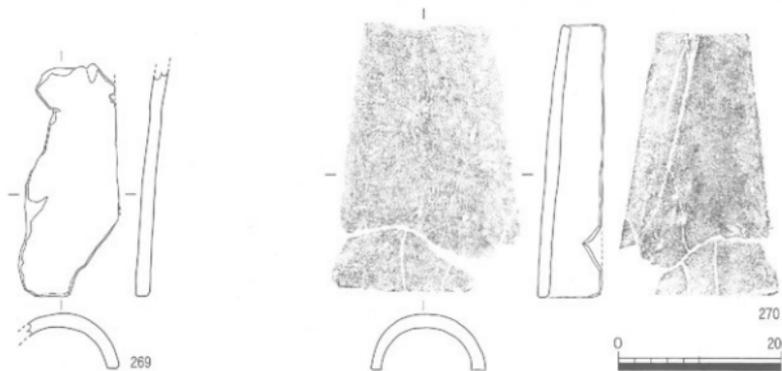
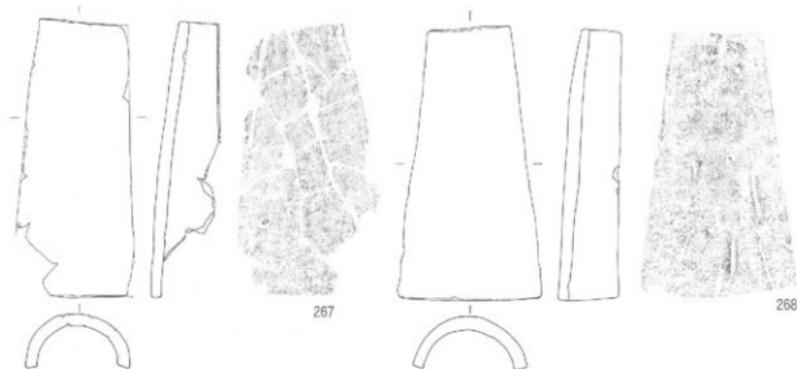
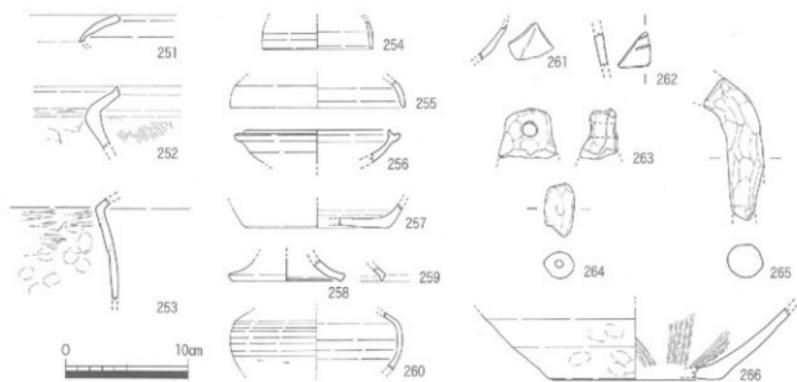
・ S D06 (第76図、図版34・61・62)

南調査区北端部で検出した東西方向の溝状遺構である。幅3.2m、深さ60cmと大きい溝状遺構であり、ほぼ東西に流れる。埋土は3層に分けられるが、最下層には周辺の古代の遺構の埋土と同じ、褐灰色粘質土が認められ、この遺構が古代より機能していた可能性も考えられる。また、位置関係から見て本遺跡周辺にわずかに遺存する、いわゆる条里型地割と合致する可能性が高く、坪界の溝であるかも知れない。

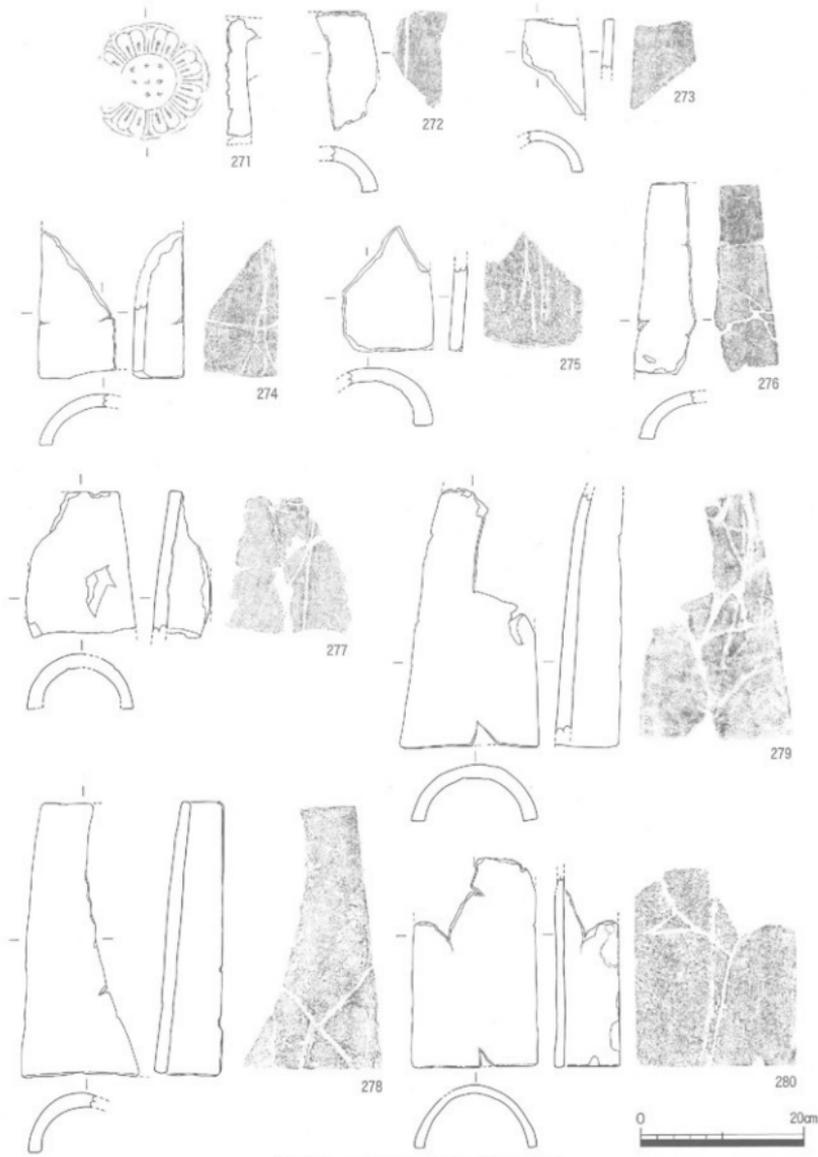
第77～79図はS D06から出土した遺物である。251～253は弥生土器の甕の口縁部である。いずれも弥生時代後期後半ごろのものと思われる。254～262は須恵器である。254・255は杯蓋、256は杯身である。257は高台の付かない壺の底部であると思われる。258・259は高杯の脚部である。260は短頸壺の体部であると思われる。261・262は体部のみで器種は不明であるが、ヘラ記号のようなものが付けられている。263は錆蝋の吊り手の部分である。264は管状土錘である。265は土師質の土鍋の脚部である。266は須恵器のこ



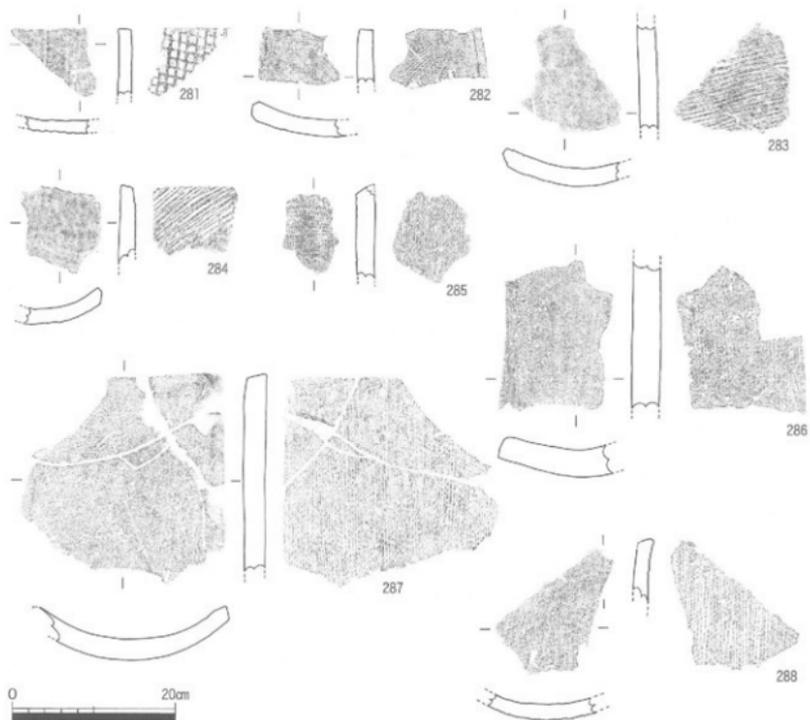
第76図 S D06土層断面図



第77图 S D06出土遺物実測図(1)



第78図 S D 06出土遺物実測図 (2)



第79図 S D06出土遺物実測図(3)

ね鉢である。5条の卸目が数箇所に刻まれている。これらの土器には弥生時代から中世までの広範な時期のものが認められる。

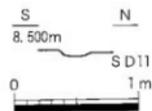
267～270、272～280は丸瓦である。いずれも凹面に布目圧痕が認められる。また、布を縫い合わせた紐の痕跡が認められるものもいくつか認められる。270のように、凸面に縄目のタタキの痕跡がわずかに認められるものもある。280は有段式（玉縁）でそれ以外はすべて無段式のものである。

271は軒丸瓦である。瓦当部分しか出土しておらず、丸瓦部は欠損している。また、周縁部も欠損しており、外区より内側の部分が遺存している。瓦当文様は、八葉複弁蓮華文で、中房内の蓮子の数は1＋8式の9個である。従来から田村廃寺周辺から採集されている軒丸瓦の文様と同一のものであり、奈良時代ごろのものであると考えられる。

281～288は平瓦である。いずれも凹面に布目圧痕が顕著に認められる。凸面については、281のように格子状のタタキを施すもの、282・283・284のように細い縄目のタタキを斜め方向に施しているもの、285～288のように細い縄目のタタキを縦方向に施しているもの、がある。特に282については、細い縄目のタタキを全面に施した後、格子状にナデ消している。

・SD11（第80図）

南調査区と北調査区の間の部分で、第1次調査時に検出した溝状遺構である。深さが10cm未満と非常に浅いため、調査区の中央部分で消滅している。



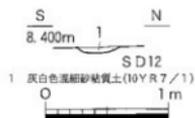
第80図 SD11土層断面図

・SD12（第81図）

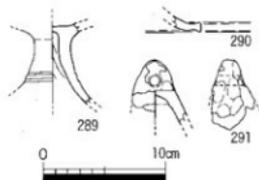
北調査区の南端の部分で検出した浅い溝状遺構である。深さ10cm未満で方向はほぼ東西であるが、やや南偏する。埋土は灰白色混細砂粘質土の単一層である。

第82図はSD12から出土した遺物である。289・290は須恵器の高杯の脚部である。291は土師器の蜻壺の吊り手の部分である。

埋土の状況や蜻壺が出土していることから、SD12は中世段階に埋没したものと考えられる。



第81図 SD12土層断面図

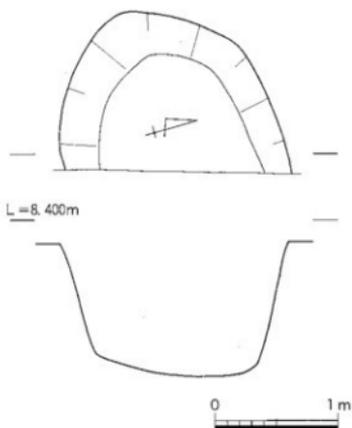


第82図 SD12出土遺物実測図

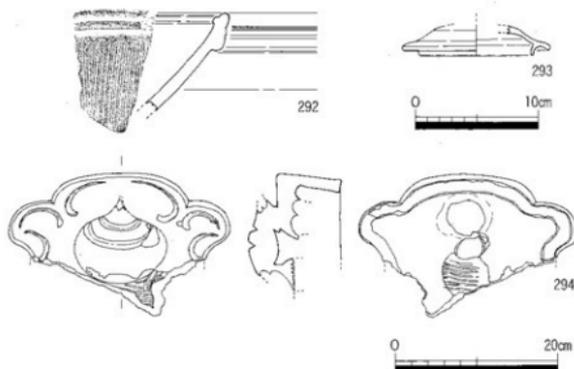
・ S K 09 (第83図、図版35・63)

第1次調査時のトレンチの北端部で検出した大型の土坑である。東半分が調査区外へ延びるため、半分しか検出し得なかった。直径約1.8mの円形を呈していたと考えられ、深さも1.1mを測る。

第84図はS K 09から出土した遺物である。292は陶器の播鉢の破片である。胎土や焼成からみて備前産のものと考えられる。口縁端部は断面形が長い三角形で、2条の沈線がめぐる。内面には1条の突帯がめぐり、全面に卸し目が刻まれている。293は須恵器の杯蓋である。294は鬼瓦である。雲型宝珠付のもので、堂宮などよりも住宅建築のほうに多く用いられるものであり、近世後半以降、広く普及したもので、S K 09も近世後半以降に埋没したものと考えられる。



第83図 S K 09平・断面図

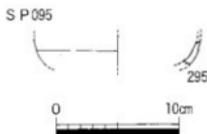


第84図 S K 09出土遺物実測図

・ S P 095 (第85図)

南調査区中央やや南よりの部分で検出した柱穴跡である。

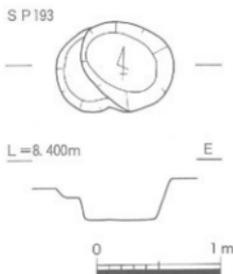
第86図はS P 095から出土した遺物である。295は土師器の杯の体部である。



第85図 S P 095出土遺物実測図

・ S P 193 (第86図、図版63)

北調査区の南よりの部分で検出した柱穴跡である。2つの柱穴跡が重複して検出されている。直径70cm、深さ40cmを測る。

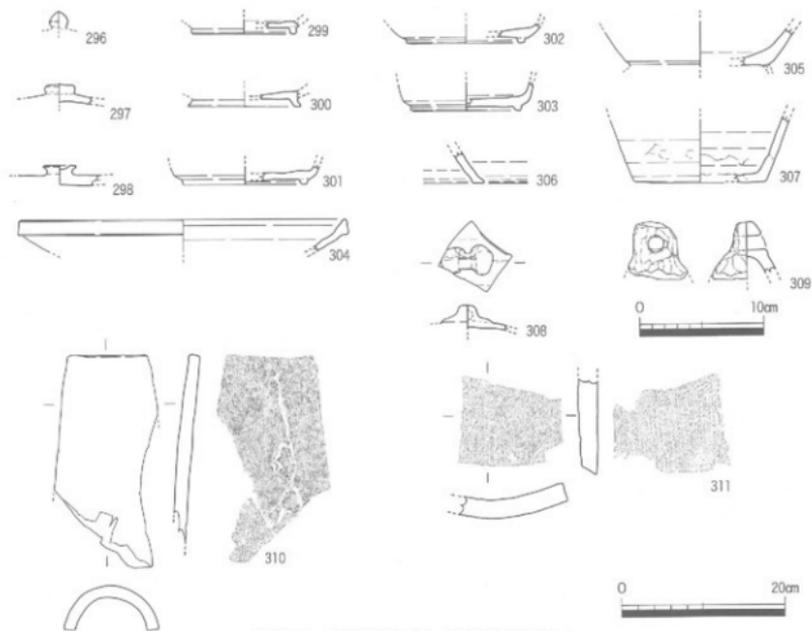


第86図 S P 193平・断面図

・ 古代以降の包含層出土遺物について

第87図は包含層出土遺物のうち、古代以降に属すると思われる遺物である。

296・297・298は須恵器杯蓋のつまみの部分である。296は宝珠型、297は扁平なもの、298は中心が凹むもの、といくつかの種類が認められる。299～303は須恵器の高台付杯の底部である。高台の断面形が四角形を呈する299や301・302、やや三角形ぎみな303、外方へ踏ん張る300などがある。304は須恵器の鉢の口縁部である。端部は断面形が三角形を呈するものである。305は須恵器の高台付壺の底部である



第87図 古代以降包含層出土遺物実測図

と思われる。306は須恵器の高杯の脚部であると思われるが、詳細は不明である。307は須恵器壺の底部である。底部は平坦なタイプのものである。308は陶器の一部である。無釉で赤褐色を呈することから備前産ではないかと考えられる。体部に扁平な粘土を折り曲げて接着し、指で押し付けている。また、折り曲げた部分をゆびでつまんで、把手状に成形している。309は土師器の甗壺の吊り手の部分である。

310は無段式の丸瓦である。311は平瓦片である。凹面には布目圧痕が顕著に認められ、凸面には細い縄目のタタキが縦方向に施されている。

第4章 自然科学的分析

田村遺跡の残留磁化測定による年代推定

株式会社パレオ・ラボ
Paleo・Labo Co., LTD.

梵鐘遺構の年代推定

藤根 久・Lomtatize Zauri (パレオ・ラボ)

1. はじめに

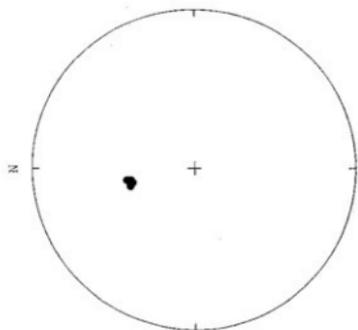
田村遺跡は、香川県丸亀市田村町1745-1に所在する。調査では、県内でははじめてとされる奈良～平安時代と思われる梵鐘遺構が検出された。ここでは、この梵鐘遺構の鋳型底部焼土および周辺部焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から年代を推定した。

2. 考古地磁気年代推定の原理

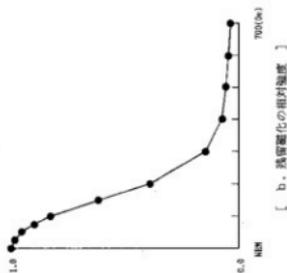
地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と並行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約6.74°、伏角は約47.76°、全磁力（水平分力）は約31529.1（nT）である（理科年表、1993；いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後も磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が焼かれた当時の地磁気の方角を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方角は少しずつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977、Shibuya、1980；第1図）。

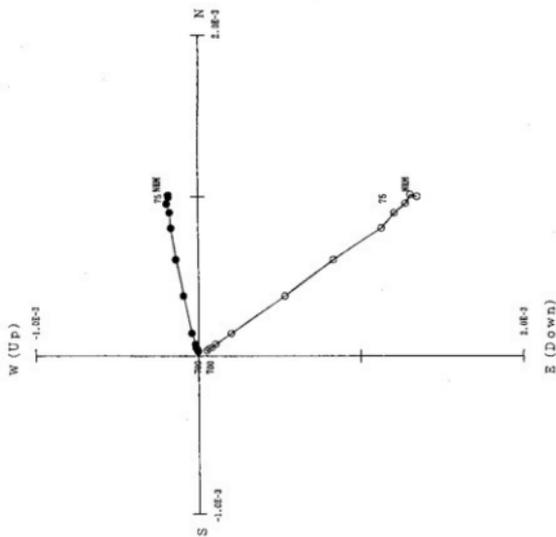
こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などにつ



●: 175°E O: 175°E
 [a. シュミット・ネット投影図]



[b. 残響電位の相対強度]



●: N-S-E-W O: N-S-Up-Down
 距離: 100 (0.5); 100; 200; 300; 400; 500; 600; 700
 [c. シグマ・ベクトル図 (単位: emu)]

第88図 段階交流消磁測定結果 (試料No.5)

いても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、 ^{14}C 年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a) 測定用試料の採取および整形、b) 残留磁化測定および統計計算を行い、c) 地磁気永年変化曲線との比較を行い、年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために段階交流消磁も行った。

a. 測定用試料の採取および整形

試料は、焼けた鋳型底部面および周辺部において、①一辺約4 cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘った。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強した。③やや固め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一片5 cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置した。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入した。⑤資料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰り、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5 cm・厚さ1 cm程度の立方体に切断した。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とした。試料は鋳型底部から8試料、周辺赤化部分から2試料の合計10試料である。

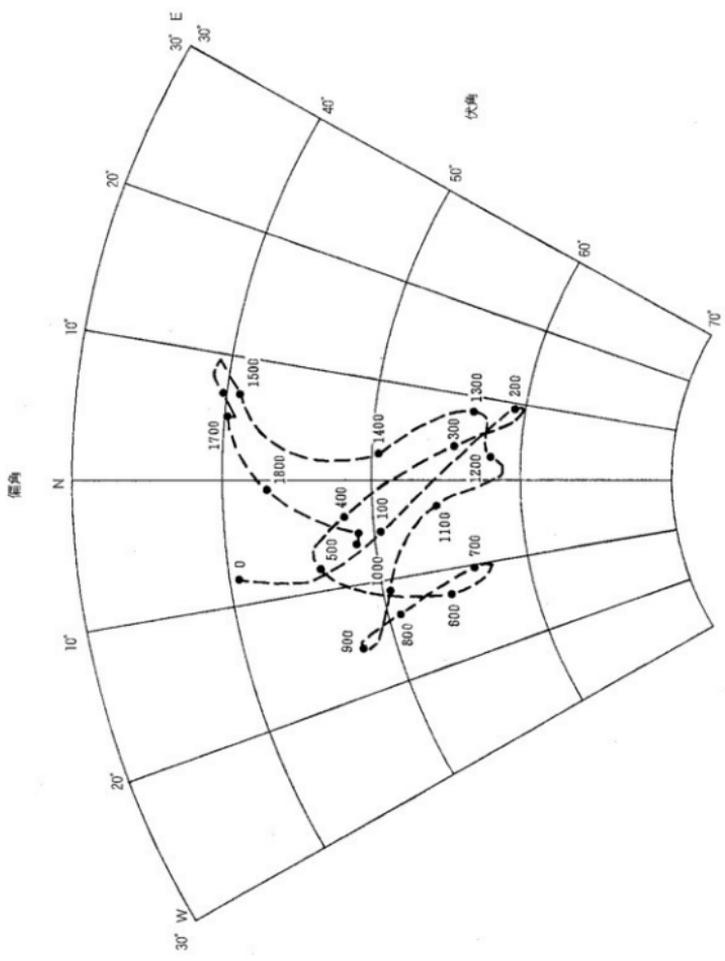
b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（No.5）について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は 10^{-3}emu と比較的強いことが分かり、NRM（自然熱残留磁化）に対する相対強度は、75 Oe消磁に対して約89.9%と高い値であった。さらに、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化した方向を記録していることが分かった。

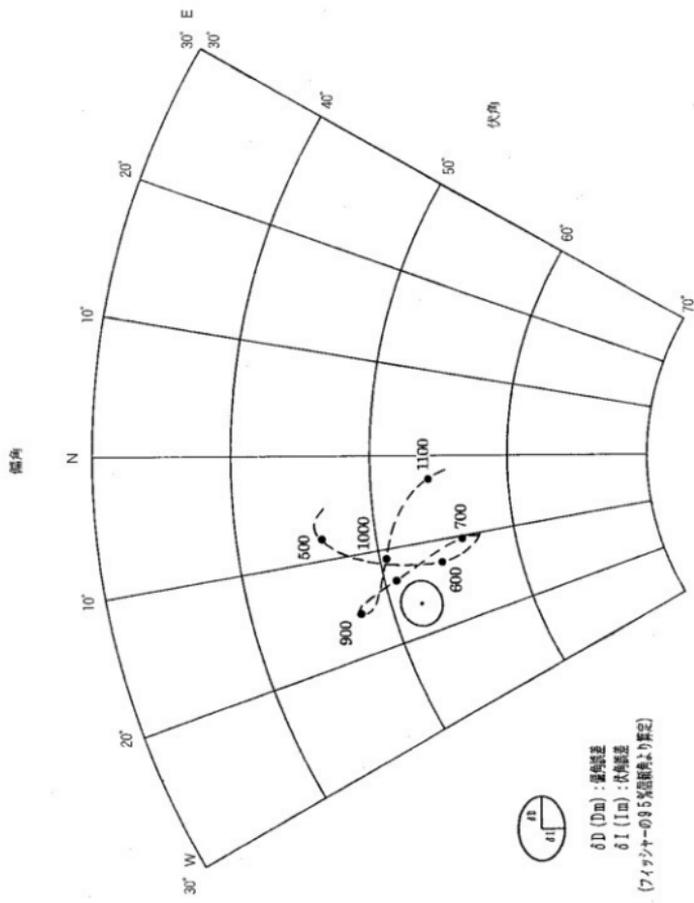
以上の理由から、75 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、75 Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（ D_i ）、伏角（ I_i ）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（ D_m 、 I_m ）を求めた。信頼度数は、1000.60であり、誤差も小さな値であった（第4表）。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した 6.74°W を使用した。その結果は、Shibuya（1980）による地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算出した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。



第89図 過去2000年間の地磁気永年変化曲線 (Shibuya, 1980)



第90図 地磁気永年変化曲線 (Shibuya, 1980) の一部と箕輪跡型底部焼土の磁化方向

4. 焼成年代値の推定

第4表に、底部および周辺焼土の残留磁化測定結果と統計計算結果を示す。磁化方向は、良くまとまった値となり、その誤差も小さい。第90図には、Shibuya (1980) による地磁気永年変化(破線)の一部曲線とともに焼土の磁化方向を示した。その結果、標準曲線からやや外れるものの、A.D.500~1000年間の曲線付近に位置する。年代推定は、この第90図において測定試料の近傍に位置する標準曲線に対して最も近い点に移動して年代値およびその誤差を算出した。なお、対象とした曲線区間は、A.D.500~600年間、A.D.700~900年間、A.D.900~1000年間である。

算出した推定年代は、第5表の通りである。この梵鐘遺構は、調査において奈良・平安と予想されていることから、A.D.790±30年あるいはA.D.950年±35年が候補となる。なお、この遺構に付随して出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、補正暦年代値としてA.D.665~A.D.775年と測定されている。

引用文献

Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15, 200-203.

理科年表 (1993) 国立天文台編、丸善、952p

Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2, 000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p

第4表 梵鐘遺構焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)

遺構名	試料No	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	備考	統計処理項目	統計値
鋳型底部 (75 Oe消磁)	1	-11.2	50.2	1.270			10
	2	-10.4	49.6	1.670			
	3	-11.2	50.9	3.390			
	4	-7.6	52.3	0.848			
	5	-10.9	53.0	1.520	段階交流消磁		52.18
	6	-3.4	55.5	0.791			
	7	-8.4	53.6	0.598			2.50
	8	-10.5	51.7	0.166			
	9	-12.2	50.1	1.610	周辺赤化部分		1.53
	10	-11.4	54.7	1.170	周辺赤化部分		
	11						1000.60
	12						
	13						
	14						
						平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	1.30

第5表 梵鐘遺構の残留磁化測定による年代推定

試料	調査による予想年代	残留磁化測定による推定年代 (A.D.)
梵鐘遺構	奈良・平安	585±15年、790±30年、950±35年

放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. 放射性炭素年代測定について

田村遺跡から出土した土壌有機物試料1点と炭化物試料1点の放射性炭素年代測定を行った。炭化物試料1点の測定については、(株)地球科学研究所に依頼した。

炭化物試料については、酸洗浄を施して不純物を除去し、石炭に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定し、年代値を算出した。その結果は下記に示す。なお、年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用し、同位体補正をして年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 δ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。試料の ^{14}C 計数率と現在の標準炭素 (Modern standard carbon) の ^{14}C 計数率の比 $^{14}\text{C}(\text{sample}) / ^{14}\text{C}(\text{modern}) \geq 1$ の時は、Modernと表示し、 $^{14}\text{C}(\text{sample}) / ^{14}\text{C}(\text{modern})$ の%値を付記する。

土壌有機物試料については、酸処理を施して不純物を除去し、酸素気流中で燃焼させて二酸化炭素としたものをアンモニア水に通し、酸化カルシウムの水溶液を加えて炭酸カルシウムを生成する。炭酸カルシウムに過塩素酸を加えて発生させた二酸化炭素を450℃の反応管内でリチウムに吸収させた後、真空ポンプで引きながら800℃まで過熱して炭化リチウム (カーバイド) を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管 (400cc) を用いて、 β -線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,730年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 δ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。試料の β -線計数率と自然計数率との差が 2δ 以上の時は、 3δ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の β -線計数率と現在の標準炭素 (Modern standard carbon) の β -線計数率との差が 2δ 以下の時は、Modernと表示し、 $^{14}\text{C}(\text{sample}) / ^{14}\text{C}(\text{modern})$ の値を付記し、 $^{14}\text{C}(\text{sample}) / ^{14}\text{C}(\text{modern}) < 1$ であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代値 (yrBP) に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い (^{14}C の半減期5,730年 \pm 30年) を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出に Radiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1 [Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d.Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98: Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40: 1041-1083] を使用した。なお、交点年代値は ^{14}C 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 1δ 年代幅は ^{14}C 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で 1δ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を***またはModernと表示する。また、AD1,950*はModernを意味する。

引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1. Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington. *To be used in conjunction with: Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993). Radiocarbon, 35, P.215-230.

第 6 表 放射性炭素年代測定結果

測定No.	試料	^{14}C 年代値	補正暦年代値
Beta-136089	炭化物	$1,300 \pm 50\text{yrBP}$	交点年代値 AD690年
	梵鐘遺構	(AD650年)	1 σ 年代幅 AD665 to 775
Pld-530	土壤有機物	$1,800 \pm 80\text{yrBP}$	交点年代幅 AD240年
	SK03	(AD150年)	1 σ 年代幅 AD35 AD60 to 415

第5章 まとめ

第1節 田村遺跡と田村廃寺について

・田村遺跡の変遷

古墳時代以前（7世紀以前）

今回の発掘調査で、もっとも古い時期の遺物を出土した遺構は、SH01とSH02の2基の竪穴住居跡である。一部、弥生時代の土器を包含する遺構があるが、溝状遺構や不定形の土坑などで人為的に構築された遺構ではないと考えられる。前述の竪穴住居跡は出土遺物からみて、6世紀末から7世紀にかけて機能し、また廃絶したものと考えられるが、いずれも主軸方向がほぼ真北に沿っている。このことから、古墳時代末期以降、ある程度安定した土地条件であったことを示すとともに、条里地割施工以前に、すでにある程度、土地の利用についての方向性あるいは制限があった可能性を示唆するものと考えられる。

古墳時代以降（7世紀以降）

まず、注目されるのは、掘立柱建物跡の配置状況とその方位であろう。掘立柱建物跡は全部で5棟以上検出しているが、その方位および出土遺物などの観点からみて、以下に示すようにグルーピングができる。

第1グループ	S B04・S B05・S B01	ほぼ真北方向
第2グループ	S B03	やや東へずれる
第3グループ	S B02	ほぼ真北方向

調査においては、そのほかにも多くの柱穴を検出しているが、調査区が南北に長い狭小な調査区であったため、建物跡を復元することが困難であり、これ以上は今後の周辺の調査に期待するしかない。

さらに、これらの掘立柱建物跡から出土する遺物を観察すると、時代の古い順に「第1グループ」→「第2グループ」→「第3グループ」となることがわかる。

これらのことから、S B01とS B05あるいはS B04は同時期に並存していた可能性があり、そのちにS B03が建てられ、かなり時代が下ってからS B02が構築されたものと考えられる。S B04とS B05が並存していた可能性もあるが、距離が近接するため、どちらかが建て替えるものであると考えられる。ただし、先後関係は不明である。

次に、これらの掘立柱建物跡の機能および性格であるが、これは構築時期および周辺の瓦類の散布状況などから類推して、田村廃寺に関連する施設の一部であったことは間違いないものと思われる。特にS B01やS B05は建物の主軸方位がほぼ真北を示し、東側の隣接地での丸亀市教委による発掘調査で検出した大型の掘立柱建物跡とほぼ一致することから、主要な伽藍ではないにせよ、何らかの形で田村廃寺を構成していたものであろう。

また、付近で表探されている瓦類の散布状況や出土した瓦類をみると、白鳳時代から平安時代末期までのある程度連続した変遷がうかがえること、また、後述するようにS K03という梵鐘鋳造遺構が検出

されることなどから、かなり長期間にわたって、積極的に造寺活動が、本遺跡周辺で営まれていたことは想像に難くない。

S K03は梵鐘鑄造遺構であるが、この土坑の埋土の上層から出土した十二葉細弁蓮華文軒丸瓦からみて、平安時代終わりに梵鐘が鑄造されていたと考えられる。S K03は田村廃寺の境内にあったと考えられること、また、付近にこれ以外の鑄造土坑が検出されないこと、などから、恐らく出吹による田村廃寺という特定の寺院のための梵鐘を鑄造していたものと考えられる。また、土坑の観察結果から梵鐘は一回限りの操業であったと考えられる。さらに、この土坑の大きさおよび出土した鑄型（外型）に竜頭や乳が認められないことから鑄造された梵鐘は、高さ60cm程度の小形の鐘であると考えられる。古代末期は鑄物師集団の再編成など、鑄造史における一大空白期にあたとされているが、S K03はこの空白期の終わりごろもしくはそれ以後の時期で比較的新しい時期にあたる。

S D05・06はいわゆる条里地割にほぼ沿った方向で検出しているため、丸亀平野に広く遺存する条里地割の坪界溝であると考えられる。最終的に埋没したのは古代末期から中世の早い段階にかけてであったと考えられるが、開削時期は、出土遺物からみて8世紀代と考えられる。また、多量の瓦類を含むことから、坪界溝として機能すると同時にある時期の田村廃寺の北辺を区画する溝であったとも考えられる。ただし、東側の隣接地での調査で、この溝の延長部分が検出されていないため、今後の調査による検証が必要となろう。

いずれにせよ、この時期の遺構はおおむね、何らかの形で田村廃寺と関係のある遺構であると考えられる。主要な伽藍は東側に位置することは明白であり、寺域の西側の土地利用を考える上で重要な資料になると思われる。今後は周辺での調査結果とあわせながら、田村廃寺の全体像を把握することが必要となろう。

あと1点、注目される点は、今回の調査や周辺での瓦の散布・表採状況などから見ても、軒丸瓦はいくつかの種類と数量が認められるのに対して、軒平瓦は極端に少ない。調査面積が狭小であるため、一概にはいえないが、丸瓦・平瓦ともに多くの数量が認められるため、堂棟などの建物は想像しがたいが、軒先に軒平瓦を使用しない建物、あるいはそのような時期があったのかもしれない。これらのことを解明することも今後の大きな課題となろう。

中世以降

S D05・06はいわゆる条里地割にほぼ合致した溝状遺構であるが、最終的に埋没したのは、出土遺物からみて、古代末から中世の早い段階にかけてであったものと考えられる。

S D05・06は現在の地割に方向がほぼ合致しており、周辺の地割からみて、いわゆる条里地割の坪界溝にあたるものと考えられる。

近年、県内各所で、中世段階（13～14世紀）に埋没した坪界溝を検出する遺跡が調査されているが、歴史地理学的な条里地割の検討とあわせて、この時期に県内各所で活発な土地開発が行われていたと考えられている。S D05・06が埋没したのも同様の状況であったと考えられる。

また、今回の調査に限って言えば、確実に中世段階まで下る瓦類は出土していない。したがって、田村廃寺は採集されたものや出土した軒丸瓦や軒平瓦の型式からみて、白鳳時代終わりに創建され、古代末期ごろに廃絶したのと考えられる。

・田村廃寺との関係 ～丸亀市教委の調査結果を踏まえて～

東側隣接地の調査について

今回の発掘調査終了後、すぐ東側の銀行店舗建設に先立ち、約1,000㎡の発掘調査を丸亀市教育委員会が実施している。

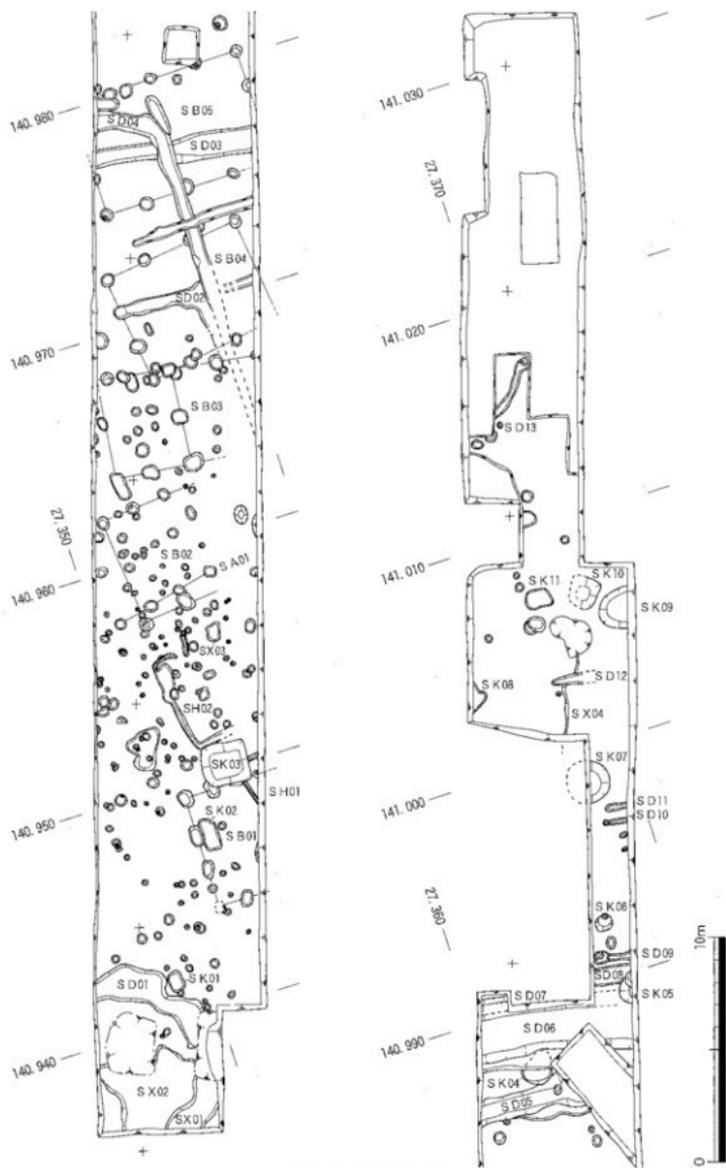
残念ながら、現在も整理作業中であるため、遺構配置図などの凸合はできておらず、若干の認識の差異はあるかもしれないが、概略及び今回の調査との関連について述べる。

主要な遺構

・調査区中央部で主要な伽藍と考えられる大型の掘立柱建物跡が検出されている。六軒二面の規模を持ち、柱間は約2mを測る。庇と考えられる部分は母屋の柱列をひとつおきにしたもので四つの柱穴から構成される。この建物の北側に、建物に沿う方向で幅3mをへだてて2条の溝状遺構が見つかった。さらにこの2つの溝状遺構をつなぐように細い溝状遺構が検出されている。ここには丸瓦が重なって伏せてあり、暗渠状を呈していることが確認されている。つまり、この2条の溝状遺構はある時期の田村廃寺の北側を画する、築地塀の両側の側溝である可能性が高いと考えられる。この築地塀と考えられる2条の溝状遺構を西側に延長するとSD02およびSD03がこれにあたり、幅もおおむね一致する。これらのことから、ある時期の寺域の北限はこのSD02とSD03によって区画されていたと考えられる。

ひとつ、注意すべきはすぐ北側のSD05やSD06である。これらの溝からは埋没したと考えられる中世段階の遺物と、溝として機能していた時期の遺物が出土している。この中には複弁八葉軒丸瓦が含まれており、少なくとも奈良時代には機能していたことが確認できる。ということは、当時の田村廃寺の北限がSD02・03であったとすると、そのすぐ北側に糸里の坪界溝が平行して流れていたこととなり、位置的に近すぎないかという疑問が生じてくる。となると、SD02・03は創建時の北限を示すものであり、創建からさほど時間をおかず、寺域を北側へ延長したのではないだろうか。そう考えるのがもっとも整合性のとれた解釈であると考えられる。

田村廃寺は今回の調査および丸亀市教委の調査により、白鳳期に創建され、平安時代末期ごろまで存続した寺院であることがほぼ明らかとなった。今後は、時期ごとの寺域の確定と周辺の地割との関連、主要伽藍の配置状況の復元、他の古代寺院との関係などの解明が課題として残っている。周辺の調査結果などの検討材料が増えれば、おのずと明らかになってくると考えられる。



第91図 遺構配置図

第2節 梵鐘鑄造遺構および鑄型について

1. 田村遺跡梵鐘鑄造遺構（SK03）について（P32 第41図）

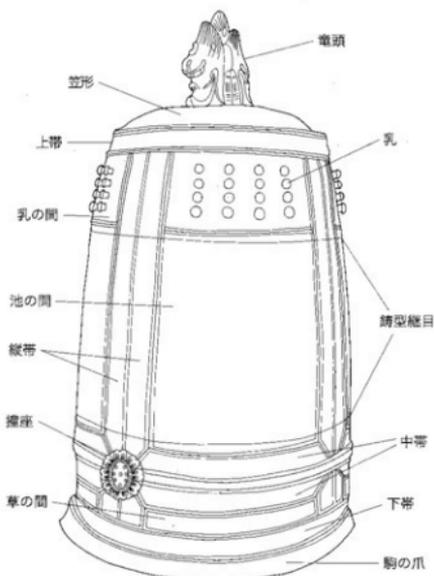
田村遺跡で検出した梵鐘鑄造遺構は一辺約2mの方形を呈し、深さ約70cmを測る土坑である。埋土は数層に分けられるが、基本的にはほぼ一括して埋まったものであると考えられる。これは鑄造の終わった直後に意図的に埋められたことを示すものと思われる。埋土中には平安時代後期ごろの所産と考えられる十二葉細弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、この時期に梵鐘の鑄造が行われ、かつ土坑が廃棄されたものと思われる。

埋土中からは多くの瓦類とともに梵鐘の鑄型が出土している。ほとんどが外型の破片であり、詳細に観察すると、上部の笠形や六道と呼ばれる縦方向の区画線などが認められる。土坑の深さ、鑄型の破片の分析からすると、この土坑で鑄造された梵鐘は小型のもので高さ約60cm程度のものであると考えられる。

土坑の内部には、鑄型を設置するための定盤と呼ばれる円形の粘土の台が良好に残っていた。高温の青銅に触れているため、黒色に変色している。定盤の中央には直径5cmの穴が穿たれており、これは鳥目と呼ばれる鑄型を固定するためのものであり、同時に鑄造の際に湯回りをよくするためのガス抜き穴の役割もしていたものと考えられる。一般に梵鐘の鑄造遺構の多くには、掛木と呼ばれる鑄型を固定する木材をまず敷いてその上に定盤を設け、鑄型を設置する場合が多い。そして鑄型の上部に渡した掛木と底部の掛木を紐で縛り、固定するのである。しかし、田村遺跡の梵鐘鑄造遺構には定盤の下部に掛木のあった痕跡が認められない。このことは鑄造される梵鐘が小型のものであるために鑄型そのものを土中に埋め、その重みで鑄型を固定していたことがうかがわれる。このような例は兵庫県多可寺や長野県寺平遺跡1号土坑・3号土坑などに見られる。

また、定盤の東側の部分が一部崩壊していること、また西側の定盤の内側に生粘土が盛り上がった状態で検出されたことからみてできあがった梵鐘を、鑄型を壊したあとに、一旦東側に傾け、そこから引っ張り上げたことが推定できる。そのために東側の定盤の一部が崩壊したものと考えられる。

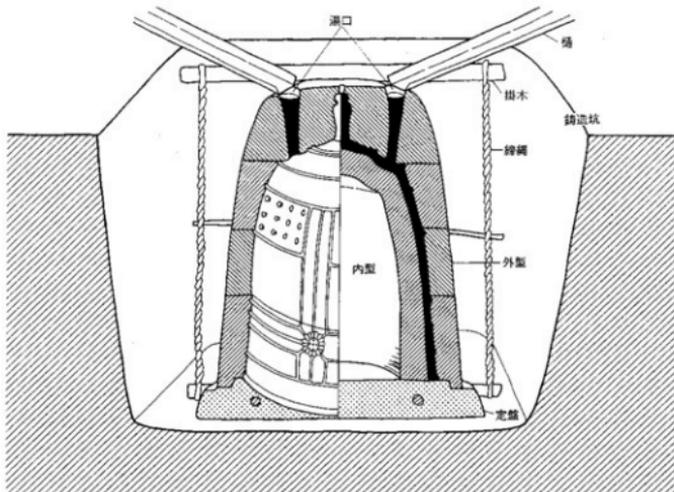
次に鑄型を見てみると、六道と呼ばれる縦方向の区画線および横方向の区画線



第92図 和鐘各部分の名称

が認められる破片があるが、一部の破片にこの縦方向と横方向の区画線が交差する部分が認められる。詳細に観察してみると、縦方向の区画線の両側にわずかに真土（まね）を塗った痕跡が認められる破片がある。これはもともと鑄型に横方向の区画線を施した後に縦方向の区画線を描く際に交差した部分を埋めたものと考えられる。つまり、外型はまず横方向の区画線を鑄型の調整に合わせて回転運動によって描き、そのあとから縦方向の区画線を描いたものと推定される。

以上は、挽型法挽中子式とよばれる鑄型の作り方であり、現在でも踏襲されている梵鐘の製作技法のひとつである。



第93図 梵鐘の鑄造模式図

〔古代・中世の鑄鉄鑄物〕五十川伸矢1992より作成

2. 各地の梵鐘鑄造遺構について（第7表参照）

・研究史と遺跡の分布

梵鐘鑄造遺構の最初の発見は、神戸市須磨区明神町において工事中に、梵鐘の撞座とみられる鑄型が赤松俊英氏によって採集された1963年であるとされている。（遺跡の詳細は未調査のため不明である）また1971年に福井県福井市の篠尾廃寺跡で竜頭の鑄型が出土したが、これについては1977年に坪井良平氏がこれを梵鐘の鑄型と認識するまでは仏像の鑄型と考えられていた。

その後、1973年に紀伊国分寺跡で、また1974年に岐阜県恵那郡坂下町の金屋遺跡で梵鐘鑄造遺構が調査されてから以後、つぎつぎに発掘されるようになった。

1980年代後半になると、福島県の相馬地方をはじめ富山県の射水丘陵や滋賀県の瀬田丘陵などの各地で、広域にわたる古代生産遺跡の調査が行われ、梵鐘鑄造遺跡についての研究も多角的に行われるよう

になってきた。

梵鐘鑄造遺構を伴う遺跡は、近江・播磨など旧国名でいえば約20ヶ国において検出されている。ただし、古代においては畿内を中心とする地域に集中するのに対し、中世以降になると全国的に分布していく傾向がみとれる。また、古代から中世にかけての約2世紀の間は、鑄造された梵鐘が極端に少なく、鑄造史における空白期間であるとされている。これは、河内鑄物師を代表とする鑄物師集団の編成および地方における職能民の活動によるものであるとされている。

・梵鐘鑄造遺構の構造

梵鐘の鑄造に必要な施設は、鑄型を設置する土坑と、材料である銅を溶かす溶解炉である。田村遺跡では鑄型を設置するいわゆる鑄造土坑は検出しているが、溶解炉は検出していない。しかしながら、この土坑の南側の不整形の浅い落ち込み（SX01・02）から大量の被熱した粘土塊および瓦類が出土しており、これらが溶解炉を構成していたものであると考えられる。

鑄造土坑の平面プランについては、従来より、古代においては一辺が2～2.5mの方形もしくは隅丸方形を呈し、中世以降になると不整形なものに変化していくとされており、その点からいえば、田村遺跡の鑄造土坑は古代の範疇に属するものと考えられる。

鑄造土坑の大きさや深さは、梵鐘の大きさに比例するため、いろいろであるが、奈良県奈良市の東大寺境内で検出された梵鐘鑄造土坑は一辺が7m、深さ4m以上という巨大なもので、全国でも最大級である。また、底部には理論上、掛木の痕跡やピット、その上部に定盤などがあり、その周囲には鑄型の焼成による炭化層が堆積している。実際には、これらすべてを満たす鑄造土坑は非常に稀有であり、唯一京大教養部構内遺跡SK257の場合のみである。

最大級の東大寺境内遺跡では掛木と定盤はあるがピットがない。京大医学部構内遺跡や福高県相馬郡新地町向田A遺跡および同県伊達郡川俣町河股城跡などは地上に直接に鑄型を据えるタイプのものと考えられるため構架材の必要がなかったのであろう。なお多可寺では、鑄造土坑内の西側に段を持ち、製品を引き上げるためのものと考えられる。

掛木は前述のとおり、鑄型を固定する装置であるが、掛木自体が遺存する東大寺境内遺跡や巨勢寺、空洞になっている京大教養部構内遺跡や清水A遺跡、長尾遺跡などがある。また京大教養部構内遺跡のように釘が出土した例もある。一方、掛木を使わず鑄造土坑を土中に埋め、その土圧によって鑄型を固定したとみられるものがある（多可寺、木瓜原遺跡）。田村遺跡のSK03もまさにこれに相当する。

さらに鑄造土坑の底面に粘土を貼ったり、その下に礫や瓦片、土器片などを敷いたもの、周囲に溝を巡らせたり、排水路を設けたものもある。これらは、防湿のための装置であると考えられる。

・まとめ

坪井良平氏によると、梵鐘の鑄造には、10世紀後葉（977年鑄造の井上恒一氏藏鐘）から12世紀中葉（1160年鑄造の世尊庵寺鐘）の約180年間にわたり、空白の期間があったとされている。実際、調査例をみても10世紀初頭から12世紀にかけての遺跡は極端に少ない。このことは、12世紀後半以降に展開する河内鑄物師を中核とした中世鑄物師組織の編成や、現存する平安時代末～鎌倉時代にかけての梵鐘の大部分が河内系鑄物師の作品であること、またこのころから畿内および地方において、独自の鑄物師集団が成立することなどの歴史的事象と関係が深いものと思われる。これに対して消費する側の側面には、

念仏や写経、経塚造営などに始まる勳進上人（いわゆる聖）の活躍が、末法思想の普及とあいまって多くの階層の人々の支持を得ながら、寺院や仏像の修造さらに橋梁・道路・港湾の改修や土地の開発などを行うようになるが、梵鐘の鑄造もこのような事業の一つとして組み込まれていたと思われる。その時期が11世紀後半から12世紀ごろであると考えられる。その後の梵鐘鑄造は勳進上人の関与する事例が顕著となる。

ここで、田村遺跡の梵鐘鑄造遺構を振り返ってみると、出土遺物から、埋没年代が平安時代後期と考えられることから、まさにこの空白期間の終焉に近い時期にあたる。この時期にはいまだ地方で独自に梵鐘を鑄造できるだけの技術・設備は整っていなかったと考えられるため、出吹が行われていたと考えられ、時期的にみて河内系鑄物師が全国へ展開していった時期にあたるため、田村遺跡においても河内系鑄物師が出吹にやってきたとは考えられないだろうか。一つの可能性として提示しておく。

同時に、古代末期から中世初頭という時期はわが国の鑄造産業史に照らし合わせてみた場合、重要な画期にあたるものと考えられる。

第7表 梵鐘鑄造遺構出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	出土遺構	出土遺物
1	田村遺跡	香川県丸亀市田村町	平安時代後期	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
2	宝鐘寺迹	香川県丸亀市郡家町宝鐘寺迹	室町時代前期		梵鐘跡型(遺鐘)
3	羽間池	香川県仲多度郡讃岐町	江戸時代		梵鐘跡型
4	白山柱遺跡	岩手県平泉町	12C	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
5	山田A遺跡	福島県相馬市大坪	8C末~9C	溶解印	梵鐘跡型(遺鐘)、銅ほか
6	内田A遺跡	福島県相馬市新地町	8C後半~9C中葉	溶解印、鹿土坑	梵鐘跡型(遺鐘)、銅ほか
7	川俣城跡	福島県伊達郡川俣町	19C	溶解印	梵鐘跡型、鐘跡型
8	金井遺跡B区	埼玉県川口市大字新観字金井	13C	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型、鐘跡型
9	金平遺跡	埼玉県比企郡嵐山町金平	13C	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
10	関鐘物跡遺跡	東京都国分寺	江戸時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
11	宮ヶ瀬遺跡群北原(No.9)遺跡	神奈川県愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬	18C前半	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
12	寺前遺跡	新潟県三島郡出雲崎町	12C末~13C	溶解印	梵鐘跡型、鉄錘跡型
13	原山遺跡	新潟県糸魚川市池地大野	江戸時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
14	飯田城跡	長野県飯田市大手町	18C後半~17C	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型?
15	寺平遺跡	長野県上伊那郡飯島町本郷	南北朝~室町時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
16	野口史古跡	岐阜県各務原市藤原町栄町	8C	溶解印	梵鐘跡型?
17	金岡遺跡	岐阜県恵那郡那岐下町本郷	室町時代末	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
18	大山崎寺跡	愛知県小牧市大山	11C末	梵鐘跡遺構	
19	上野南1遺跡	富山県射水郡小杉町	9C中葉~後葉	溶解印	梵鐘跡型(遺鐘)、銅ほか
20	金屋の尻・鐘物跡	石川県鳳鳴郡六木町字中屋	江戸時代~明治時代		鐘型、相槌
21	尊原寺跡	福井県坂井郡丸岡町尊原	14C後半~15C前半	鐘造遺構	
22	一栗谷朝倉氏遺跡第64・65次調査	福井県福井市城戸/内町	16C		梵鐘跡型
23	鐘尾岡寺跡	福井県福井市鐘尾町	平安時代初期		梵鐘跡型(遺鐘)
24	軽野正境遺跡	滋賀県愛知郡楽荘町	室町時代末期	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型、銅、釜
25	上遺跡	滋賀県大津郡栗東町	18~19C	溶解印	梵鐘跡型
26	長尾遺跡	滋賀県大津市滋賀町長尾	9C	梵鐘跡土坑、溶解印	梵鐘跡型
27	坂本八束遺跡	滋賀県大津市坂本町	平安後期	梵鐘跡遺構	
28	木久郎遺跡	滋賀県栗原市野路町	7C末~8C	梵鐘跡土坑	
29	京大教養部境内AF22区	京都府京都市左京区吉田二木松町	9~10C	梵鐘跡土坑、溶解印	梵鐘跡型、鐘跡型
30	京大医学部境内AN18区	京都府京都市左京区吉田近衛町	13C前半	溶解印	梵鐘跡型
31	仏眼寺跡	京都府京都市右京区太秦御園町	9C後半~10C初頭	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
32	丹波国分寺跡	京都府亀岡市国分	9C	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
33	東大寺戒壇院東地区	奈良県奈良市雑司町	8C中葉	大型鐘土坑	
34	山田寺跡	奈良県桜井市山田	鎌倉時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
35	田中庵寺跡	奈良県橿原市田中	7C後半		梵鐘跡型(遺鐘)
36	巨勢寺跡地内池	奈良県所市大字吉瀬	9~10C	鐘造土坑	
37	飛鳥池遺跡	奈良県高市郡明日香村大字飛鳥池	江戸時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
38	天満号成遺跡	和歌山県有田郡吉田町藤差	中世?	梵鐘跡遺構	
39	紀伊国分寺跡	和歌山県那賀郡打田町	室町~安土桃山時代	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
40	真福寺遺跡	大阪府南河内郡美原町黒山	13C後半	鐘造土坑、溶解印	鐘跡型、梵鐘跡型
41	長谷遺跡	兵庫県神戸市西区種谷町長谷	13~14C		鐘型
42	鳥ヶ谷院寺	兵庫県明石市大久保町	14C末	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型(乳、擦痕)
43	明神町仏具鐘造址	兵庫県神戸市明神町	12C	溶解印?	梵鐘跡型(鐘座)
44	多可寺跡	兵庫県多可郡多可町前泊屋	8C末	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
45	西安田・長野遺跡A地点	兵庫県多可郡中町西安田・長野	中世後期	梵鐘跡遺構	
46	清水・タカアヰ遺跡	兵庫県多可郡加美町清水	13~14C	梵鐘跡遺構	
47	牧所遺跡	岡山県岡山市南瓦	平安後期	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型
48	大塚遺跡	徳島県徳島市名家町	平安時代		梵鐘跡型、密教用具跡型
49	上京木地子~中代古遺跡	徳島県阿波郡市場町上喜来	16C前半		銅1輪型
50	前田遺跡	徳島県板野郡土成町字前田	江戸時代		梵鐘跡型
51	鈴ノ瀬遺跡	福岡県大宰府市鈴ノ瀬	13C後半~14C前半	鐘造坑	各種鐘型
52	西濱稲跡	福岡県福岡市中央区城内	室町時代	梵鐘跡土坑	
53	智恵寺跡	大分県豊後高田市大字蒸	鎌倉時代	梵鐘跡遺構	
54	豊後国分寺跡	大分県大分市国分	8C末~9C初頭	梵鐘跡土坑	梵鐘跡型

参考文献

- 若狭太良荘における鑄鐘について 史林 第23巻4号 赤松俊秀 京都大学 1940
- 鴨東白川の鑄物工房 京都大学構内遺跡調査年報 昭和60年度 五十川伸矢 京都大学 1988
- 古代・中世の鑄鉄鑄物 国立歴史民俗博物館研究報告 第46集 五十川伸矢 歴博 1993
- 梵鐘の鑄造遺跡 考古学ジャーナル 372 五十川伸矢 ニューサイエンス社 1994
- 中世の鑄物生産と鑄造工人 職人と芸能 五十川伸矢 吉川弘文館 1994
- 京都大学構内の梵鐘鑄造遺構 月刊文化財 350 五十川伸矢 1994
- 月海の鑄物師 中世の風景を読む 5 五十川伸矢 新人物往來社 1995
- 太井遺跡(その2) 大阪文化財センター 大阪文化財センター 1987
- 真福寺遺跡 大阪文化財センター 大阪文化財センター 1986
- 願行上人とそれを取りまく鑄師たち 日本の美術 252 鉄仏 大森順雄 至文堂 1987
- 梵鐘の鑄造遺跡とその変遷 考古学研究 第40巻1号 神崎勝 考古学研究会 1993
- 国宝観世音寺鐘・妙心寺鐘とその時代 九州歴史資料館 1984
- 倉古の鑄物師 石野孝子ほか 倉吉市教育委員会 1986
- 鉄仏 日本の美術 252 佐藤昭夫 至文堂 1987
- 近江の鑄物師1 滋賀県教委 1987
- 近江の鑄物師2 滋賀県教委 1987
- 平等院鐘の製作年代と「空白の二世紀」 仏教芸術 215号 杉山洋 1994
- 梵鐘 日本の美術 355 杉山洋 至文堂 1995
- 慶長末年以前の梵鐘 坪井良平 東京考古学会 1939
- 日本の梵鐘 坪井良平 角川書店 1970
- 日本古鐘銘集成 坪井良平 角川書店 1972
- 朝鮮鐘 坪井良平 角川書店 1974
- 梵鐘 坪井良平 学生社 1976
- 伏亡鐘銘図鑑 坪井良平 1977
- 梵鐘鑄型の出土例 史迹と美術 477 坪井良平 1977
- 梵鐘の鑄造址 仏教芸術 148号 坪井良平 1983
- 歴史考古学の研究 坪井良平 ビジネス教育出版社 1984
- 梵鐘と考古学 坪井良平 ビジネス教育出版社 1989
- 梵鐘の研究 坪井良平 ビジネス教育出版社 1991
- 新訂梵鐘と古文化 坪井良平 ビジネス教育出版社 1993
- 史跡東大寺(地)発掘調査の概要 南都仏教 第69号 1994
- 梵鐘実図集成 奈文研史料 第37・38冊 坪井良平 奈文研 1994
- 平城京右京八条一坊十三・十四坪 奈文研学報 第46冊 奈文研 1989
- 西院創建軒瓦と西院梵鐘遺址 伊河留史 法隆寺昭和資料調査概報14 毛利光俊彦 法隆寺 1992
- 延徳三年銘鐘見沙門天像について 九州歴史資料館研究論集 4 八尋和泉 九州歴史資料館 1978
- 大宰府における鑄物生産遺跡 梵鐘の音は時を超えて 山本信夫 1990
- 鑄造 技術の源流と歴史 石野亨 産業技術センター 1977
- 鑄物五千年の足跡 石野亨 日本鑄物工業新聞社 1994
- 鐘をつくる 図説日本の文化をさぐる 4 石野孝子ほか 小峰書店 1984
- 東大寺戒壇院東地区の鑄造遺構 考古学ジャーナル 372 中井一夫 ニューサイエンス社 1994
- 枚方田中家と鑄物の歴史 枚方市教育委員会 1984
- 枚方の鑄物師(一) 枚方市教育委員会 1990
- 近代産業以前の梵鐘鑄造技術について 関大考古学研究会開設40周年論集 吉田益子 関西大学 1993

銅物堂に使用された輪の構造について	枚方市文化財研究調査会研究紀要 2	吉田品子	枚方市教育委員会	1982
真土型造型における銅物土の再製造システム	榎干善哉先生古希記念考古学論集	吉田品子		1998
広隆寺跡	京都府遺跡調査概報 第5冊2	石尾政信	京都府教委	1972
大和を撮る	樞考研達報展11図録		樞考研	1991
大和を撮る	樞考研達報展図録		樞考研	1989
山田寺第3次(講堂・北面回廊)の調査	飛鳥藤原宮発掘調査概報10		奈良研	1980
梵鐘を鋳造した遺跡の調査	月刊文化財 176	林博道		1978
長尾遺跡の梵鐘鋳造遺跡	古代研究 27	林博道		1982
汲貫黒穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅲ			大津市教委	1983
古代の製鉄コンビナート 木瓜原遺跡の発掘			立命館大学	1994
多可寺跡出土の梵鐘鋳造遺構	古代研究 27	神崎勝		1982
播磨堂岡史の研究			妙見山麓遺跡調査会	1986
清水・タカアヅ遺跡 実報報告書			加美町教委	1987
大浦遺跡	仏教芸術 174	一山典ほか		1987
上喜永館子〜中佐古遺跡	徳島県史センター年報 2	藤川智之	徳島県史センター	1991
前田遺跡	徳島県史センター年報 4		徳島県史センター	1993
鈴ノ湯遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査概報	古代研究 27	山本信夫		1984
鈴ノ湯遺跡一筑前大宰府跡物師の解明一	仏教芸術 174	山本信夫		1987
鴻巣給跡Ⅰ			福岡市教委	1992
大山院寺発掘調査概報			小牧市教委	1979
金屋・星の宮遺跡			板下町教委	1975
寺平遺跡の梵鐘鋳造跡	月刊文化財 194	友野良一		1979
寺平遺跡			飯島町教委	1980
篠尾庵寺調査概要			福井県教委	1972
豊原寺跡Ⅱ	華嚴院跡第2次発掘調査概報		丸岡町教委	1981
特別史跡 一栗谷朝倉氏遺跡	第64・65次調査		朝倉資料館	1989
中唐金屋の浜崎物跡調査			穴水町教委	1981
新潟県権蔵文化財調査だより			新潟県教委	1990
新潟県権蔵文化財調査報告書 50	原山遺跡		新潟県教委	1988
愛甲郡清川村宮ノ瀬遺跡群北原(No.9)遺跡 長福寺址	第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会	市川正史	神奈川県教委	1991
国立市関跡物跡遺跡 一江戸近郊跡物師の工房跡一	鋳造遺跡研究会資料 5	馬場利行		1995
金井遺跡B区			埼玉県事業団	1994
嵐山町金平遺跡における鎌倉時代鋳造遺跡の調査について	比企丘陵 2	村上伸二		1996
川俣城跡の概要			川俣町教委	1985
岩手県平泉町白山社遺跡検出梵鐘鋳造遺構について	鋳造遺跡研究会資料 6	八重樫忠郎		1996

觀 察 表

1. 土器類觀察表
2. 瓦類觀察表
3. 鑄型類觀察表
4. 石器・鉄製品觀察表

1. 土器類調査表 (1)

集丸 番号	調査 番号	調査 時期	調査 場所	器名	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	土質	他式	色調			備考
											外壁	内面	外面	
1	13			外生土器	酒杯	0.1			2cm以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	内面 黒灰ナリ
2	13			外生土器	葉(灰部)	0.3			2cm以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	黒灰ナリ
3	14			外生土器	蓋	0.2			1cm以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	ナツ目・黒灰ナリ、ナ ツ目・黒灰ナリ、ナ
4	15			外生土器	蓋	0.1			1cm以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	黒灰ナリ
5	16			外生土器	壺	0.5			5cm以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ナツ目、ナツ
6	18			須恵器	葉	8.9			2cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
7	19			須恵器	葉	0.9			1cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
8	19			須恵器	凸杯	0.5			2cm以下の白色砂状を含む	普通	2.5YR/4 黄灰	2.5YR/4 黄灰	2.5YR/4 黄灰	ナリ
9	19			土器	杯	12.0			1cm以下の白色砂状を含む	良好	10YR8/3 黄緑	10YR8/3 黄緑	10YR8/3 黄緑	黒灰ナリ
10	19			土器	杯身	12.6			1cm以下の白色砂状を含む	普通	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
11	19			土器	筒状器		0.1		1cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ、へり印
12	19			土器	杯		0.2		4cm以下の白色砂状を含む	普通	2.5YR/2 灰白	2.5YR/2 灰白	2.5YR/2 灰白	黒灰ナリ
13	19			須恵器	葉	0.6			3cm以下の白色砂状を含む	普通	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ、社籠二条
14	19			須恵器	壺	16.6			2cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ、黒漆
15	21			外生土器	葉	0.7			1cm以下の白色砂状を含む	普通	7.5YR/3 褐	7.5YR/3 褐	7.5YR/3 褐	ナリ
16	21			外生土器	葉	0.6			2cm以下の白色砂状を含む	普通	7.5YR/3 褐	7.5YR/3 褐	7.5YR/3 褐	黒ナリ、ナツ
17	21			外生土器	葉	0.6			1cm以下の白色砂状を含む	良好	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	5YR6/4 にごり橙	黒ナリ
18	23			須恵器	杯蓋	0.0			2cm以下の白色砂状を含む	普通	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
19	23			須恵器	杯蓋	0.6			1cm以下の白色砂状を含む	普通	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	黒灰ナリ
20	23			須恵器	杯蓋	1.6			1cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
21	23			須恵器	杯身	12.6			3cm以下の白色砂状を含む	普通	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
22	23			須恵器	酒杯(灰部)	0.6			1cm以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	黒灰ナリ
23	25			外生土器	葉	15.0			2cm以下の白色砂状を含む	良好	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナリ
24	25			須恵器	葉(灰)	0.3			2cm以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	ナリ
25	25			須恵器	葉	0.3			1cm以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	ナリ
26	25			須恵器	杯身	8.0			2cm以下の白色砂状を含む	普通	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
27	25			須恵器	杯身	0.4			1cm以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	黒灰ナリ
28	25			須恵器	酒杯	0.8			2cm以下の白色砂状を含む	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	ナリ
29	25			須恵器	酒杯(杯)	11.8			1cm以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	ナリ

1. 土器観察表 (2)

器番号	器名	器台番号	器台背番号	器台背番号	器種	口径 (cm)	器底 (cm)	器高 (cm)	胎土	胎色	色調		彫刻・文様		備考
											外周	内面	外面	内面	
65	32	SP07			碗		1.85	5.9	5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白				同胎ナリ、彫刻	
69	34	SP08			胴部				10Y86/3 土山肌	10Y86/3 土山肌				同胎ナリ、彫刻	
70	34	SP03			外生土器		2.4	2.2	10Y86/2 灰白	10Y86/2 灰白				同胎ナリ	
71	34	SP03			胴部		0.8	0.2	5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白				同胎ナリ	
72	34	SP03			胴部		0.8	0.2	5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白				同胎ナリ	
74	36	SP02			杯蓋	5.2	0.45		2.5Y4/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白				同胎ナリ	
75	36	SP02			杯蓋	3.2	0.7		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
76	36	SP02			杯蓋	3.2	0.7		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
78	38	SP03			胴部	(14.7)	1.8	14.8	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰				同胎ナリ	
79	38	SP03			杯身		4.6		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
80	38	SP03			蓋		2.55		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
84	41	SP01			杯		0.1	10.0	NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
85	43	SP01			十割器		0.1	5.5	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白				同胎ナリ	
86	43	SP03			土割器		2.1		2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白				同胎ナリ	
87	43	SP03			土割器		27.6		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
88	43	SP03			杯身	12.0	1.85		2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白				同胎ナリ	
89	43	SP03			杯蓋	10.0	1.45		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
90	43	SP03			杯蓋		2.4		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
91	43	SP03			杯蓋		1.1		2.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰				同胎ナリ、彫刻	
92	43	SP03			杯蓋		0.4		NS/ 灰	NS/ 灰				同胎ナリ	
102	56	SP04			土割器		0.45		7.5Y8/6 黄	7.5Y8/6 黄				同胎ナリ	
103	56	SP04			外生土器		0.3		2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄				ナリ	
104	59	SP003			杯蓋		0.25		NS/ 灰	NS/ 灰				ナリ	
105	60	SP011			十割器	11.4	2.0	7.6	5Y8/2/6 黄	10Y86/2 灰白				同胎ナリ	
107	62	SP078			外生土器		2.4		2.5Y4/2 黄灰	2.5Y4/2 黄灰				ナリ	
108	63	SP085			外生土器		1.6		5Y8/2/6 黄	5Y8/2/6 黄				ナリ	
109	64	SP140			外生土器		0.5		10Y84/1 黄灰	10Y84/1 黄灰				ナリ	
200	65	42	SP772		須臾器	(22.8)	4.45	22.6	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰				同胎ナリ	

1. 土器類観察表 (3)

観文番号	相対番号	図版番号	柄内番号	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調		整形・装飾		備考
											外装	内装	外面	内面	
201	67	SI200	外土器	盃		2.7			1m 以下の白色砂状を含む	普通	N7/ 灰白	胎土	胎土		
202	69	SI201	外土器	小皿		0.95			2m 以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/6 靑	胎土	胎土		
204	70	SI202	外土器	杯		12.6			1m 以下の赤色砂状を含む	普通	5YR6/1 灰	胎土	胎土		
205	70	SI203	外土器	杯		14.0			ほとんど砂状です	良好	5YR6/1 灰	胎土	胎土		
206	70	SI202	外土器	杯		2.0			1m 以下の白色砂状を含む	普通	7.5YR6/6 靑	胎土	胎土		
207	70	SI202	外土器	支脚					2m 以下の白色砂状を含む	普通	7.5YR5/3 に赤い調	胎土	胎土		
208	70	SI202	外土器	蓋					1m 以下の赤色砂状を含む	良好	N6/ 灰	胎土	胎土		
209	70	SI202	外土器	小鉢					5m 以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/6 靑	胎土	胎土		
237	74	SI202	土器	土釜					4m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y2 灰白	胎土	胎土		
238	74	SI202	土器	土釜		22.0			5m 以下の白色砂状を含む	普通	10YR7/3 に赤い調	胎土	胎土		
240	76	SI204	土器	杯身					1m 以下の白色砂状を含む	良好	N4/ 灰	胎土	胎土		
241	76	SI204	土器	小皿					1m 以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/4 に赤い調	胎土	胎土		
242	76	SI204	土器	土釜		10.8			0.5m 以下の白色砂状を含む	良好	5YR6/1 灰	胎土	胎土		
243	76	SI204	土器	土釜					1m 以下の赤色砂状を含む	普通	10YR4/1 赤灰	胎土	胎土		
244	76	SI204	土器	土釜					ほとんど砂状です	良好	10YR7/3 に赤い調	胎土	胎土		
245	76	SI204	土器	土釜					1m 以下の赤色砂状を含む	普通	10YR7/3 に赤い調	胎土	胎土		
246	76	SI204	土器	土釜					1m 以下の赤色砂状を含む	普通	10YR7/3 に赤い調	胎土	胎土		
247	76	SI204	土器	土釜		46.0			1m 以下の白色砂状を含む	良好	N2/ 赤灰	胎土	胎土		
248	76	SI205	土器	土釜					2m 以下の白色砂状を含む	普通	5YR5/4 に赤い調	胎土	胎土		
251	78	SI206	外土器	盃					2m 以下の白色砂状を含む	良好	7.5YR7/4 に赤い調	胎土	胎土		
252	78	SI206	外土器	盃					1m 以下の赤色砂状を含む	普通	10YR7/3 に赤い調	胎土	胎土		
253	78	SI206	外土器	盃					2m 以下の白色砂状を含む	普通	7.5R5/3 浅黄靑	胎土	胎土		
254	78	SI205	外土器	杯					ほとんど砂状です	普通	N4/ 灰	胎土	胎土		
255	78	SI206	外土器	盃		20.3			1m 以下の白色砂状を含む	良好	5YR6/1 灰	胎土	胎土		
256	78	SI206	外土器	盃		11.7			ほとんど砂状です	良好	N7/ 灰白	胎土	胎土		
257	78	SI206	外土器	盃					1m 以下の白色砂状を含む	普通	5YR6/1 灰白	胎土	胎土		
258	78	SI206	外土器	盃					1.5m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	胎土	胎土		
259	78	SI205	外土器	盃					1m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	胎土	胎土		
260	78	SI206	外土器	盃					1.5m 以下の白色砂状を含む	普通	N6/ 灰	胎土	胎土		

1. 土器類觀察表 (4)

書目 番号	透視 番号	民器 番号	管内器部番号	種類	用途	口径 (cm)	器高 (cm)	残存 状況	土質	焼成	色調			形状・特徴		備考
											外玉	内面	外面	内底	外面	
284	78		SD06	須恵器	不明	0.65		1m 以下の白色砂状を含む	良好	7.5/8/1 灰	N7/ 灰白	7.5/8/1 灰	同様ナリ	同様ナリ	同様ナリ	
282	78		SD06	須恵器	不明	0.7		1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5/9/1 黄灰	2.5/9/1 黄灰	ナリ、へタ板	同様ナリ	同様ナリ		
283	78		SD06	土師器	土師			1m 以下の白色砂状を含む	良好	7.5/8/2/4 浅黄緑	7.5/8/2/4 浅黄緑	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
254	78		SD06	管状土師	管状土師	4.3	2.4	1m 以下の白色砂状を含む	普通	10/8/2/1 灰白	10/8/2/1 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
285	78		SD06	七輪式土師	土師(溝底)			1m 以下の白色砂状を含む	普通	10/8/2/1 灰白	10/8/2/1 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
286	78		SD06	土師式土師	土師	0.53	14.1	3m 以下の白色砂状を含む	普通	10/8/2/1 灰白	10/8/2/1 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
289	83		SD12	須恵器	高杯	0.65		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
290	83		SD12	須恵器	高杯(細頸)	(1.4)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5/9/1 黄灰	2.5/9/1 黄灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
291	83		SD12	土師器	土師			1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5/8/2 灰白	2.5/8/2 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
282	85		SD09	須恵器	器体	(8.1)		4m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5/5/6 黄赤黄	2.5/5/6 黄赤黄	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
293	85		SD09	須恵器	杯蓋	(2.5)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
295	86		SD09	土師式土師	杯	(2.25)		1m 以下の白色砂状を含む	普通	7.5/8/2/3 浅黄緑	7.5/8/2/3 浅黄緑	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
296	88		古代以降包合層	須恵器	蓋(口縁)	(1.4)		1m 以下の白色砂状を含む	普通	N4/ 灰	N4/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
297	88		古代以降包合層	須恵器	杯蓋	(1.7)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N4/ 灰	N4/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
298	88		古代以降包合層	須恵器	蓋	(1.65)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N7/ 灰白	N7/ 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
299	88		古代以降包合層	須恵器	杯	(1.1)	8.4	1m 以下の白色砂状を含む	普通	N6/ 灰	N6/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
300	88		古代以降包合層	須恵器	杯	(3.35)	9.0	1m 以下の白色砂状を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
301	88		古代以降包合層	須恵器	器体付杯	(1.55)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
302	88		古代以降包合層	須恵器	杯	(1.6)	8.6	2m 以下の白色砂状を含む	普通	N6/ 灰	N6/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
303	88		古代以降包合層	須恵器	杯	8.6		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
304	88		古代以降包合層	須恵器	杯	26.2	(3.65)	3m 以下の白色砂状を含む	普通	N6/ 灰	N6/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
305	88		古代以降包合層	須恵器	杯	(3.1)		2m 以下の白色砂状を含む	普通	N5/ 灰	N5/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
306	88		古代以降包合層	須恵器	器体	(2.7)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N2/ 黒	N7/ 灰白	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
307	88		古代以降包合層	須恵器	器	(5.5)	10.6	2m 以下の白色砂状を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
308	88		古代以降包合層	須恵器	土師式			1m 以下の白色砂状を含む	良好	7.5/8/1 灰	10/8/2/1 灰黄緑	同ナリ	同ナリ	同ナリ		
309	88		古代以降包合層	土師式	土師式			3m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5/8/6/6 黄	2.5/8/6/6 黄	同ナリ	同ナリ	同ナリ		

2. 瓦類観察表 (1)

瓦名 番号	図号 番号	製瓦 番号	製瓦 番号	製瓦 番号	全長 (mm)	全幅 (mm)	重量 (g)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	吸水率 (%)	色調		地成	整形・調整		備考
															凸面	凹面		凸面	凹面	
31	25	SD05	瓦	丸瓦	(21.2)	(24.4)	(3.4)		普通	57/71 灰白	普通	マゾフ	布目瓦							
32	25	SD05	瓦	丸瓦	(17.0)	(6.0)	(4.0)		普通	57/71 灰白	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
33	25	SD05	瓦	丸瓦	(12.0)	(無)	(無)		普通	2.578/2 灰白	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
34	25	38	SD05	瓦	(26.8)	(無)	(無)	16.9	3mm 以下の白無釉乾き瓦	2.578/2 灰白、 2.578/1 無釉	普通	横目29キ	布目瓦							
35	25	38	SD05	瓦	(33.5)	(10.0)	(3.7)	15.5	5mm 以下の白無釉乾き瓦	2.578/2 灰白	普通	横目29キ	布目瓦							
36	25	38	SD05	瓦	(32.7)	(無)	(無)	17.1	2mm 以下の白無釉乾き瓦	2.578/2 灰白	普通	横目29キ	布目瓦							
37	25	39	SD05	瓦	(22.1)	(無)	(無)	15.4	3mm 以下の白無釉乾き瓦	2.578/2 灰白	普通	ナゾ、横目29キ	布目瓦							
38	26	SD05	瓦	丸瓦	9.3	(無)	(無)	6mm 以下の白無釉乾き瓦	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	10788/2 灰白	普通	マゾフ	マゾフ	
39	26	SD06	瓦	丸瓦	(12.0)	(有)	(有)	1.1m 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	良好	マゾフ	十字目、布目瓦	
40	26	SD06	瓦	丸瓦	(12.3)	(有)	(有)	2mm 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦	
41	26	SD06	瓦	丸瓦	(9.2)	(有)	(有)	1.1m 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦	
42	26	SD06	瓦	丸瓦	(9.2)	(有)	(有)	2mm 以下の赤色・半透明小粒乾き瓦	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦	
43	26	39	SD06	瓦	(12.2)	(有)	(有)	1.1m 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦	
44	26	SD06	瓦	丸瓦	(23.7)	(有)	(有)	(14.6)	2mm 以下の赤色・黒色無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
45	26	SD06	瓦	丸瓦	(23.7)	(有)	(有)	14.5	1mm 以下の赤色・黒色無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
46	27	39	SD06	瓦	(34.9)	(有)	(有)	11.9	3mm 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
47	27	40	SD06	瓦	(34.1)	(有)	(有)	11.0	1mm 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
48	27	40	SD06	瓦	(33.6)	(有)	(有)	16.0	1mm 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
49	27	40	SD06	瓦	(34.7)	(有)	(有)	14.3	1mm 以下の白無釉乾き瓦	NS/ 灰	普通	マゾフ	十字目、布目瓦							
50	27	SD06	瓦	平瓦	(10.0)	(有)	(有)	1mm 以下の白無釉乾き瓦	57/71 灰白	57/71 灰白	57/71 灰白	57/71 灰白	57/71 灰白	57/71 灰白	57/71 灰白	普通	十字目29キ	布目瓦		
51	27	41	SD06	瓦	(12.0)	(有)	(有)	2mm 以下の赤色・白無釉乾き瓦	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	N4/ 灰	良好	十字目29キ	十字目、布目瓦	
52	27	41	SD06	瓦	(14.4)	(有)	(有)	1.1m 以下の赤色・白無釉乾き瓦	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	良好	十字目29キ	十字目、布目瓦	
53	27	SD06	瓦	平瓦	(8.0)	(有)	(有)	1.1m 以下の白無釉乾き瓦	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	578/1 灰白	良好	横目29キ	マゾフ	

2. 瓦類観察表(2)

番号	棟瓦番号	原瓦番号	原瓦形状	原瓦種類	原瓦寸法	原瓦重量	原瓦色澤	原瓦表面	原瓦断面	原瓦備考				
											原瓦	原瓦	原瓦	原瓦
54	28	SD05	瓦	平瓦	(11.1)		2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	577/1 灰白	577/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	
55	28	SD05	瓦	平瓦	(11.6)		4mm 以下の白色砂粒を含む	良好	578/1 灰白、 N6/ 灰	578/1 灰白、 N6/ 灰	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、ナズ、赤目瓦
56	28	SD05	瓦	平瓦	(11.1)		1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N5/ 灰	578/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
57	25	SD05	瓦	平瓦	(14.7)		2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	576/1 灰	576/1 灰	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
58	28	SD05	瓦	平瓦	(15.8)		2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
59	28	SD05	瓦	平瓦	(13.1)		1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
60	30	SB01	瓦	丸瓦	(5.0)		1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ
61	30	SB01	瓦	丸瓦	(10.1)		0.5mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
62	30	SB01	瓦	平瓦	(13.3)		1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	577/1 灰白	577/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
63	32	SD07	瓦	平瓦	(7.1)	(無)	1mm 以下の白色砂粒を含む	不良	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
64	32	SD07	瓦	丸瓦	34.0	(10.3)	4mm 以下の白色砂粒を含む	普通	7.578/1 灰白	7.578/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
65	32	SD07	瓦	丸瓦	(16.5)	(10.3)	4mm 以下の白色砂粒を含む	普通	578/1 灰白	578/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
66	34	SD03	瓦	平瓦	(20.7)	(15.1)	1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	10788/1 灰白	10788/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
67	36	SD02	瓦	丸瓦	(15.7)	(4.0)	1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
68	38	SD03	瓦	平瓦	(15.4)		3mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
69	45	SK03	瓦	丸瓦	(10.8)	(4.9)	1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	N2/ 灰	N2/ 灰	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
70	45	SK03	瓦	丸瓦	(17.3)	(12.0)	2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	2.576/4 灰白	2.576/4 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
71	45	SK03	瓦	丸瓦	(17.8)	(無)	2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	2.576/2 灰白	2.576/2 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦
72	45	SK03	瓦	丸瓦	(15.9)	(無)	2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	10788/1 灰白	10788/1 灰白	横目タタキ	凸面	田面	ケズリ、赤目瓦

2. 瓦類観察表 (3)

観文番号	調査番号	標記番号	標記番号	器種	全長寸 (底付部)	器高寸 (底付部)	底面径寸 (底付部)	胎土	焼成	色調		整飾・調整		備考	
										凸面	凹面	凸面	凹面		
102	45		SK03	瓦	10.1 (無付)	10.1 (無付)	100以下の黒色砂粒を含む	普通	2.5X1/1 灰白	2.5X6/2 灰黄	黒目299キ後ナズ	凸面	同面		
103	45	43	SK03	瓦	46.6 (11.2) (無付)	17.6 (無付)	300以下の白色砂粒を含む	良好	2.5X7/3 淡黄、2.5X6/1 黄灰	2.5X7/3 淡黄、2.5X6/1 黄灰	ナズ	ナズ	凸面	凸面	
104	45	44	SK03	瓦	(20.2)		200以下の白色砂粒を含む	普通	N6/ 灰	N6/ 灰	ナズ、胎目299キ	ナズ、胎目299キ	ナズ、胎目299キ	ナズ、胎目299キ	
105	45	44	SK03	瓦	(22.0)	(8.4)	300以下の白色砂粒を含む	良好	7.5X7/6 靑	7.5X7/6 靑	胎目1429キ	胎目1429キ	胎目1429キ	胎目1429キ	
106	46	44	SK02	瓦	(23.7)	(21.0)	100以下の黒色、白色砂粒を含む	普通	10.5X7/4 淡黄、N6/ 灰	10.5X7/4 淡黄、N6/ 灰	淡黄、胎目299キ、ナズ	淡黄、胎目299キ、ナズ	淡黄、胎目299キ、ナズ	淡黄、胎目299キ、ナズ	
107	46	45	SK03	瓦	(24.7)	(5.7)	300以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X8/3 淡黄	2.5X8/3 淡黄	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
108	46	45	SK03	瓦	(22.4)	(18.2)	300以下の白色、黒色砂粒を含む	普通	2.5X8/2 灰白	2.5X8/2 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
109	46	46	SK03	瓦	(24.1)	(4.6)	100以下の白色砂粒を含む	良好	N3/ 暗灰、2.5X7/1 灰白	N3/ 暗灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
110	46	46	SK03	瓦	(19.6)	(7.8)	100以下の白色砂粒を含む	普通	N3/ 暗灰、2.5X7/1 灰白	N3/ 暗灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
111	46	45	SK03	瓦	(21.9)	(12.8)	0.5mm 以下の白色砂粒を含む	普通	N4/ 灰、2.5X7/1 灰白	2.5X7/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
112	46	46	SK03	瓦	(16.5)	23.0	0.5mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X8/1 灰白	2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
113	47	46	SK03	瓦	(17.6)		100以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X9/1 灰白、N4/ 灰	2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
114	47	46	SK03	瓦	(21.3)	(17.0)	100以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X9/1 黄灰	2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
115	47	47	SK03	瓦	(19.3)		100以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X9/1 黄灰	2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
116	47	47	SK03	瓦	(13.0)		100以下の黄色砂粒を含む	普通	2.5X9/1 灰白	2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
117	47	47	SK03	瓦	(18.3)		100以下の白色砂粒を含む	良好	N3/ 暗灰、2.5X8/1 灰白	N3/ 暗灰、2.5X8/1 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
118	47	47	SK03	瓦	(22.2)	(7.9)	100以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X9/1 灰白	N6/ 灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
119	47	47	SK03	瓦	32.9	21.8	100以下の白色砂粒を含む	普通	7.5X/2 淡黄	9Y/1 灰白	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	
120	48	42	SK03	瓦	(18.7)		100以下の白色砂粒を含む	普通	10.0X7/2 淡黄	10.0X7/2 淡黄	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	胎目299キ、胎目299キ	
121	48	46	SK03	瓦	(26.7)		200以下の白色砂粒を含む	良好	N4/ 灰	N4/ 灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
122	48		SK03	瓦	(27.5)		100以下の白色砂粒を含む	普通	N6/ 灰	N6/ 灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
123	48		SK03	瓦	(16.0)	(15.2)	100以下の白色砂粒を含む	良好	2.5X7/1 淡黄、N3/ 灰	2.5X7/1 淡黄、N3/ 灰	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	
124	48		SK03	瓦	(17.9)	(14.8)	0.5mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.5X8/2 灰白	2.5X8/2 灰白	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	胎目299キ	

2. 瓦類観察表 (4)

観測番号	採得番号	採得地	産地	全長 (mm)	横径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	色澤 (採得時)	色澤 (観察時)	断面	破成	色澤		形状・調整		備考
												凸面	凹面	凸面	凹面	
125	48	SK03	平瓦	(19.6)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	横目タタキ	タテ、着目横	
126	48	SK03	瓦	35.0	(5.2)			1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
127	48	SK03	平瓦	(18.8)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	2.5Y6/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
128	48	SK03	瓦	(18.7)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
196	61	SF71	瓦	(11.7)	(6.0)	(厚)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5Y4/1 黄灰、 N5/ 灰	2.5Y4/1 黄灰、 N5/ 灰	2.5Y4/1 黄灰、 N5/ 灰	2.5Y4/1 黄灰、 N5/ 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
203	69	SK01	瓦	(12.4)				3m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
211	70	SK02	瓦	(10.2)				3m 以下、茶色砂状を含む	普通	5Y8/4 淡黄	5Y8/4 淡黄	5Y8/4 淡黄	5Y8/4 淡黄	横目タタキ	タテ、着目横	
212	70	SK02	瓦	(8.7)				1.5m 以下の白色砂状を含む	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
213	70	SK02	瓦	(8.0)	(10.7)	(厚)		2m 以下の白色砂状を含む	良好	10Y8/1 暗赤灰	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
214	70	SK02	瓦	(13.6)	(11.4)	(厚)		2m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰、 5Y8/4 淡黄	7.5Y8/1 黄灰	7.5Y8/1 黄灰	7.5Y8/1 黄灰	横目タタキ	タテ、着目横	
215	70	SK02	瓦	15.8	(5.0)	(厚)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	N3/ 暗灰、 N4/ 灰	N3/ 暗灰、 N4/ 灰	N3/ 暗灰、 N4/ 灰	N3/ 暗灰、 N4/ 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
216	70	SK02	瓦	(10.2)				1m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
217	70	SK02	瓦	(18.2)	(5.5)	(厚)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
218	71	SK02	瓦	(19.0)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	10Y8/3 淡黄緑	10Y8/3 淡黄緑	10Y8/3 淡黄緑	10Y8/3 淡黄緑	横目タタキ	タテ、着目横	
219	71	SK02	瓦	(21.3)				(13.9) 2m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
220	71	SK02	瓦	(19.1)				2m 以下の白色砂状を含む	普通	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
221	71	SK02	瓦	(21.8)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	N2/ 黒	N2/ 黒	N2/ 黒	N2/ 黒	横目タタキ	タテ、着目横	
222	71	SK02	瓦	(19.9)				1m 以下の白色砂状を含む	良好	N2/1 黒	N2/1 黒	N2/1 黒	N2/1 黒	横目タタキ	タテ、着目横	
223	71	SK02	瓦	(19.4)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
224	71	SK02	瓦	(5.4)				1m 以下の白色砂状を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
225	71	SK02	瓦	(16.3)				1m 以下の白色砂状を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	横目タタキ	タテ、着目横	
226	71	SK02	瓦	(16.3)				1m 以下の白色砂状を含む	普通	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	横目タタキ	タテ、着目横	
227	71	SK02	瓦	(10.5)				1m 以下の白色砂状を含む	良好	10Y8/4 淡黄緑、 N4/ 灰、 10Y8/3 淡黄緑	横目タタキ	タテ、着目横				

2. 瓦類観察表 (5)

観測番号	棟号	図号	新台番	種類	器種	全長 (実寸)	胎動幅 (実寸)	広幅幅 (実寸)	胎土	胎底	色調			形状・高さ			備考
											凸面	凹面	側面	凸面	凹面	側面	
228	72	59	SN02	瓦	平瓦	(21.5)		2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N6/ 灰	N6/ 灰	N6/ 灰	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
229	72		SN02	瓦	平瓦	(11.6)		1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N4/ 灰、N7/ 灰白	N4/ 灰、N7/ 灰白	N4/ 灰、N7/ 灰白	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
230	72		SN02	瓦	平瓦	(9.4)	(7.7)	1mm 以下の白色・褐色・黒色砂粒を含む	普通	2.577/1 灰白	2.577/1 灰白	2.577/1 灰白	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
231	72	55	SN02	瓦	平瓦	(13.2)		1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
232	72	55	SN02	瓦	平瓦	(13.7)		2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
233	72	55	SN02	瓦	平瓦	15.0	(8.5)	2mm 以下の白色砂粒を含む	良好	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
234	72		SN02	瓦	平瓦	(18.6)		2mm 以下の白色・褐色・黒色砂粒を含む	普通	10YR5/1 灰白	10YR5/1 灰白	10YR5/1 灰白	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
235	72		SN02	瓦	平瓦	(17.0)		3mm 以下の白色砂粒を含む	良好	N4/ 灰、N6/ 灰	N4/ 灰、N6/ 灰	N4/ 灰、N6/ 灰	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
236	72	55	SN02	瓦	平瓦			2mm 以下の白色砂粒を含む、1.5mm 以下の褐色砂粒を含む	普通	2.577/2 灰黄、N6/ 灰	2.577/2 灰黄、N6/ 灰	2.577/2 灰黄、N6/ 灰	横目29枚	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
237	78	61	SD05	瓦	丸瓦	34.1	(10.7) (幅厚)	3mm 以下の白色・褐色・黒色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
238	78		SD05	瓦	丸瓦	(28.0)	(9.3) (幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
239	78	61	SD06	瓦	丸瓦	33.5	(9.7) (幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
240	78	61	SD06	瓦	丸瓦	33.4	(9.6) (幅厚)	2mm 以下の白色・褐色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
241	79	60	SD06	瓦	軒丸瓦	14.4		2mm 以下の褐色砂粒を含む	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	マツノ、299枚目	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
242	79		SD06	瓦	丸瓦	(14.4)	(5.0) (幅厚)	1mm 以下の白色砂粒を含む	良好	2.577/1 灰白	2.577/1 灰白	2.577/1 灰白	299枚目	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
243	79		SD05	瓦	丸瓦	(6.2)	(幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
244	79		SD06	瓦	丸瓦	(17.7)	(6.3)	1mm 以下の白色・褐色砂粒を含む	普通	10YR6/2 灰白	10YR6/2 灰白	10YR6/2 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
245	79		SD06	瓦	丸瓦	(18.1)	(幅厚)	1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
246	79		SD06	瓦	丸瓦	(22.3)	(4.4) (幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	2.578/2 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
247	79		SD06	瓦	丸瓦	(17.2)	(6.0) (幅厚)	4mm 以下の白色砂粒を含む	普通	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナゾ、299枚目	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
248	79	62	SD05	瓦	丸瓦	33.3	(6.3) (幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
249	79	62	SD05	瓦	丸瓦	(36.5)	(幅厚)	1mm 以下の白色砂粒を含む	普通	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目
250	79		SD06	瓦	丸瓦	(25.6)	(4.4) (幅厚)	2mm 以下の白色砂粒を含む	普通	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	2.578/1 灰白	マツノ	凸面	凹面	側面	毎日観 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目 ナゾ、ナゾ、赤目

2. 瓦類調査表 (6)

標記 番号	図説 番号	製成 年次	瓦種	全瓦 数(枚数)	棟瓦 数(枚数)	比色板 番号(瓦数)	土質 説明	地蔵	色例		製作調整		備考
									戸面	側面	戸面	側面	
281	80	SD06	平瓦	(8.5)	(9.5)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	5Y7/1 灰	2.5YR/3 淡黄	赤子タタキ	戸面	ケズリ、春日振
282	80	SD06	平瓦	(7.2)			1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5YR/1 灰白、 NS/ 灰	2.5YR/3 淡黄	赤子タタキ	戸面	ケズリ、春日振
283	80	SD06	平瓦	(13.7)	(14.1)		1m 以下の白色砂状を少し含む	普通	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白、 NS/ 灰	赤子タタキ、 目タタキ	戸面	ケズリ、春日振
284	80	SD06	平瓦	(9.6)	(10.6)		1m 以下の白色砂状を含む	良好	2.5YR/1 灰白	NS/ 灰、2.5YR/1 灰白	目タタキ	側面	ケズリ、春日振
285	80	SD06	平瓦	(12.1)			2m 以下の黄色・1m 以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	NS/ 灰	目タタキ	側面	ケズリ、春日振
286	80	SD06	平瓦	(17.8)			2m 以下の白色砂状を含む	良好	5Y6/1 灰、NS/ 灰	5Y6/1 灰、NS/ 灰	目タタキ	側面	ケズリ、春日振
287	80	SD06	平瓦	(26.4)			2m 以下の黒色砂状を含む	普通	2.5YR/2 灰	2.5YR/2 灰白	目タタキ	側面	ケズリ、春日振
288	80	SD06	平瓦	(17.0)			1m 以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰	5Y6/1 灰白、NS/ 灰	目タタキ	側面	ケズリ、春日振
284	85	SD09	平瓦	(16.6)			4m 以下の白色砂状を含む	良好	NS/ 灰白	NS/ 灰	ナダ後込キ	側面	ナダ
310	88	古代以降瓦片等	瓦	(25.6)	(6.9) (編2)		5m 以下の黒色、白色、平透明砂状を含む	普通	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白	マナブ	側面	マナブ、ケズリ
311	88	古代以降瓦片等	瓦	(12.6)			3m 以下の白色砂状を含む	普通	10YR6/1 灰白	10YR6/1 灰白	目タタキ	側面	ケズリ、春日振

3. 鑄型外觀觀察表 (2)

圖文番号	種別番号	図記番号	報告書通番号	種別	芯塊	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	砂底	色調	備考
165	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	0.8	(4.2)	普通	2.5Y7/1 灰白	
166	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(2.7)	(2.6)	普通	2.5Y7/1 灰白	
167	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.2)	(4.0)	普通	2.5Y7/1 灰白	
168	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(5.2)	(4.1)	普通	2.5Y7/1 灰白	
169	51	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.4)	(5.7)	普通	2.5Y7/1 灰白	
170	51	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.5)	(5.3)	普通	2.5Y7/1 灰白	
171	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(2.6)	(2.5)	普通	2.5Y7/1 灰白	
172	51	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.1)	(4.5)	普通	2.5Y7/1 灰白	
173	51	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(2.6)	(3.2)	普通	2.5Y7/1 灰白	
174	51	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.4)	(5.4)	普通	2.5Y7/1 灰白	
175	51	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(3.6)	(5.5)	普通	2.5Y7/1 灰白	
176	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(3.8)	(4.4)	普通	2.5Y7/1 灰白	
177	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.5)	(4.7)	普通	2.5Y7/1 灰白	
178	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(2.4)	(2.5)	普通	2.5Y7/1 灰白	
179	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(2.0)	(2.1)	普通	2.5Y7/1 灰白	
180	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(3.2)	(4.0)	普通	2.5Y7/1 灰白	
181	52	51	SK03	鑄型	炭塊砂型	(8.7)	(5.8)	普通	2.5Y7/1 灰白	
182	52	52	SK03	鑄型	炭塊砂型	(4.4)	(5.1)	普通	2.5Y7/1 灰白	
183	52	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(5.7)	(7.1)	普通	2.5Y7/1 灰白	
184	52	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(6.0)	(7.1)	普通	2.5Y7/1 灰白	
185	52	50	SK03	鑄型	炭塊砂型	(6.0)	(6.0)	普通	2.5Y7/1 灰白	
186	52	52	SK03	鑄型	炭塊砂型	(5.2)	(5.0)	普通	2.5Y7/1 灰白	
187	53	52	SK03	鑄型	炭塊砂型	(6.4)	(10.6)	普通	2.5Y7/1 灰白	
188	53	52	SK03	鑄型	炭塊砂型	(8.7)	(13.3)	普通	2.5Y7/1 灰白	
189	53	52	SK03	鑄型	炭塊砂型	(6.6)	(7.6)	普通	7.5Y82/4 淺灰藍	

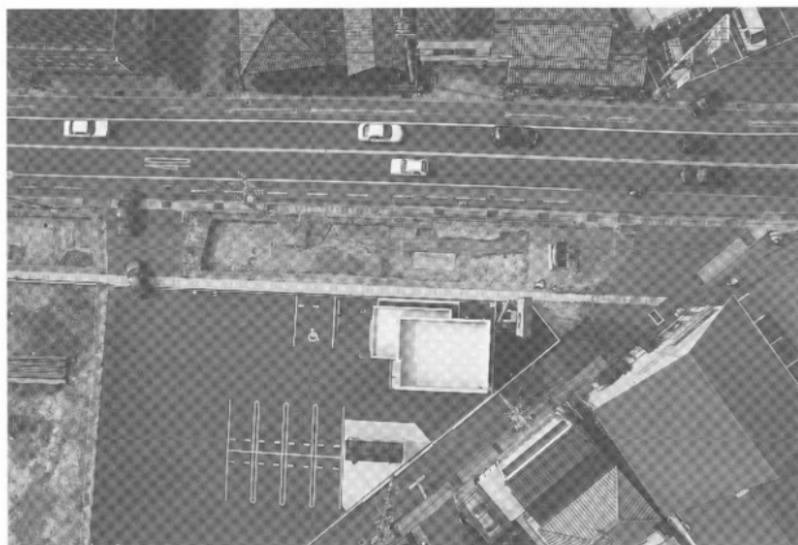
3. 鈎型類觀察表 (3)

標文番号	標文番号	図面番号	報告書番号	種類	亚種	最大長(cm)	最大幅(cm)	構成	色調	備考
181	53	52	SK03	鈎型	定盤	(6.7)	(3.0)	膠漆	2.5Y6/1 黄灰	
182	53	52	SK03	鈎型	定盤	(2.9)	(6.8)	膠漆	2.5Y8/1 灰白	
183	53	53	SK03	鈎型	定盤	(2.6)	(4.6)	膠漆	7.5YR6/1 赭灰, 7.5YR8/3 洗炭色	
184	53	52	SK03	鈎型	定盤	(4.0)	(5.7)	岩塗	7.5YR4/1 赭灰, 7.5YR8/3 洗炭色	
185	53	52	SK03	鈎型	定盤	(2.6)	(6.0)	膠漆	7.5YR4/1 赭灰, 7.5YR8/3 洗炭色	
186	53	53	SK03	鈎型	定盤	(3.1)	(4.7)	膠漆	7.5YR6/6 洗炭色, 7.5YR2/1 黑褐色	
187	54	53	SK03	鈎型	定盤	(1.6)	(7.3)	膠漆	2.5YR8/2 灰口	
188	54	53	SK03	鈎型	定盤	(3.4)	(7.8)	岩塗	5YR7/6 赭	
189	54	53	SK03	鈎型	溝口	(3.1)	(4.0)	膠漆	7.5YR8/6 洗炭色, 7.5YR6/1 赭灰	
190	54	53	SK03	鈎型	溝口	(10.1)	(5.6)	膠漆	7.5YR8/3 洗炭色, 7.5YR6/1 赭灰	
191	54	54	SK03	鈎型	溝口	(14.8)	(8.6)	岩塗	10YR8/2 灰白	

4. 石器・鉄製品調査表

標記番号	採掘番号	図面番号	組合作遺構番号	種類	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	備考
30	25		SP05	石器	磨石	22.0	15.0	3.1	1894.1	安山岩	
64	30		SP01	石器	石造丁状	4.4	3.4	1.1	17.4	オヌキイト	
58	44		SK03	石器	磨石	8.6	5.65	3.6	228.3	砂岩	
94	44		SK03	石器	磨石	8.0	8.1	3.5	330.4	砂岩	
95	44		SK03	石器	磨石	5.4	8.5	5.2	362.5	砂岩	
210	70		SK02	石器	磨石	10.1	4.3	2.5	154.7	砂岩	
229	74	55	SK02	石器	磨石	8.5	4.5	4.1	206.7	花崗岩	
240	76		SK04	金属器	釘	9.6	1.0		11.05	鉄	
250	76		SK04	金属器	釘	16.4	1.1	1.0	23.09	鉄	

写真図版



北調査区全景



南調査区全景

図版 2



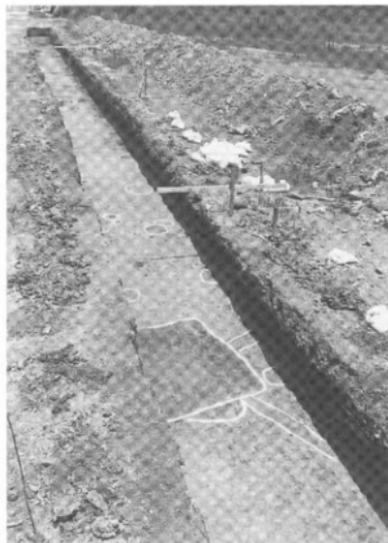
調査着手前の田村遺跡（北から）



田村廃寺 塔心礎



作業風景 (北から)



第1次調査 遺構検出状況 (南から)



第1次調査 完掘状況 (北から)



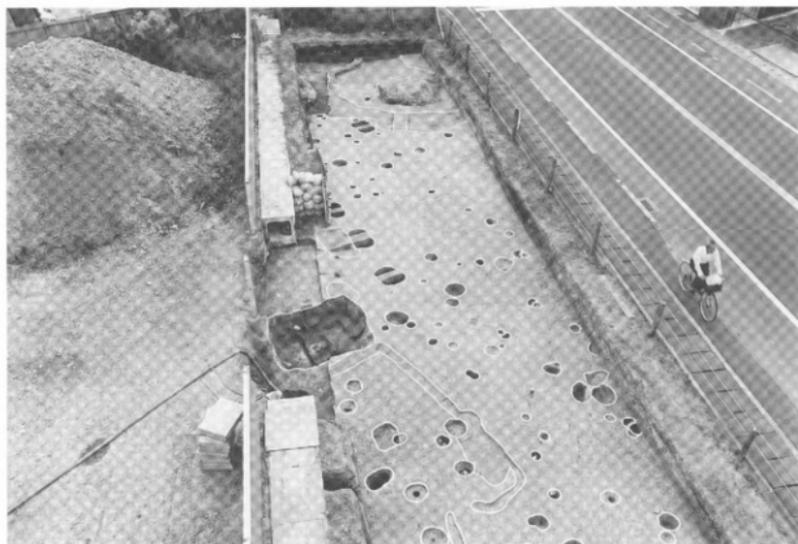
第1次調査 完掘状況（北から）



北調査区全景（南から）



南調査区全景（南から）



南調査区全景（北から）